
青い瞳の少年とドレイク

青 樹 蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い瞳の少年とドレイク

【Nコード】

N6077C

【作者名】

青 樹蒼

【あらすじ】

アルスは、王国の学院に通う十四歳の少年だ。騎士団長を勤める父を持ち、自分も騎士になる事を夢見ていた。アルスは叔父が守備隊長を勤めている“北の砦”への体験旅行に来ていた。そこへ、北の帝国の突然の侵攻が開始された。奇怪な妖魔達を味方に侵攻して来たのだ。難攻不落と謳われた砦の陥落と、叔父の死。アルスは叔父から託された書簡を父の元に届ける為、従者のエイグと砦から脱出する。なんとか辿り着いた麓の村では必死の抵抗が続いていたが、奇怪な妖魔達の前になす術も無く蹂躪されようとしていた。迫り来

る絶体絶命の窮地を、アルス達は乗り越えられるのだろうか。

一、平穩に訪れた哀しみ

一、平穩に訪れた哀しみ

荒い息遣いが聞こえる。

少年は半ば、倒れるように木にもたれかかって辺りを警戒し、その呼吸を整えようと必死になっていた。

森の中であつた。

木の枝や葉が夕暮れ時の薄赤い陽の光を遮り、辺りを余計に薄暗くさせていた。どこかで囀っていた小鳥の鳴き声がやんでいる。

ーザッザッ

人の足音が聞こえてくる。少年は息を潜め、近くの茂みに身を隠した。足音だけでは、追っ手は何人いるのかさえわからない。少年はまだ、足音から人数を数えられるほどのすべ術は持ち合わせていなかった。

まだ整えられていない呼吸を無理やり喉の奥に押し込めて、少年は少し身体を起こした。

「おいっ、どこにもいないぞっ！」

男の声だ。

その汚い声には怒りがこもっているのが感じられた。

「あんなガキ、一人逃げたくらいでどうこうなるもんじゃないだろがっ」

中肉中背の、禿げ頭の男だつた。身に着けた粗末な鎧の隙間から覗いている筋肉は、成人した男の物だと一目でわかる。腰に吊るした少し大きめのシミターも、粗末な鞘に入っていた。柄にぼる布が巻いてある。

たいして乱れてもない呼吸を整えるように、肩を大きく開き胸を張った。

男は誰に言うともなくぶつぶつと悪態をつくと、近くにあつた木

の枝を蹴った。

ードサッ

少年の足元に木が落ちてきた。

一瞬、驚いて声を上げそうになったが、慌てて口を塞いでなんとかやり過ぐすと、少年は自分を探しているその男たちに再び注意を向けた。学院で学んだ森の中での、獲物から身を守る時のための講義をきちんと聞いておいて良かったと思った。

「いいか。相手が辺りに目を向けている時は、こちらから動いてはいけない」

講師のガーミツクの言葉が思い出される。だが、少年が教えてもらったのはそこまでであった。獲物を狩るための方法も獲物がいるその場から逃げる方法も、彼ははまだ教えてもらってはいない。それでも今の少年には十分と思えた。

目の前の獲物から身を隠していらればいい・・・。

少年はそう思うと、音を立てないように気を遣いながら、男たちの方へ警戒した意識を向けていた。

禿げ頭の男がぶつぶつ言いながら、自分が蹴った木の枝を捜しにこちらへ近づいてくる。

「いねえな・・・」

しゃがれた別の男の声がした。こちらは粗末な鎧とロング・ソードを腰にぶら下げていた。

「向こうを探すぞ」

禿げ頭の男をはさんで、ちょうど少年の反対側を捜していたらしいそのしゃがれた声の男は、そう促すとさっさと向こうへ歩いて行ってしまった。追っ手はどうやら二人だけのようだ。近くにはまだ、他にもいるかもしれない。

しゃがれた声は、それでも、禿げ頭の男の注意をそらすには十分だった。

「ちっ」

そう男は吐き捨てると、踵を返してしゃがれた声の男の後に続い

た。

「ふう・・・」

しばらく経つと少年はため息をついて、また木にもたれかかり、少し身体を休めた。

旅用に丈夫な麻布でできた、少しばかり立派な服は所々破れ、その隙間から覗いている肌にはうつすらと赤いものが滲んでいる。

「捕まつてたまるか」

少年は静かに呟いた。その蒼い色の目には力強い輝きが浮かんでいる。

少年の髪は少し薄い茶色をしていた。端正な顔立ちではあったが、まだあどけなさの残るその顔には、不安そうな、でも強い表情が浮かんでいた。

少年はまだ十四歳であった。来年の春、学院を卒業し騎士見習いになるつもりでいた。学院では、貴族から平民の子供までが一緒に生活をしていたが、ほとんどの貴族の子息は騎士になることを望んでいた。少年も例外ではなかった。

しばらく時間が経ち、呼吸も整うと少年は立ち上がり歩き始めた。周囲に注意しながら少しずつ、前を見て・・・。

数日前。

ここは、ユーゼリアス大陸の西にある王国の西の端にある港町シユプールから、東へ歩いて三十日ほどのところにある小さな村。

王国の名前はシエルバリエ。村の名前はティルトと言った。村の東側から北側は湖に囲まれていた。そのさらに外側を、シユプールを越えて海まで続く山脈があり、秋の紅葉を迎えようとしていた。その村の北にある山脈を越えると、近年、治める者の交代に伴って不穏な動きを見せる別の国がある。

人口二百人ほどの国境に近い山間の村だ。

周囲は険しい山々に囲まれた農耕と狩猟で生計を立てる、とりわけ豊かな村ではなかった。

険しいが、村の北の山にはガルバス北の帝国への近道があり、旅人が足を運ぶくらいだ。自然の静けさの中で、秋にはその年の収穫を山の神々に感謝して村人は暮らしていた。

だが、その日の村は慌しかった。

まだ夏の日差しの残る中、大人達は村の広場に集まり、そこで議論を繰り返していた。

「・・・しかし、それでは・・・村を捨てるとおっしゃるのか？」

その男の言葉には、明らかな戸惑いと不安が感じられた。

老人だった。生きてきた歳月を感じさせる真っ白な髪は腰まで伸び、そこで束ねられている。髪と同じ色の豊かなひげのその男は、足が不自由らしく杖をついていた。

「しかし、ミゼム殿・・・」

そう答えたのは広場の中央に立ち、村人の戸惑う視線を浴びていた男だった。

騎士であった。無骨な鎧を身に付け、腰には騎士たちが一般に良く使うバスタード・ソードを吊るしている。左手にはシエルバリエ王国騎士団の紋章の入った楯を、内側にある皮のベルトに腕を通していた。戦の時は楯の内側にある、ベルトより外側に付いている取っ手を握って腕と楯を固定する。今は左手に、脱いでいる兜を抱えていた。鎧の左胸にも同じく、シエルバリエ王国の紋章が小さく浮き彫りにされていた。

精悍な顔立ちで、茶色い髪の少し背の高い騎士は隣にいる別の騎士に一瞬目をやると、視線を戻してそのまま続けた。

「・・・これは国王の御命令なのです。ガルバスが侵攻して来ているのです。」

ミゼムと呼ばれた老人はこのティルトの村長であった。

すでに高齢になり、あまり自由に動けるとはいえない身体を庇うように立っている。傍らには若い娘が寄り添っていた。

ミゼムの孫娘であった。娘はミゼムに寄り添うように身体を支え

ながら、おびえた目をその騎士に向けている。娘だけではなかった。その場に集まっている村人たちは一様に不安の目を騎士たちに向けていた。

「大丈夫じゃ。セリル・・・」

そう言つて、ミゼムは孫娘に目をやると右手でそつと孫娘の黒髪をなでながら呟いた。

「しかし・・・」

ミゼムはまだ、納得がいかない顔をしながら騎士の言葉を待った。当たり前であつた。生まれた時からこの村で暮らし、村の外へなど出る事も無く暮らしてきたのだ。ミゼムだけではなかった。この村のほとんどの人が同じであつた。いくら同じ国とはいえ、村の外へなど、なにか特別な用事でも無い限り誰も行った事が無いのである。「ここは北の国境の砦と王都シエルバリ、それにシュプールのちょうど中間に位置しています。ここで敵の侵攻を食い止める事ができれば王国は持ち堪えられます。」

隣にいた騎士が言葉を続けた。

「現在、北の砦では交戦状態にあるのです。しかも相手には、得体の知れない子どもが力を貸しているようなのです。いつ砦が陥とされるかわからない状態となっているのです。」

騎士の言葉を聞き、少なからず村人たちの輪に動揺が広がる。

それもそのはずであつた。北の砦は王国が建国される前から、一度も陥ちた事の無い砦であつた。しかも帝国には、得体の知れない者が力を貸しているという。

この世界では妖魔や魔物といった類の物は、どこかの言い伝えやお伽話の中にしか存在しないのだ。はるか昔には存在したそれらも数百年前の《封印戦争》で、北の大地に眠る古代の遺跡の中に封印されたはずであつた。

王国の北側は険しい山脈に囲まれている。砦は唯一の帝国に通じる道の上に築かれていた。最も、築かれた当初は別の敵を警戒していたのだが、今は王国の北の国境を守っている。

それが陥落寸前というのである。すぐに信じられる物ではなかった。騎士の話によると、数日前に砦から伝書鳩が飛ばされ、砦がガルバス帝国から侵攻を受けている事。人間ではない、獣のような者が敵の軍勢の中にいる事。それが圧倒的な力を持っている事。このままでは砦はそう長くは持ちそうに無い事が王都へ伝えられたというのだ。

その為、国王レイリック八世は村を急遽、守備拠点として使い、砦を支援するように指示を出してきたのである。目の前の騎士達は、ティルトの西、徒歩なら三日ほどの位置にあるタンカスという小さな街に詰めていた騎士達であった。

すでに王国の騎士団は王都を離れ、この村へ向かっているというのだ。

村には働ける男たちを残して柵や見張り台などの建設を行ってもらい、戦えない女や子供、老人たちを港町シユプールへ避難させるように伝えてきたのである。タンカスや周辺の村でもすでに避難は進められているという。

村人の中には砦が落ちそうである事への不安と、信じられないといった動揺の声が上がる。

その昔、北の砦はこの村人たちの祖先が築いたのである。この村はその砦に物資を補給するために作られた村であった。

この王国が建国された時にその任を解かれ、村人は農民へと変わった。

今でも、北の砦が難攻不落の砦であることは村人たちの自慢であり、そして安心でもあった。

その砦が陥落しそうだというのだ。

確かに、この村は初めから砦が陥落した時の事を考えて作られていた。北の山から下る川は、村の東北から東側を回り、東南にかけて湖を作っていた。人工的な湖であった。その後ろには山があり、これも村を守る一つの役目をしていた。

騎士達はこの村を、その昔与えられた役目として使いたいと言って

来たのである。

しばらくのやり取りの後、少し考えたミゼムは言った。

「解りました・・・。」

少し戸惑った、でもしつかりとした口調で答えた。

「その昔、われらの祖先はあの砦を築き、そして砦を維持させる目的でこの村を作った・・・。今、再びこの村が本来の目的の元に扱われる事は、決して不名誉でもなんでもない・・・。」

周りに言い聞かせる様にミゼムは呟くと、声を少し大きくして取り巻いている村人たちに告げた。

「今より、ここは騎士団の陣地として使われる。男たちは村へ残り、騎士団に協力するのだ。女子供、動けない物はシュプールへ避難する。」

そういつて、老人はいくつかの指示を出すと騎士に頭を下げ「旅支度をする」と言つて、孫娘に支えられながらその場を離れた。

村人の中にはまだ異論のある者もいたが、それでも敵が迫っていると聞いて村に留まろうとする者は、ほとんどいなかった。

男たちを残して一時間ほどの後、村の者は海から続く小さな街道を西へ旅立った。

「どうなるのか・・・」

ミゼムだった。年老いた村長は小さな荷車に乗り、不自由な足をさすりながら呟いた。

セリルは荷車を引く牛の隣で気遣うような視線をミゼムに向けると言った。

「騎士様たちが守ってくれます。また、村に戻れますよ。きっと・・・」

セリルは黒い瞳で少し笑いかけながら、不安さの滲み出る声をかけると、すぐに前を向いて歩いた。

「そうだと良いのだが・・・」不安でいっぱいであろう孫娘の、その心中を察してため息をついた。

セルルは幼い頃に両親を亡くし、祖父の手一つで育ててきた。それでも優しい娘に育ってくれた事が何よりだと思えた。まだ紅葉の始まっていない山々を見上げて、ミゼムは孫娘の行く末を心配していた。

老人は、夏の強さを残す日差しを受けながら、そつと目を閉じて眠りに落ちていった。

ミゼム達が出発してから残った男たちは騎士達と話し合い、新たな見張り台や馬除けの柵などを作っていた。

村の中心から西側とその周辺から、金属の打たれる音や威勢の良い男たちの掛け声が聞こえてくる。

「アスター、こっちはもう少して完成だ」

赤いボサボサの髪の毛をぐしゃぐしゃかきむしりながら、その男は言った。まるで熊かと思うほどの大男だった。

「そうか・・・それじゃあ、入り口の方を手伝ってやってくれ。ジエイズ」

アスターと呼ばれた男は、手に持っていた羊皮紙に何かを書くという言い残して、その場を去っていった。

村には50名ほどの男たちが残り、村の外側から入り口付近などを改良していた。

元々、人工的に作られた湖に囲まれるように作られている。さらに外敵から攻め込まれた時の事を考えて作られている為、小さな村には似つかわしくないほどの立派な石壁と門があった。

ただ、何百年も使われていなかった為に、ところどころ痛んでいた。入り口の門は農作業に邪魔であったため取り外されている。

見張り台はすでに無く、門の脇にひっそりと名残の土台が風化したまま残っているだけであった。

村人は、新たな見張り台をその場所に作り、門の外に柵を設けていた。

「門を作ることはできないと？」

昼間でも薄暗い天幕の中で、奥に腰掛けた少しやせている長身の男がそういった。

投げかけられた男はアスターだった。アスターは村長の親戚に当たる男であつた。セリルとは従兄弟になる。

黒い髪を短く切りそろえて、動き易そうな農作業用の服を着ている手には丸め込んだ羊皮紙を持っていた。歳は二十台半ばだろうか。少し険しい表情のその青年は、じつと天幕の奥にいる相手に灰色の眼を向けている。その様子はまるで、自分が背負った責任と対峙しているかのようでもあつた。

身体の自由の利かないミゼムに代わつて村に残り、村人の代表として騎士達との話し合いを行う立場にいる。アスターには、村人への責任があつた。

「はい。門を作るにはそれなりの日数と材料が必要です・・・」

「そんなことは解っている」

少し怒りのこもつた声で、間髪いれずに答えたのは長身の男であつた。無骨な鎧を身に付けていて、腰には実用性を考えて作られた、飾り気の無いバスタード・ソードを吊るしている。胸には王国の紋章が浮き彫りにされていた。騎士団の先遣部隊として村に来ていた部隊長であつた。名前をジュランと言つた。鎧の右肩には、部隊長を示す緑色の布が巻かれている。それを除けば他の騎士と同じ戦装束であつた。兜は脇にあるテーブルの上に置かれ、楯はその下に立てかけてあつた。

天幕には、他に3人の騎士がいた。ジュラン以外の騎士は脇に立っていたが、ジュランは用意された椅子に腰を下ろし、先ほどまで目を通していた村の周辺と王国の領土図に右手を添えたままの姿勢でこちらを見ている。

門は大きな物であつた。外的の進入を防ぐ目的で作られた門である。当たり前であつた。人の背にして五人分は軽く超えるような高さの

門を作るのか、それとも、入り口の周りを柵で囲んで門の変わりとして敵の侵入を防ぐのかを議論していたのである。

「確かに時間がかかるであろう。だが、門が無ければいくら石壁があっても、何の意味も成すまい」

詰め寄るような口調でアスターにそう言い放った。

「しかし・・・」

そう言いかけてアスターはやめた。

この騎士の言う事が正しいのは、攻城術や用兵術などを学んでいない自分の目にも明らかであったからだ。それにもし、万が一この村を陥とされる事があれば、シユプールに避難した他の村人も王国の運命も、厳しい物になる事は明白であった。

もともと、本当に妖魔や魔物といった存在がいるのであれば、どこまで有効なのかは判らなかったのだが。

「・・・解りました。なんとか急いでみます」

もはや議論の余地は無かった。アスターはそう言い残すと、軽く頭を下げて天幕を後にした。そんな事にならなければ良い。そう小さく呟いた。

あの騎士の言う事が正しいと、もう一度心の中で呟きながら、村人達が作業をしている場所へ指示を伝えるために向かって行った。

「ここは守らなければいけない・・・」

アスターは主だったものを集めてから、先ほどのやり取りを説明し、最後にそう付け加えた。

村人達が戦について全く知らなくても、門の無い石壁など、そうそう守りきれぬ物でない事は見ればすぐに解る事である。多少は反対の声が上がったが、自分達が何をしなければいけないのかは良く解っているつもりだった。

反対の声を挙げた者達の説得を済ませ、アスターは門の製作の支持をして自分も作業に加わっていった。

赤く空が燃えていた。

砦が燃えているのだ。難攻不落といわれ、今まで一度として敵の侵入を許した事の無い砦が、燃えていた。初秋の黒い空をゆらゆらと炙っているように、その光景は幻想的に見えていた。

空は真つ赤に染め上げられ、真つ黒な夜空に赤い絵の具をぶちまけたように見えた。

村は大騒ぎであつた。

村人は、時折見上げる砦を不安げに見守りながら、夜も門や見張り台を作るのに働いていた。

そこへ、砦に火の手が上がったのである。

「そんな・・・」

「まさか・・・」

村人は手を止めて、北の空を見上げていた。

「なんとっ」

ジユランは表のざわめきを感じ取り、天幕から出て北の空を見上げると驚愕の声を上げていた。天幕や石壁の上で見張りについていた騎士達も、同じように北の空を見上げている。村の広場の脇に口ープでつないである馬たちも、ざわめく村人たちの気配に敏感に反応して嘶いていた。

まさか、砦が燃えるとは思ってもいなかったからだ。どんなに厳しい戦況であろうと砦は持ち堪える。そう思っていた。砦には国境守備隊として常時三百人ほどの守備隊と騎士が百人ほど詰めていた。砦の堅牢さとその数の兵力があれば、どんな敵からも守れると思われていたのだ。

「オルス、もはや一刻の猶予も無い、早ければ明後日までに敵の襲来があるかも知れん、見張り台は後回しだ。急ぎ門を作れとアスターに伝えよっ」

「はっ」

傍らにいた若い騎士は、自分が言われたのだと気付くと、略式の挨拶をしてからすぐにその場を後にした。

まだ騎士団本隊は到着していない。ジュランがタンカスから連れてきている騎士達は十名ほどしかないのである。残りの守備隊は副官に任せ、街の守りを固めるように指示してタンカスに置いて来たのだ。

本来なら、先遣隊と呼ぶにはあまりにも数の少ない部隊である。後は戦いの経験も知識も無い農民たちであった。

「このままでは耐えられん」

いかに堅牢な石壁があつたとしても、門の無い砦など、陥とすのに百名ほどの兵力もいらなidarうと思われた。今の村は砦としてはあまりにも脆弱であつた。

二、逃避行

兵士たちの断末魔の声が聞こえてくる。

金属の打ち合わされる音や、耳に刺さるような魔物の鳴き声が広間まで響いてきていた。

「もはやこれまでか・・・」

白い髪の毛を首の後ろで短く束ねた男は、独り言のようにそう呟いた。男は端正な顔立ちの初老の騎士であった。無骨な、だが、周りにいる騎士とは明らかに違う立派な鎧を身に着けていた。右肩には紫色の布が巻いてある。

その男は名前をガイスと言った。この北の砦の守備隊長である。

ここは北の砦。

王国の北に位置する山脈の中にある、王国と北の大地を結ぶ唯一の街道の上に設けられた砦であった。険しい山と山の間からまるで生えている様にそびえる大きな砦。

砦には左右に二つの塔が建てられ、見張り台の役目をしていた。その南側を山から山へ結ぶように砦の母屋が築かれていた。塔の北側には、これもまた山から山へ結ぶように弧を描きながら、城壁が築かれている。街道は砦の母屋と城壁の中央を貫くような形で延びていた。

二日前の未明のこと。

突然、砦の中に大量の投石があり、右の塔が崩れた。砦の北側は見通しが良く、攻城用の投石機を運んでいけば見えるはずなのだが、攻撃を受けた後になるまで見張りは全くその姿を発見する事ができなかったのだ。そればかりではない。近づく帝国兵も発見する事はできなかった。

その投石を合図に、帝国の紋章を付けた兵が大挙して侵攻して来たのである。しかも、帝国兵は恐ろしい魔物どもを従えていた。

最初、右の塔を崩された時に、砦の兵士が数十人ほど犠牲になっていた。その後も支援は無く、ほぼ孤立した状態であった。王都からの距離を考えれば当然なのだが。

砦は切り立った山と山の間に作られていた。

北の街道を通るにはこの砦を抜ける以外に道は無いため、砦の北側だけ守りを固めていれば守り通せる形状をしていた。

籠城すれば軽く半年は耐えられるように作られていたが、砦の後ろにはたいした防壁があるわけでもなく、自国の側からであれば入りはほぼ自由であった。それは、万が一砦を攻め落とされた時に、南側を守りにくくするための配慮でもあった。平時であれば関所の役割も持っている。

襲撃のあったその時、急ぎ、伝書鳩を飛ばし王都へ連絡したのだが、敵には人間の手に余るほどの力を持つ妖魔が混じっていた。

幸いにも数が少なかった為、なんとか退ける事ができた。このまま籠城をして援軍を待つ事になっているのだが、王都から騎士団が到着するには、馬の足でも2週間ほどかかると思われた。

しかし、三日目にして砦はすでに危機を迎えていた。その日の午後、砦を守っていた門は妖魔達の恐るべき力で破壊され、帝国兵達は砦の中に雪崩れ込んで来たのである。

必死になって戦ってはいるが、帝国の軍勢は千人を超えるほどの大規模な物であった。

夜まで耐えていたのが不思議なくらいである。

「ここを落とされるわけには行かない・・・」

ガイスはまるで独り言のようにつぶやいた。

「だが、もはやこの砦の命運も尽きかけている。ここが突破されれば、王都もシュプールも、その近隣の街や村も全て危険に晒されるであろう。なんとしても、それは食い止めねばならんっ」

ガイスは一呼吸置くと、周りにいる騎士達に向かって力強く叫んだ。

「持てる最後の力を振り絞り、この砦を死守したいと思う。諸君ら

の命、このわしが預かるうつ」

ガイスはそう言い、腰に吊るした剣の柄に手をかけてそれを引き抜くと、高らかに掲げる。ガイスの言葉に、その場にいた騎士たちが一斉に声を上げて勇気を鼓舞しあった。

そして皆、兜をかぶり、剣を引き抜いて部屋を後にした。

外では凄惨な光景が繰り広げられていた。

味方の兵はすでにほとんどが討たれ、無残な骸を石畳の上に晒していた。屍の上には妖魔が乗り、勝ち誇った様に両手を上げて何か喚いている。生き残った者たちは小さな集団となり、まだ必死に抵抗を続けていた。

野外とは違って砦の中は狭く、小さな堀に区切られている事が幸いしていた。一度に大勢の相手をしなくても戦えるからある。しかし、その抵抗も時間の問題だと思われた。

砦にいたはずの騎士もすでに半分以上が討たれ、兵士たちもわずかしが残っていないかったのである。

「広間を背に立てこもる。動ける者は全て武器を取れ！ 怪我をした者は後ろに下がらせろ！」

ガイスは中央の広間を背に戦うように指示を出すと、そこに立つたまま剣を杖のようにして戦況を見据えた。

砦の広間の前には広めの通路があつて、少し高めの壁が外側にある。敵からの矢を防げるようになっていて、壁には小さな穴が開いていた。そこから矢を放つ事ができるようになっている。視界は狭いが、その穴から砦の中庭を見下ろせる様にもなっていた。中庭はすでに敵の大群によって埋め尽くされ、味方は屍となって転がっている。

戦の喧騒は、建物の中から聞こえてくる。建物の中では、まだ味方が抵抗していると思われた。それも制圧されるのは時間の問題であらう事が伺える。

ふいに、敵の部隊長とおぼしき者がこちらを指差して何かを言っているのが見えた。ここを見つけたのだろう。

「直に敵の大群が来る。命ある限り、ここを守れ！」

ガイスはそう叫ぶと、近くにいた従者に命じて伝書鳩を一羽用意するように命じた。それを聞き、ガイスの傍らにいた鎧と槍で武装した従者は一礼すると広間の向こうへ歩いていった。ちょうど通路と、広間を挟んで反対側の一角に連絡用に使う鳩達を飼育している巣があった。

ガイスは再び、戦況を確認しようと辺りを見回した。

「？」

ガイスは目を疑った。

広間の前に集まった味方の兵達の後ろに、その影を見つけたからだ。ガイスにとって見覚えのあるその顔は、まだ幼さを残した少年の顔であった。

「アルス、なぜ、こんなところにいるのだ」

外では戦の喧騒が収まりつつあった。建物内の別の場所で抵抗している味方も、そのほとんどが討ち取られ、広間の前に集まっている者達が最後の兵だろう。

ガイスは外の様子に神経を傾けながら、厳しい表情をアルスと呼ばれた少年に向けていた。その眼にはどこか優しそうな光が見て取れる。ガイスは少年と話をする為に、広間の前の通路から少し離れた広間の壁の際にいた。

「ごめんなさい、叔父さん・・・でも、何か手伝いたくて、黙って行くななんてできなかつたんだ」

少年はガイスを叔父さんと呼んだ。少し怯えた表情をしている少年の藍色の瞳には意志の強さも伺える。

その少年はガイスの兄の子であった。自分も将来、騎士になる事を望んで皆へ研修に来ていたのだ。

王国には学院がある。王国の全ての子供は十一歳を数える頃から、

学院に入ること許され、教育を受けるのだ。平民の子も貴族の子息も同じに扱われる。中にはそれに不満を持つ貴族達も少なからずいるが、建国当初からの慣わしに表立って異論を唱えるものはいない。そして、十四歳を迎えるとそれぞれの将来によって課題を分けられ、学ぶのである。もつとも、その学院へはほとんどが貴族や裕福な平民の子しかいなく、一般の子供のほとんどが通ってはいないが・・・。

だが、それは決して学院に収めるお金が無いわけではない。中にはそういった貧しい者達もいるのだが、大半の農民の子供らは家の手伝いに追われ、学院に通わせてもらってはいないのだ。

アルスも学院の生徒の一人である。

騎士の子供として生まれたアルスは、自分も将来、騎士になる事に何のためらいも無く育ってきた。そして、十五歳になる頃には騎士見習いになるつもりでいたのだ。

騎士になる為、生徒達は卒業前に北の砦を訪問し、砦での研修を行うことになっているのである。王国では昔からの慣わしであった。ちょうど、騎士志願の生徒達の研修をする季節でもあったのだ。

二日前のガルバス侵攻の折、真っ先に逃がしたはずの見慣れた少年は、薄茶色の髪の毛を風に揺らしながら、ガイスを見上げている。兄にそっくりだ。そう思いつつもガイスはさらに厳しい表情を作り、少年にすぐにここから逃げ出すように言った。

有無を言わさぬ口調であった。「ここは危ないのだ。アルス」

ガイスはそこまで言うのと、ふと思いついたように懷に手を入れ、小さな筒を取り出した。

「これをお前に託そう。重要な任務だぞ。アルス、お前なら、できるな」

ガイスはゆっくりと諭すように、それでいて反論を許さない口調で言った。

少年の正義感が人一倍強く、何を言っても聞かないであろう事は解っていた。例えば力不足でも、騎士のように戦いたいと思っている心

の内容が容易に想像できた。

ガイスはそれを読み取り、一つの任務を与える事で逃がそうとしているのだ。

ガイスから手渡された書簡を両手で抱えながら、アルスは力強く頷いた。

その瞳には、先ほどまでとは違って戸惑いと不安に変わり、意志の強さと自分がしなければならぬ事への決意が表れていた。

それでも少年である。肩が少し震えていた。「無理も無い」そう思ったガイスは、少年の肩にそつと手をやると言った。

「大丈夫、お前ならできる。これを至急、お前の父のもとへ届けるのだ」

ガイスは再び広間の前の通路に戻った。

すでに戦の喧騒は消えて、兵達の不安な息遣いがかすかに聞こえてくる。皆には兵がほとんど残っていない事を、敵も知っている様であった。

敵がなぜ、すぐに責めてこないのかは解らなかった。ひと思いに攻め立てれば、広間の占拠など時間の問題であろう事は容易に判断できた。

「少なくとも、自分ならそうするが・・・」

ガイスは考えていた。何か作戦でもあるのだろうか・・・。広間に通じる通路の前には頑丈な扉がある。

壊すのには一苦勞な代物であった。そこから広間の前までは、味方の兵達が疲れた表情に不安さを滲ませたまま、敵の動きを警戒していた。

ガイスは従者を一人、アルスに同行する様に命じた。伝書鳩を取りに行かせた従者だ。その従者に秘密の抜け道を教え、アルス達を逃がしたのだった。

「アルス様、さあ、早く・・・こつちです」

従者は手を差し伸べてアルスを待った。

アルスは何度も何度も髯を振り返っていた。その度に二人の歩みが止まる。従者は名前をエイグと名乗った。

「ああ、すまない・・・」アルスはエイグの手をとると歩き始めた。

エイグはそのまま手を握っていいように思っていた。話せばまた、歩みが止まるかもしれないからだ。

エイグはまだ若い従者であった。アルスと十七年は変わらないであろう。アルスと同じ薄茶色の髪の毛に枯葉色の瞳をしていた。この国には、薄茶色と黒髪の人が同じくらいずつ暮らしていた。国の人口の大半を占めている。

皮の鎧に金属の補強材を当てて強化した、従者専用の動きやすい鎧に身を包み、右手には身長より少し長めの槍を杖代わりに、地面に突き立てながら歩いている。左手には楯と呼ぶには少し幅の狭い、木と金属を打ち合わせて作ったスモール・シールドを付けていた。槍を扱うのに邪魔になら無い様にといい配慮である。

アルスは手を握られて、歩くのをもどかしそうにするが、エイグはかまわず歩き続ける。

「私はあなたを、無事に送り届けなければなりません、たとえば、アルス様に嫌われようとも手は離しませんからね」

そう言くと、エイグはアルスのもどかしそうな素振りにかまうことなく歩き続けた。

どれほどの時間が経ったのだろうか。

すでに夜も更けていた。だが、「夜の闇に紛れて逃げるのです」そう言ったまま、エイグはアルスを先導して歩いていた。

すでに手は離していたが、エイグは時折後ろを振り返り、アルスがきちんと自分の後を付いてきているか確かめながら歩いていた。

しばらく行くと、左手に川が流れていた。

「少し休みましょうか」

エイグは言くと、アルスを振り返った。

アルスは、少し上等そうな布でできた若草色の服を着ている。汗ば

んだ衣服は、肌につけていてアルスに不快感を与えているようだが、アルスはそれを意にも介していないようであった。いや、そこまで気が回らないのかもしれない。

茶色の皮靴は少しぎこちない足取りで、エイグの後をついて来ていた。だが、さすがに少年の足には下りでもきついようだった。肩で息をしているのがエイグにも伝わってきていた。

アルスは無言のままエイグに従うと、息を整えながらその場所で少し休もうと腰を下ろした。額には汗が粒のように出ている。アルスはその汗をぬぐうと、コチコチに固まった足を揉みながら砦の方向を見ていた。

エイグは川に近寄ると槍を地面に置いて、腰に付けていた動物の胃袋を加工した水筒に川の水を汲み、一度ゆすいだ。そのままもう一度、皮の水を汲むとアルスのもとまで持って行き、手渡した。

「喉が渴いたでしょう。これをお飲みなさい」

エイグは優しい声でそう言うのと、もう一度、川へ行き、両手に水をいっぱいに汲むと顔を洗った。

アルスは、自分のどが渴ききっている事に気付き、水筒に口を運んでおいしそうに水を飲んだ。水筒の水を、一気に半分飲んだところで息が続かなくなり、アルスは水筒を口から放すと深く一呼吸をしてエイグを見た。

アルスは、自分ばかり飲んではいけなそうと思い、エイグに水筒を渡そうと立ち上がった。

と、そのときであった。左目の端に、かすかに赤い色が見えた。アルスは首をまわし、顔を砦の方に向けた。

信じたくない光景が目飛び込んできた。砦が燃えていたのである。アルスは愕然とし、気付かないうちに手に持っていた水筒を、地面に落としていた。

エイグは、その音に異変を感じてすぐさま顔を拭くと、かぐんだままの状態でアルスの方を見た。それはアルスの横に見える空に、絵の具をぶちまけたように赤々と燃える砦だった。目に飛び込んでき

たその光景に、エイグはしばし呆然とし、我に返ると、アルスを促した。

「ここから街道を下るとティルトの村があります。とりあえずそこまでは急いで行きますよ。疲れているでしょうが、そこまでいけば安全ですから」

エイグの声には明らかな戸惑いが聞き取れた。だが、若い兵士は無を言わさぬ調子でアルスを急がせると、また先頭を歩き始めた。ティルトは皆でもなんでもない、ただの農村である。その昔に作られた石壁や頑丈な門、人工的に作られた湖で守られてはいるが、今は見張り台も無ければ、肝心の門は農作業の邪魔になると取り払われていた。

ティルトまで無事に着いたとしても、安全ではないのは解っていた。だが、エイグはまだ幼い少年を気遣って、あえて安全と口にしたのである。

アルスは何も言わず、黙ってエイグの後について行った。明らかに怯えた様子をしながら「叔父さん・・・」と聞こえない声で小さく呟いた。目には少し涙を滲ませていた。砦が燃えているのだ。砦の守備隊はきつと、誰一人として助かる者はいないだろう。もちろん、ガイスも例外ではない。

そんなアルスの不安を、エイグは何も言わずに肩を抱いてやりながら、街道を南へと歩いていった。

三、捕われた従者

三、囚われた従者

小鳥のさえずりが聞こえる。

初秋の日差しはまだ力強く、朝の静けさの中で眩しく大地を照らししている。だが、さすがに空気は冷たさをもって、アルスたちの肌に触ってくる。それでも、夜通し歩き続けた二人の身体は火照っていたので、冷たい空気に触れるのは心地良かった。

途中、二人はほとんど言葉を交わすことも無く、ここまで歩いてきた。何度かの小休止をはさみ、ティルトの村に向かっていった。

小さな街道の左に流れる川は次第に大きくなり、すでに向こう岸まで渡るのも困難なほどになっていた。

「疲れたでしょう。もう少し歩いたら少し休みましょう」

そう言つて、エイグはアルスを気遣った。アルスはすでに返事をする元気すらなく、疲れをひどく滲ませた表情のまま黙って頷いた。

無理も無かった。二人は砦を出てから満足に休む間もなく、夜通し歩いてきたのだ。まだ十四歳の少年の身体には体験したことのない疲労が蓄積していた。

エイグもさすがに疲れていた。大人でも音を上げなくなるような行程に、よく弱音を吐かずに耐えている。そんな少年に感心しながらも周囲には絶えず気を配りながら、エイグは休むのに最適な場所を探して辺りを窺いながら歩いていた。

砦から、普通に歩けば一日分ほどの所まで来ているだろうか。

街道の脇にある、大きな大木が二本並んでいる場所を見つけると、そこで休もうとアルスに促し、先に行つて休んでいて下さい、と付け加えた。

エイグは川へ行くと水を飲み、それから腰の水筒に水を汲んでアルスの元へ戻った。「どうぞ」そう言つて、エイグはアルスに水筒を

渡そうとしたのだが、アルスから反応は無かった。変わりにアルスの小さな寝息が聞こえてくる。

アルスは木の幹に背中を当てた状態で、地面に横になっていた。身体を横たえる事で、緊張の糸が切れたのだろう。溜まっていた疲れがアルスを眠らせていた。エイグは布切れに水筒の水を少し垂らすと、アルスの顔をそつと拭いてやった。

まだ、幼さの残る少年に降りかかる過酷な運命を、エイグは罵りたい気分には駆られていた。

考えてみれば、この少年は自分の肉親を失ったのだ。父や母ではなくても、自分の身近にいたはずの人を。

悲しくないはずが無かった。それでも懸命に、ここまで何も言わずに歩いてきた少年の健気さを思い、自分がしっかりしなければと思った。

そして、少年が起きるまでの短い時間、辺りを警戒しながら、少し身体を休めようと木にもたれかかった。

すぐ近くの茂みの中で、不審な視線が二人を見ていることに気付かないまま、エイグは起きているつもりが、いつの間にか寝てしまっていた。

「本当だよ、お頭」

背中の曲がった、少し頭の禿げた小男は地面に膝を付き、醜い顔を上目遣いにそう言った。

どこかで盗んできた物だろうか、身に付けた衣服は、上下とも男の身体には合っていないかった。少しぶかぶかで長いこと着たままらしく、ところどころぼろきれの様に破けていた。

「本当にいたんだ。背の低い小柄な男と、砦の兵士の着る鎧をつけた男が二人で、双子杉の陰で寝ているのを見たんだ」

アルス達の事であった。禿げた頭の男は、少し言葉遣いになまりがある。どうやら、頭の程度も低いしかった。アルスを見れば、まだ少年だと一目で解るのを、大人の男と思っていたらしい。

「ふん」お頭と呼ばれた男は、いぶかしむ様に鼻を鳴らしながらその小男に目を向けた。

ここはティルトの村から、街道を北へ2日ほどのところにある、ちようど街道を挟んで川の反対側にある崖の向こう側。そこにぽっかりと穴を開けた洞窟の中であつた。

昼間でも薄暗く、西日しか入らない洞窟の中には、禿げた頭の小男とお頭と呼ばれた男の他にも、四人の男がいた。入り口には見張りが一人立っている。

男達は薄ら笑いを浮かべ、禿げた頭の小男と自分達のお頭を交互に見やり、成り行きを見守っていた。盗賊であつた。皆、腰には思い思いの得物をぶら下げ、薄汚い身なりに身を包んでいた。

中には王国の騎士と同じ鎧を着込んでいる者もいる。歳は四十近いだろうか。行き倒れた騎士から奪つた物なのか、それとも盗んだ物なのかは解らないが、胸にあつたであろう紋章は削り取られていた。

「バム、もしそれが本当なら、お手柄だな」

お頭はニヤツと笑いながらそう言うつと、昨日の夜の事を思い出していた。見張りに立っていた者が砦から火の手が上がっていると怒鳴り声で伝えてきたのだ。全員がその声に起き、洞窟を飛び出してその光景を目の当たりにした。難攻不落と言われた北の砦が燃えていたのだ。

多分、ガルバス北の帝国が攻めて来たに違いなかった。他にあの砦を陥とせる者はいないだろう。それに近年、シエルバリエ王国とガルバス北の帝国との関係は微妙な物になっていると聞く。

お頭の言葉を聞いて「へっへっ」と小さく笑うつと、バムと呼ばれた小男は少し広い額にペンペンと、左の手の平を当てて薄汚い笑みを浮かべながら、嬉しそうにしている。

お頭から誉められたと思っているのだろう。

「よし、相手は二人だ。身ぐるみ剥いでやるぞ」
「へいっ」

お頭の下卑た言葉に勢いの良い声を返すと、盗賊達は準備を始め

た。

バムは洞窟の入り口まで行くと、立ち止まって後ろを振り返った。盗賊達を先導しようとそこで待ち構えている。

ただ一人、騎士の着る鎧を身につけた男はくだらなさうに、洞窟の壁に寄りかかりながら盗賊達を見守っていた。腰には、これも騎士の良く使うバスタード・ソードを吊るしている。暗がりの中、表情の良くわからないその男は「俺はここに残らせてもらう」と一言言くと、洞窟を後にして森の方へ歩き出した。

無愛想なその男が洞窟から出て行くと、盗賊達から不満の声が上がった。

「まあそう言うな。いつか役に立つさ」

お頭はクツクツと笑うと、森の中へ入って行く男の背中から視線を外して、自分も準備を始めた。

その男は、何年か前にこの洞窟にふらつとやってきて、盗賊たちと暮らすようになっていた。

その時から騎士と同じ鎧を着ていたので、最初は騎士かと思い警戒したものだ。その男は自分の話は一切せず、盗賊たちの行動にも一切干渉しなかった。

いぶかしく思う者も多かったが、お頭が何かの役に立つと、一緒に寝泊りすることを認めていた。だから、あえてそれを口に出す者はいなかった。

ある日、熊に襲われた事があったのだが、盗賊たちの中に熊とともに戦って勝てるものはいなかった。その時、その男は熊を相手にして見事に退治してしまったのだ。それ以来、その男に対しての不満は鳴りを潜めている。お頭は用心棒の様に男を思っていた。

盗賊達は相手が二人であり、二人とも眠っていると聞かされていたので、ゆっくり歩いていった。

アルス達のいる場所に着く頃には、すでに日が高くなっていた。

「お頭、あそこです。あの双子杉の向こうでさ」

バムは小声でそう言うと、少し離れたところにある茂みに身を隠し

た。まだ、双子杉と呼ばれた二本の大きな木のところまでは五十歩ほどあった。

バムは、自分が大して戦えない事を知っていた。だから、いつも戦いの時は身を隠している。今回も同じように身を隠すと、仲間の盗賊達を見守った。

盗賊達は、全部で五人だった。

お頭の場合で木の向こう側へ回り込みうと左右に分かれて、足音を立てない様に慎重に動いた。その動きは盗みに慣れた者達のそれであつた。

盗賊達が木に三十歩程まで迫った時、それは起こった。

不意に森の中から小石がいくつか飛んできて、エイグの身体に当たったのである。

！

エイグはハツとなつて飛び起きた。迂闊にも、疲れに負けて眠ってしまったのだ。

急いで槍を手にとると、かがんだままの状態で辺りに気を配りながら、アルスを揺すって起こした。

「ん・ん」

アルスはまだ、眠たそうな目をこすっていたが、それでも緊迫した様子のエイグが解ったのか、黙ってエイグの側へ寄ると息を潜めた。かすかに足音が聞こえる。木の後ろからであつた。枯れ草を踏む音だ。何者かが近づいて来ているのがエイグには解った。

「良いですか、森の中へ逃げ込みます、走りますよ」

エイグはそう言うのと、まだ起きたばかりのアルスを見た。寝起きだとはつきりわかる顔で、不安げな様子の少年がそこにいた。何が起きているのか解らないといった顔をしている。それでもエイグの言葉に黙って頷いた。

二つの木の右手には茂みがあり、その向こうには大きな森が広がっていた

エイグはアルスに「行きますよ」と合図すると、先導するように走

り出した。

盗賊達は木まで十歩ほどのところまで迫っていた。どうやら森から飛んできた石には、木が陰になり気付かなかったらしい。

木の陰から、サツと走り出す二つの人影に気付いた盗賊達は、自分達に気付かれたと悟ると、森の中へ消えていく二人を追いかけた。

「逃げたぞ、捕まえろ！ 刃向かうなら殺してもかまわんっ」

お頭はそう叫ぶと、一番後ろから二人を追いかけて森の中へ入って行った。

汚い罵声を吐き捨てながら、盗賊達は追いかけて来る。

森の中は地面から出た木の根や、枯れて落ちた枝などがあって走りにくかった。

「盗賊か・・・」ガルバス帝国からの追っ手ではない事を、連中の使う汚い言葉から悟ったエイグは少し安堵した。だが、相手は複数いる。まだ気は抜けなかった。

不慣れな森の中を走って逃げるのは容易ではなかった。しかも、アルスは不慣れな行程で足が着かれきっているようであった。何度か躓いて、その度に転びそうになっていた。

このままではまずいな・・・。

慣れない森の中を、アルスを連れて盗賊達から逃げ切る事は至難の業だと思われた。

すでに盗賊達との差は、徐々に縮まっている。

「いいですか・・・」エイグはアルスに聞こえるように、少し大きな声で走りながら言った。

「ここから南に下れば、ティルトの村があります。あなたも皆に来る前に立ち寄ったでしょう・・・」息切れを始めた呼吸を整えつつ、エイグは走りながら言葉を続けた。「街道に沿って、昼間は森の中を進むのです。夜はなるべく街道を歩きなさい」

そう言うのと急に立ち止まって振り返った。

アルスは、急に立ち止まったエイグの身体にぶつかる様に止まった。

倒れそうになるアルスの身体をエイグは支え起こすと、腰から水筒を取ってアルスに押し付けるように渡し、槍を構えて追って来る盗賊達との距離を見た。

「エイグ・・・は・・・どう・・・するんだ・・・？」

アルスは息も絶え絶えな様子で、途切れ途切れに尋ねた。

「私はここで足止めをします」エイグは優しく言うと、追って来る盗賊達を睨みつけた。

「何をしていますのですっ、早く行くのですっ」どうしようかと躊躇しているアルスに、エイグは厳しい口調で言った。

「ガイス様からの手紙を、無事に届けなくてはいけないでしょう」

一呼吸置いて、今度は優しく諭すように言うと、アルスを促した。
「・・・」

無言のまま頷くと、アルスはエイグに背を向けて、森の中を南へ向けて走り出した。

どこにそんな力が残っていたのだろうか、草の蔦が足に絡むのも力任せに引きちぎって息の続く限り走った。

少年の目には涙が滲んでいた。

アルスが逃げて、五呼吸もしないうちに盗賊達は追いついてきた。全部で五人だった。先頭に二人とその後ろに二人、そして、さらに後ろに頭目と思しき男がいた。

「ガキが逃げたぞっ、追えっ」

頭目らしき男がそう言うのと、後ろにいた二人の男がアルスの逃げた方に向かった。

「こっちだっ」

エイグはその二人の前に立ち塞がろうと動くが、先頭の二人に逆に阻まれてしまった。

「くっ」エイグは小さく舌打ちすると、槍を前に出して、二人を牽制しながらじりじりと間合いを確かめていった。森の中である、長い槍には不利な地形だった。

それを知っているのか、それとも相手が一人だから油断しているのか、その盗賊達は薄汚く笑いながら、間合いを詰めてくる。

「観念しなっ」一人の盗賊がそう言っ
て武器を捨てるように促してきた。

「・・・」

エイグは何も言わずに槍を構えたまま、盗賊達の動きに注意を払っていた。

だから、気付かなかった。自分の後ろに迫っている別の人影に。

「くうっ」

エイグは、後ろから忍び寄った男に羽交い絞めにされ、槍を地面に落としてしまった。

「抵抗するな、命までは取らん」

男は静かに、だが反抗を許さない威圧的な声で、エイグにそう言った。

盗賊達の笑い声が聞こえてくる。

「しかし、まさかあんなところに旦那がいるとは思わなかったぜえ」

酔っ払った盗賊の一人が、だみ声で周りの盗賊達に言った。旦那と呼ばれた男は名前をカインと言った。騎士の鎧を着て、腰にはバスタード・ソードを吊るしている。盗賊達と一緒に生活しているあの男だ。

「そうだなあー、まさか旦那が来るとは思わなかった、ここに残ると言っていたからな」へっへつと笑うと、別の盗賊が言った。

盗賊達は、洞窟の脇にある岩場で酒盛りをしていた。赤々とした焚き火が、盗賊達の小汚い顔を照らしている。すでにあたりは暗くなり、空には三日月が顔をのぞかせていた。

久しぶりの獲物だった。

普段はあまり、人の通らない街道で盗賊稼業をしていたのだ。盗む相手がいなければ森で狩りをして、その日の食い扶持を稼いでいた。

エイグは金目の物などは持っていなかったが、帝国兵に引き渡せば褒美がもらえるだろうと、盗賊達は勝手に思い込んでいた。

盗賊達は最初、金目の物をもっていないエイグを殺そうとしたのだが、帝国兵に引き渡せば褒美がもらえるかもしれない、とのカインの言葉に、捕らえて洞窟まで運んだのだ。

エイグは足首と手首を紐で縛られ、次いで両手と一緒に胴回りにも縄を巻かれ、さらにその縄の一端を足に結ばれていた。それから舌を噛まぬように猿ぐつわを噛まされ、目隠しをしてエイグの槍に吊るすと、洞窟まで担がれてきたのだ。

今は洞窟の中に転がされている。すでに目隠しは取られていたが、まだ猿ぐつわはそのままであった。無様な格好で連れてこられた屈辱と、一瞬で捉えられてしまった不甲斐無さを悔しく思いながら、アルスの無事を祈っていた。

盗賊達の中には、アルスを追いかけていった二人も戻って来ていた。

「ガキを逃がしてしまったのは惜しかったな」

そう話す盗賊達の声に、アルスが無事な事を知った。少なくとも、盗賊達に殺されてはいない事は判った。

洞窟の暗がりの中に人が入ってくる気配を感じて、エイグは身体を起こそうとした。だが、縛られたままの身体が自由に動けるわけも無く、無様に転がると止まった。自由になる首だけを少し回して、エイグは入り口に警戒の目を向けた。ここからでは、月の光と焚き火の明かりで顔まで判別できない。

「名はなんと言っ」

男はエイグに近寄ると、猿ぐつわをはずして問いかけた。無機質な声だった。それが自分を捕らえた男の声だとわかり、エイグはキッと睨みつけたが、相手の顔は影になって見えない。

「答える気は無い、か・・・」

男はしばらくエイグの反応を見た後、独り言のように呟いて洞窟の奥に足を運んだ。表の盗賊達には加わらずに、一人でいたいのだろうか。その時、エイグの目に見慣れた物が飛び込んできた。

「なぜ・・・」

月の光に照らされて、男の着ている鎧が騎士のそれだとわかった、エイグは驚きの表情を浮かべたまま呟いた。鎧の背中に、特徴的な鎧の隆起が見えたからだ。

なぜ、その鎧を着ている。そう問いかけたかったに違いない。盗賊と一緒に、騎士の鎧を着ている男がいたのだ。驚かない方がどうかというものだ。

「この鎧を着ているのか・・・か」男は見透かした様に、エイグの言葉を続けると「残念だが、私は騎士ではないよ」と、口にしなから挑発するようにフンと鼻を鳴らし、自嘲気味に笑った。

「残念な物か。王国に仕える者が、こんなところで盗賊と共にいるなど」と「そんな不名誉な事があってたまるものかと、エイグは続けた。

黙っているつもりが、つい、見慣れた鎧への驚きと、この男の口調に乗せられてエイグは怒った声でそう返すと、枯葉色の目で洞窟の暗がりの中を睨んだ。

「しゃべれるじゃないか・・・私の名前はカインだ」

少し笑った口調で言うと、カインと名乗った男はもう一度「名前は何んと言う」と尋ねてきた。

「エイグだ」

仕方なくエイグはそう答えた。カインと名乗る男が、なぜ騎士の鎧を着ているのかも気になったが、必要な情報は手に入れたと思うていた。今の状況では、逃げ出すのは不可能な事だろうと思われたが、皆やアルスの事が気になる。

カインはそれを聞くと「どうやら皆は陥ちたようだな」と言って、左手に持っていた杯を煽ると、そのまま黙り込んだ。

何を考えているのだろうか。カインは洞窟の影の中に入ってしまった、ここからでは見えない。

「なぜ、あんなところにいた？」

しばらくの沈黙の後、カインが聞いてきた。

「研修で来ていた子供にしては、一人とはおかしいな・・・」どうやら、その辺の事情は知っているようだ。騎士ではない様だが、少なくとも王国での生活は長いように思えた。先に出発した学院の子供達は、どうやら盗賊達とは合わなかったようだ。

「・・・」

エイグは何も答えず、ただ、暗がりには警戒の目を向けていた。

「また答えないつもりか・・・まあ、いいだろう・・・」

しばらくエイグの答えを待ったが、返事が無いのでカインはそう言い残すと、洞窟を出て行こうとした。

「なぜ、その鎧を着ている？」エイグはとりあえず、それだけ言うのと相手の出方を待った。

ここで何も聞き出せないよりも、何かで話題をつなげた方が良いとの判断からだった。元々、交渉事などした事も無いエイグであったが、それでもカインの足を止めるのには十分だった。

「気になるか？」

カインはエイグの意図など輪からないようであった。エイグに顔だけ向けると勘違いをしてそう答えた。

「これはな、友からもらった物だ」カインはエイグの返事も待たず、どうでも良さそうに言うと、洞窟を後にして表へ出て行ってしまった。

どうやら、何も答えないエイグに関心を無くしたらしく、外へ出て行ってしまった。

エイグは、どうした物かと考えをめぐらせていた。盗賊達の焚き火は、おそらく砦からも見えるだろう。ガルバスの兵がここまで来るのは時間の問題であった。

盗賊達の身がどうなるうとエイグには関係なかったが、このままガルバスの兵がここへ来たら、何の価値も無い自分は殺されてしまうだろう。

アルスを無事に送り届ける自分の役目は、どうやら果たせそうもなかった。しかし、まだ諦めるわけにはいかない。

しかし、どうやっても打開できそうに無い現状にため息をつきながら、洞窟の外に視線を走らせて、入り口からわずかに見える夜空の星々にアルスの無事を願った。

エイグは眠る事にした。悩んでいても仕方ないと思われた。眠って疲れを癒し、機会に備えようと目を閉じた。

夜も更けて、盗賊達は眠りに就いていた。

祝宴の場で、それぞれの格好で眠り込んでいる。焚き火はすでに勢いを失くし、小さくくすぶっていた。ただ一人、カインだけは洞窟の入り口に背をもたれかけ、夜空の星を見上げていた。時折、まだ酒の残っている杯を口に運んでいる。

「・・・」

誰かの名前だろうか。隣にいても聞き取れない、小さな声で呟いて、また杯を口に運ぶ。星空を見上げるカインの眼には、夜空の星々は映っていないようであった。

それからどれくらい経っただろうか。洞窟から二つの人影が森の中へ消えていった。

翌日、盗賊達は捕らえたはずの兵士と、その兵士を捕らえた男がいなくなっているのに気付いた。しかし、盗賊達は二人を探す事はできなかった。なぜならそのすぐ後に、昨晚の焚き火の明かりに気付いてやって来た帝国兵に、殺されてしまったからである。

四、青いローブの魔術師

四、青いローブの魔術師

砦に火の手が上がって三日目。ちょうどガルバスの偵察隊が、盗賊達を皆殺しにした次の日。

ティルトの村では、ようやく完成した門を村の入り口に取り付ける作業が終わったところであった。出来上がった門は、敵の侵攻を食い止めるには、あまりに粗末な造りであった。人の二の腕ほどの厚さの木を並べて、枿をとるところ金属で補強しただけの物であった。

それもそのはずである。とりあえず門として取り付けられるようにして、その後から厚みを付け加えるように、作業工程を変えたのだった。

急いで作ったために寸法がおかしく、手直しをしなければならない部分もあったのだが。

朝の冷たい空気の中、村人は広場に集まって一息ついていてた。睡眠不足を理由に、しばしの睡眠をとる者や食事を口にする者、世間話をしている者もいる。

だが、誰も砦や帝国の事を口にする者はいなかった。不安は誰もが持っていた。あえて口にしない事で、平穏を保っている様にも見えただ。広場の脇につないである馬たちも、静かに飼葉をついばんでいる。

村の南西にある小さな作業場では、この村唯一の鍛冶屋のトムとせがれ倅のミガンが、休む間も無く働いていた。窯に空気を送り込むふいこの音や、鉄鎚を振るう音が聞こえてくる。

門に取り付ける補強材や金具を作っていたのだ。それだけではない。矢尻や、木で作った楯の表面に付ける金属の板なども加工していた。トムのもとにはミガンだけでなく、他にも数名の村人が手伝いに行

つていたが、今は作業小屋の影に座ってわずかな休憩をとっていた。騎士達は、相変わらず作業は村人に任せていた。見張りとして一人を天幕の外に立たせ、二人を門の左右の石壁に立たせて村の周囲を警戒している。残りの騎士達は皆、天幕の中でなにやら話しているようであつた。

時折、馬の世話をしに出てくるが、それ以外はほとんど天幕の中にいる。村人の中にはそんな騎士達に不満を持つ者もいたが、あえて声を挙げる者はいなかった。

砦から火の手が上がった日の夜遅く、砦から逃げてきた学院の生徒二十名ほどと、それを引率していた二人の講師、それに何人かの負傷した兵士達が村に辿り着いた。

研修生達の中にはケガをしている者も少なくなかった。中には骨が折れているのであろうか、添木を当てて包帯を巻いた腕を、首に下げた三角巾に通している者もいた。疲労の滲み出た顔ばかりであつた。

無理もなかった。王国には、ここ何十年も戦禍などなかった。一度だけ、大規模な盗賊狩りが十数年ほど前にあっただけだ。それさえも、研修生にとっては自分達の生まれる前の話であつた。平和の中で育った者ばかりなのだ。

それが突如として襲ってきたのだ。しかも、自分達のいる目の前でまだ経験した事の無かつた悲惨な光景を目の当たりにして、皆、一様に言葉は無く、まるで死人の集団のような雰囲気を漂わせて村に辿り着いた。

最初、それに気付いたのは城壁の上で周囲を警戒していた騎士の一人であつた。

「何か来るぞー」

そう怒鳴り、城壁の周りで作業していた村人に知らせた。

門の外で作業をしていた者は、慌てて門の中に身を隠した。帝国の兵だと思つたのだらう。だが、騎士の目にはどうやらそうではないらしく見えていた。昨晚に砦から火の手が上がったばかりである。

砦から村までは、徒歩で四日ほどの距離である。馬を全力で走らせても丸一日はかかるだろう。もし、敵の部隊であれば、それなりの規模のはずだ。だが、見えてくる影はそんなに大きくはなかったのだ。それに馬の上げる砂埃も見えなかった。

その後、村に到着した研修生達は、村人から食事と寝所を与えられ、束の間の休息をした。その後、西のシユプールを目指してまた旅立つて行った。

一緒に逃げて来た負傷した兵士達は、砦の兵士であった。襲撃を受けた時に、崩れた塔の瓦礫で怪我をしたらしい。腕が千切れて無くなった者や、足の骨を折って動けない者もいた。

その中に一人の騎士がいた。その騎士は頭に血の滲んだ包帯を巻き、左腕の肘から先が無くなっていた。

その騎士は、村にタンカスの守備隊が来ている事を知ると、慌てた様子でジユランの所まで行き、北の砦の惨状を語った。そして、ガイスからタンカス守備隊宛に預かった書簡を渡すと、己の無力を嘆いて崩れ落ちたのだった。

書簡には、ガルバスが侵攻して来ている事や、敵の中に得体の知れない妖魔の姿を認めた事など、王都からすでに連絡のあった知らせの他に、確認できた敵のおおよその数なども書いてあった。そして砦がそう長く持ちそうにない事も書かれていた。

ジユランは新たな情報を、タンカスから連れてきていた伝書鳩を使って王都へ知らせると、作業の進み具合を確認してまた天幕の中に引き籠もった。

研修生達を西へ送り出した日の二日後。ティルト村の入り口に新しい門が築かれた日のお昼前の事である。

門の内側の少し左に、どうにか歩哨が乗れる様に、形だけは完成していた見張り台にいた騎士が叫んだ。

「人影が見えるぞー」

まだ、敵襲を知らせる銅鑼も付けられていない見張り台の上から、騎士は怒鳴った。

村人は、今度こそ帝国の兵達が攻めて来たのかと、補強が進んで頑丈になった門を閉めると村の中に立てこもった。

中には「もう終わりだ」と、泣き出す者まで出始めた。

一様に不安を表情に表しながら、狩用の弓と小さな楯を持って、石壁の上に斜めに置かれた矢避けの為の、人より大きな板楯の後ろからその影を探した。

だが、その人影が一人の少年だと解ると、村人は皆、驚きと安堵を浮かべ、その少年を村へ迎え入れた。

ひどく憔悴しきった様子の少年は、おぼつかない足取りで村に辿り着いた。

少年は、少し上等な麻布でできた旅用の服を着ていた。一目で貴族の旅用のものだと思われるその服は、少年の身を道中で守り、足や袖が破けていた。そこから覗く肌には赤いものも滲んでいる。

どうやら研修生の一人だと思われた。首には学院の生徒に渡される首飾りがかけてあった。少年は村へ入るとその場で倒れこんでしまった。

村人達は、すぐさま少年を近くの家まで運ぶと、手当てをしてベッドに寝かせた。幸いにも、腕や足に擦り傷があるだけで、他にはこれといった外傷も無かった。

少年は時折、寝顔に悔しそうな悲しそうな表情を覗かせながら眠っていた。

「では、ガイス殿から、あの少年を護衛するように命ぜられて、ここまで来たという事だな？」

ジュランは正面に立つ一人の兵士にそう聞き直した。

「はい。無事にカルマ様の下まで、送り届ける様に言われております」

聞かれた兵士は、従者の着る金属で補強された皮の鎧を着ていた。そう答えたのはエイグであった。

傍らには、事の成り行きを見守っているカインの姿もあった。他に騎士が四人、話の邪魔になら無い様に、隅によって話を聞いていた。エイグとカインは、アルスが村に着いた日の午後に村に到着したのだった。

帝国を警戒していた村人と騎士達は、三度目の来訪者にまた安堵しつつ、エイグ達を快く迎え入れてくれた。

ジュランは一通りエイグの説明を聞き、一言「そうか」とだけ言うと、カインに向き直って不審そうな目を向けて声をかけた。

「それで、その盗賊の洞窟から逃げるのに、お前が力を貸したというのだな」

お前と言われて、少しムツとしつつもカインは頷くと黙ったままジュランを見つめた。

「なぜ、騎士の鎧を着ているのだ？それに胸の紋章が削つてある・

」

エイグはカインの事にはあまり触れなかった。ただ、自分を助けてくれた事を伝えて、鎧と剣は拾い物と聞いたとだけ伝えた。

盗賊などの類は、重い金属で出来た鎧を身に付けるのを嫌がるものだ。忍び込むのに邪魔だからだ。しかも騎士の鎧だと知っていて、あえて着ける者などいないだろう。

ジュランの質問は当然だろうと思い、エイグもカインの言葉等待った。

「答えなければならないか？」

反対に、カインはジュランにそう言つと、ジュランの言葉も待たずに続けた。

「これは友からもらった物だ、私は友にある誓いを立てた、紋章を削つたのは騎士ではないという事だ」

静かな、しかし力強い口調でそう言つと、カインはこれ以上話したくないといった態度で、天幕を出て行ってしまった。「復讐と言う名のな・・・」カインが小さく呟いた言葉は誰の耳にも入っていなかった。

カインの態度に、傍らにいた騎士達は声を立てて抗議したが、カインを引き止めるだけの力は無かった様だ。

「まあ、よい」

ジュランは騎士達を、手を上げて制しながら言うと、一人ばつの悪そうなエイグに眼をやり「あの者の事はお前に任せる」と続けた。

「今は一人でも多く、戦える者が必要だ。何が目的かは解らぬが、少なくとも敵では無さそうだ・・・」

友が騎士であったと言う事と、エイグを助けた事が理由であった。

「盗賊達の焚き火の明かりが、皆から見えなかったはずは無いだろうな・・・」

ジュランは独り言のように呟くと、エイグの話进行思い出してそう言った。

「早ければ、今夜にでも帝国の襲撃があるだろう、十分に警戒してくれ。今は、それしかできない・・・」

最後の言葉は小さく、自分に言い聞かせるようにそう言うと、周りの騎士を見た。ジュランは解散を告げると、眼を閉じて考えを巡らせている様であった。

エイグは恭しく一礼すると、他の騎士達にも頭を下げて天幕を後にした。

洞窟で、盗賊たちが祝宴を挙げていた日の真夜中に、エイグは起こされた。

ついに帝国兵に引き渡されるのかと思ったが、どうやら違ったようであった。そこに帝国兵の姿はなく、盗賊達の下品な寝息が聞こえているだけであった。

カインはエイグの上体を起こすと、声を出すなど伝え、逃がす代わりに自分も連れて行けと交換条件を出してきた。

この男が一体どんな考えから、その条件を出してきたのかはエイグには解らなかった

だが、願ってもいない機会が訪れた事にエイグは思わず、天上の神々に感謝の祈りを捧げると、黙って頷いたのだった。

それを確認したカインは、エイグの縄を解くと、二人はすぐに洞窟を出た。

まだ明け切っていない夜の闇は、それでも東の空が少し白み始めていた。

洞窟の前に広がる森の中に姿を消して、二人は急いでアルスの後を追いかけたのだ。

ティルトへの道中で、エイグはカインに皆での事やアルスの事を聞かれた。どうしたものかと迷ったが、助けてもらって何も話さないのも変だと考えて、重要な事を除いて話したのである。

自分が話せば、カインも騎士の武具を身に付けている理由を話してくれると思ったが、「そうか」と言っただけで終わってしまった。ただ一つ解った事は、アルスと二人で双子杉の陰で寝ている時に、石を投げて盗賊達の襲撃を知らせてくれたのはカインだったという事だった。

それから二人は、ほとんど話をする事も無くティルトまで来たのだった。

天幕を出ると、カインは南の森の側で切り株に背中を預けて休んでいる様であった。村人はカインの事を皆からきた騎士だと思っていた。

胸の紋章が無い事を、誰も気にも留めていない様子で、カインに食料と寝所を用意してくれていた。

エイグはカインの様子を確認すると、アルスの元へ足を運んでいた。アルスは村の東側にある民家の一室で眠っていた。粗末ではあるが、十分に掃除の行き届いている部屋だ。エイグは近くにあった椅子を、そつとベッドに近づけると腰を下ろしてアルスの顔を覗き込んだ。

アルスは時折、苦しそうな表情で寝返りをうっている。頬には涙の後がうつすらと残っていた。ベッドの脇の窓からは、初秋のまだ暖かい風が入り、アルスの髪の毛と戯れている。

エイグはアルスの顔を見つめながら、もう一度考えていた。少年の

見た悲惨な光景や、自分がするべき事を。

そして、しばらくの後、そつと部屋の外へ出た。入り口に腰を下ろして空を見上げたエイグの枯葉色の眼には、強い決意が光っていた。

四日後の朝。

エイグはアルスの休んでいる民家の入り口に腰を下ろし、槍を地面に置いて外を見張っていた。あれからずっと、エイグはアルスの傍で過ごしていた。

アルスはというと、丸二日間眠り続けていた。その後起きたのだが、どうやら無理な行程で足を痛めたらしく、左足首が少し腫れていた。体重がかかると激しく痛む。

アルスはそれでも、無理やり王都への道を急ぐ事を主張したのだが、エイグやジュランがそれを許さなかった。

ジュランがそれを許さなかったのは、アルスの父、カルマが騎士団の団長であつたからに他ならなかった。

足を痛めているのに無理やり出発させた、などと言われたくは無かつたのだろう。だが、エイグは違った、純粹にアルスを心配していたからであつた。途中で進めなくなつて敵に見付かるよりは、ここでしっかり休んでからの方が良いと思えたからだ。

日数を考えると、すでにこの村の近くまで帝国兵達が来ていてもおかしくはなかつたからである。

アルスは説得に折れ、痛めた足首を村で治してから出発する事を、しぶしぶ受け入れた。

それから二日。アルスの足は大分良くなっていた。腫れも引いて、体重を乗せてもそれほど痛くはならなかった。村人からもらった湿布が良かったらしい。

狩りや農作業で身体を痛めた時に良く使らしいその湿布は、この辺りで採れる紫色の、独特の匂いにする野草をすり潰して作った物だった。湿布をくれた村人の話では、この辺りでもこの村だけの物らしい。

いまだに村の中ではせわしく動く村人の姿が目立っていた。門はすでに補強も終わり、見張り台にはトムの作った銅鑼と、飛んでくる矢から身を隠せる板楯が取り付けられていた。

村人達は二手に分かれ、自分達が使う事になるであろう小さな木でできた楯を、これもまたトムの作った金具で補強している者と、矢尻と木の棒とを固定し、鳥の羽を付けて矢を作る者に分かれて作業しているところであった。

城壁と門の外にはすでに、出来上がった馬除けの柵が隙間無く並べられている。丸太の先を尖らせて斜めにした物だ。

わずかな日数で、ここまで作るのが精一杯であった。むしろ、たった十日で良くここまで出来たと言うべきか。そのため、村人はほとんど休むまもなく働き詰めであった。

皆、顔色も悪く、中には睡眠不足で倒れてしまったものもいた。不満を言う者がいなかったのは、口にすると不安さに呑み込まれてしまいそうだからだろう。その為、身体を動かして迫っている危機を忘れるようとしているふうにも見えた

「ふう・・・」

一通りの作業が終わると、ジェイズは深く息を吐いてから、赤い髪の毛をガリガリと掻き毟りながら続けた。

「アスター、こっちは終わったぞ」言いながら出来上がったばかりの楯を掲げて振って見せた。

「ああ、お疲れ、こっちももう少しで終わりそうだ」

ジェイズに顔だけ向けてそう答えると、アスターは「そっちは休んでいてくれ」と付け加えると視線を手元に戻して、矢尻の付け終わった矢に風羽を付けようと指を動かしていた。

ジェイズは伸びをしながら、一緒に作業をしていた者達と周りを片付けてから「一休みするぞ」と言って木陰へ腰を下ろした。

広場には、村中の家から持ち出された机と椅子が並べられ、広場自体が作業場の様になっていた。地面には木屑や木片が散乱して、足

の踏み場も無いほどだ。

片隅には、まだ加工途中の木が三角形に組まれ置かれている。楯を補強していた者達は、バラバラになって休んでいた。

ジェイズはアスターが作業を終わるのを待つ間、秋の空を見上げながら無意識に頭を掻いていた。どうやら頭を掻くのが癖らしい。

人より少し大きな身体を木に預けて横になっていると、そのまま寝てしまった。

「おい、起きろ」

アスターの声が聞こえる。ジェイズはまだ寝足り無そうな眼を薄く開けて、目の前の顔を見上げた。

「食べる」

アスターはそう言っ、ジェイズの胸の上にパンと少し大きめの干し肉を放ると、自分も隣に腰を下ろして干し肉にかじりついた。

「ん・・ああ、すまん」

言いながら、ジェイズは身体を起こしてパンと干し肉を掴むと、無造作に口に運んだ。

「んー・・、どうやら大分寝てしまった様だな・・」

ジェイズは少し食べると口を開いて、ばつが悪そうに左手で頭を掻いた。

「気にするな、あの後すぐにこっちも終わって、それからずっと休憩だ」

すでに日は傾き始めていた。太陽が村の南西にある山々の陰に隠れるまでに一刻ほどしかないだろう。

アスターの言葉に「そうか」と小さく呟くと、少し肌寒くなりつつある空気がやけに心地良いな、などと思いつつも、このまま寝ていたら風邪を引くところだったと反省した。

しばらく無言で食事をすませると、アスターは水筒を取り出してのどを潤し、それをジェイズに放ってよこした。

ジェイズは無言でそれをのどに流し込むと、大きな息をついてから

水筒を地面に置いた。

「・・・なあ、どう思う？」

不意にアスターは小声で話しかけた。

「いくさ戦か？」そう返すとジェイズはアスターの言葉も待たずに

「さあな」と続けた。

「戦の事は、良くわからん」

ジェイズの言うとおりだった。アスターも戦の仕方など教えてもらった事など無い。知っている事は、狩りの仕方と弓矢の使い方、それに身を守るための短剣の使い方くらいなものだ。

他の村人も大差ないだろう。戦とは無縁の生活を送ってきたのだから、当たり前であった。

「ただ、この人数で正規軍相手には戦えないな・・・」

しばらくして、ジェイズはすまなそうにそう続けた。どうやらアスターが黙ってしまったのを、自分が素っ気無く答えたからだ勘違いしたらしかった。

アスターは深くため息をつく。「うん」と答えて、不安そうな灰色の眼を広場の脇につないである馬にやった。

「みんな、不安にしている・・・」アスターはそう続けると、何も知らずに地面に横になっっている馬は良いな、と思いながら眼を閉じた。二人とも、自分達が助かる望みは騎士団の到着以外には無い事を知っていた。もし、帝国兵が北の砦までで侵攻を止めるなら助かるだろうと思っただが、そこで止まるとは思えなかった。砦だけ手に入れたも、国境が守り易くなるだけで他には何の利益も無いからである。たったそれだけのために戦争を始めるとは思えなかったのだ。

「きっと大丈夫さ、攻めて来る前に騎士団が来てくれるよ」

何の根拠も無い楽観的な意見を述べてから、ジェイズは「休めるなら家で寝るよ」と付け加えると、その場を立ち上がって広場の向こうにある、自分の家に歩いていった。

「おやすみ」アスターは渋い笑いを浮かべたままそう返すと、何日か帰っていない自分の家に向かって歩き始めた。

「ふん・・・」

広間の前にある、壁の崩れた通路から下を見下ろしてベイグナルは鼻を鳴らした。

「ずいぶんと、容易く陥ちるものね」
後ろから女の声がした。

ベイグナルは茶色の眼を、眼下の中庭で飛び跳ねている妖魔に向けながら「こんなものだろう」と小さく答えた。

そこは、ガイス達が最後に抵抗していた場所であった。

通路にあつた壁は大きく崩れ、ぽっかりと穴が空いていた。石畳の床には崩れた瓦礫が散乱し、広間と通路を仕切っていた石壁の表面は、何か高温で舐められたように溶けていた。床に飛び散った血飛沫が、そこで行われた凄惨な惨状を物語っている。

二人の男女がそこに立って、皆の中庭を見下ろしていた。男の名前はベイグナル。今は帝国軍の軍師という肩書きだ。

薄黄緑色の外套を羽織り、下には飾り気の無い青いローブを着ている。フードは被らずに背中にかけていた。整った顔には、見下ろす先に向けられた侮蔑が浮かんでいる。

左手には、見慣れない文字の彫つてある奇妙にうねつた杖を持っていた。魔術師であった。

魔術師の存在は珍しかった。《封印戦争》で魔物達が姿を消し、今ではそれぞれの国の宮廷や、遙か東方にあるザーナ魔法王国にしかほとんどいないのである。時折、探索の度に出る魔術師を街中で見かけるくらいだろうか。

「ミーゼ、君はもつとかかると思っていたのかい？」そんなはずは無いだろうと言いた気に、魔術師はそつと続けた。

いつの間にか、魔術師の隣にミーゼと呼ばれた女は立っていた。綺麗な女性だった。

身に付けている真つ赤な鎧は、胸の谷間と膨らみを強調するように

曲線を描いている。細く括れた腰と豊満な胸は男の目を奪うのには十分なものだろう。腰には二本の細身のロング・ソードを吊るしていた。背中まである赤い髪が、風で顔にかかるように邪魔そうに手ではかき払った。その無造作な仕草が一層、魅力的に映る。

だが、ミーゼの魅力はこの男にはどうとも映っていない様であった。魔術師にありがちな、純粹に知識にしか興味の無い男なのである。

ミーゼは少し不満そうな視線を向けながら「もう少ししかかると思っていたわ」と答えた。

普通に戦っていたらもっと日数のかかったであろう戦いも、たった三日で砦を陥落させてしまったのだ。しかも、堅固な砦とそれを守る数百人の敵を相手にして被害はさほど然程ではなかった。それもこれも、魔術師の魔法と妖魔を操る力の為であった。

魔術師の魔法で姿を消す魔法がある。どうやらそれと同系列の魔法の様であったが、ミーゼには魔法の事は良く解らなかった。何か不自然な空気に触れた気がただけで、特に変わった様子はなかったのだが、ベイグナルの説明では遠くからは透けて見えるとの事だった。だから砦の近く、投石の届くところまで見つからずに進軍できたのだった。

ただ、この魔法は意識の集中を続けなければならなかった。そのため、ベイグナルは小さな輿の上に乗し、移動をしながら魔法を続けたのだ。攻城が始まった時、元々体力の無い魔術師は気絶して倒れてしまった。ミーゼ達は大丈夫かと慌てたものだ。

それだけではなかった。しばらくして意識を取り戻したベイグナルは、杖を振り回しながら呪文の詠唱を始めた。次の瞬間、砦の前の空間が割れて、醜い妖魔が何十匹も姿を現したのだった。砦の兵はもちろん、これには説明を聞いていた帝国兵も驚いて兵を退いてしまった、そのため、緒戦はすぐ終わってしまったのだが。

だからミーゼの言葉に嘘はなかった。

ベイグナルはクスクスと言葉の代わりに笑って答えた。

しばらく二人が話していると、通路の奥にある階段から複数の足音

が聞こえてきた。

「おー、こんなところにいたのか」

階段を上がったところにある、壊れた両開きの扉の残骸から、上半身を覗かせる様に、声をかけてきた者がいた。

黒い甲冑に身を包み、赤い外套を風になびかせながら近づいてくる。外套の中から、柄に白い石をはめ込んである剣が見える。兜を左手に抱えていた。後ろには何人かの護衛兵を連れている。

「軍師殿、この後はどうしたものかな？」

その男は、今回の王国侵攻の総大将だった。普通なら使いを寄越して自分の元呼び寄せるのだが、この男は生来の気さくさからあまり形にこだわる事は無かった。

「これはこれは、コウパ殿・・・」

さも驚いた風に頭を下げながら、魔術師は答えた。ミーゼもわざとらしい魔術師の態度に、見えない様に苦笑しながら方膝について頭を下げる。それを見たコウパは「ここは堅苦しい宮廷ではないのだ、気にするな」と声をかけた。

気さくで人柄も良く、部下からは慕われていたが、あまり有能とはいえなかった。

「そうですねえ・・・」魔術師はしばらく考えてから「偵察を出しましょう」と言つて、他にも幾つか話すと理由を付け加えてから「では、よろしく」と言い残すとその場を後にした。

後には意外そうな顔をしたコウパとミーゼが残された。

魔術師の意見はこうだった。まず、偵察を出して南の麓を偵察する。その間に砦の南側を改修するというものだった。

普通なら、このまま一気に侵攻して、体勢を整えていない間に港町を攻めてしまうのが上策と思っていた二人には意外な提案であった。「街などいつでも陥とせます」魔術師はそう言つて、何を考えているかわからない眼を、驚くコウパに向けるとニツと笑つて「私の魔法でね」と言いた気に杖を掲げて見せたのだった。

ミーゼもコウパと幾つか言葉を交わすと「では、任務がありますので」と言つて魔術師の後を追いかけて行つた。

ミーゼは元々、皇帝の近衛兵だった。

それが宰相アモイの命により、軍の中にあつてベイグナル護衛という独立した任務が与えられていたのだ。その為の兵も預かつている。アモイは、十年程前に帝国に現れて前皇帝に取り入つた男だ。前皇帝亡き後は、幼い皇帝に代わつて帝国の宰相となり、実権を握つてゐる。ベイグナルはアモイの連れて来た魔術師であつた。

新参者のアモイが宰相に就くのは極めて異例な出来事であつた為、異を唱える者も多く、裏では大きな政治闘争があつたらしかった。その為、前皇帝の崩御にはアモイの黒い噂も流れていた。だが、今はそれを表立つて騒ぐ者はいなかった。

コウパは後ろに控えていた部下に、偵察部隊の編成と砦の南側の改修を命じると、一人残された通路で腕組みをしながら、遙か前方に見える帝国の領土を憮然とした表情で見下ろしていた。

表に出しはしなかったが、貴族でもない宰相や魔術師を嫌つていた。今回の王国遠征も、元々は反対の立場であつた。王国遠征だけではない。宰相は騎士団を二手に分け、そのもう一方を東の隣国へ向けていた。

「どこの馬の骨とも知らない分際で・・・」

そう吐き捨てるように、コウパは呟いていた。まだ暖かい秋の午後の陽射しを身体に受けて、帝都のある方角を憎々しげに睨みつけていた。

五、不思議な穴

五・不思議な穴

テイルトの村の広場ではかがりび篝火が幾つか焚かれ、夜でも作業できるようにしていた。

だが、その日は決して十分とはいえないまでも、作業が一段落したので村人達は、わずかな見張りを残して眠りに就いていた。

女子供を避難させてから、満足な休みも無いままだったのだ。さすがにこのままだと敵兵ではなく、疲れに殺されてしまいそうであったからだ。

アスターは、ジュランから急ぐように言われていただけで、休憩の取り方などについては任されていた。明日の朝までは休む旨を伝えると「わかった」と言われただけで、他には何も言われなかった。騎士達よりも夜目の利く者を、交代で見張り台の上に立たせた。他の者には弓矢と楯、それと用意できる者は剣を自分のベッドの脇に置くように指示して眠りに就いた。

何時攻められてもすぐに戦えるようにとの配慮からである。最も、人同士の戦いなどした事の無い者達だ。魔物に有効かどうかとも判らない。気休めでしか無い様にも思われたが。

エイグは相変わらずアルスのそばにいた。

玄関を入った部屋の窓際で椅子に座り、槍を片時も放さずに視線を広場のかがり火に注いでいる。部屋には他に、ジュランの部下の騎士が二人いた。ジュランからの指示でアルスの護衛に就いているのだ。

騎士団長の息子でなかったら、よこしてはいないだろう。ジュランは決して利己的な嫌な男ではなかったが、人並みの保身的な考えはあるようだった。

カインはアルスの隣の部屋にほとんど籠りつきりていた。今も部屋

の中だが、寝ているのか起きているのかは解らなかった。たまに部屋から出てきて外の様子を見回ると、また部屋に戻っていく。村人の目には敵を警戒しての見回りに映っているようであった。

ドン・・

それは唐突だった。

予想していた事ではあったのだが、永遠に來ないで欲しいと願うばかりに、気が反応するのに時間がかかったのだろう。エイグは我に返ると、空を見ていた眼を見張り台に向けて、得物を確かめながら立ち上がった。

見張り台では、辺りを警戒していた村人が大声で「何か来るぞー」と叫んでいた。幸運だったのは、月が出ていて、少し遠くからでもそれに気付く事ができた事だろう。

村人達は、見張り台から発せられた銅鑼の音に半ば恐慌をきたして右往左往している者がほとんどであった。

「武器を持てー」

騎士達の怒鳴る声と、一緒になって村人達を落ち着かせようとするアスターやジェイズの姿があった。

しばらくかかって、ようやく怯えた村人を広場に集め終わると、そこへ城壁の上から向こうを見に行っていたジュランが戻ってきて話し始めた。

「どうやらついに來たようだ・」

その声を聞いて、村人達の間大きな動揺が起こる。中にはすすり泣く声も聞こえる。

エイグとカイン、それに一緒にいた騎士もジュランの話の聞こえと集まっていた。アルスも持ち慣れない剣を携え、狩用の軽い皮のジャケットを着て、少し青褪めた顔をしながらジュランを見ているのが見える。

「時間が無い、一度しか言わないので良く聞くように」

ジュランは、目の前が正規兵だけなら言わない前置きを言うと、一

呼吸置いて続けた。村人は、ジュランの良く通る力強い声に黙って耳を傾けていた。

「良いか。討つて出る事はせずに、中から飛び道具で応戦する。幸い、狩りで鍛えた弓の名手揃いである。鎧の隙間、なるべく首や顔を狙え」

ジュランはそう言うと、剣を鞘から抜き放ち「我らには、天上の神々と剣国王リジャール公武王のご加護がある！ 勇気を忘れるなっ！ 敵に怖れを抱かせるのだっ！」と一際大きな声で鼓舞すると、振り被った剣を門に向けて振り下ろした。

それを合図に、村人と騎士達は一斉に勝鬨を上げると、手に得物を持って城壁へ上った。

どうやら、村人達はジュランの気迫と言葉に勇気を奮い起こしたらしい。エイグはさすがだと思いつながら、自らも城壁へ上がり槍を脇において弓を構えた。そばにはアルスの姿も見える。

隠れていてくれと諭しても、この少年は「自分も戦う」と聞かなかつたのだ。

騎士達も村人達に混じり、弓を構えて前方を見据えている。

テイルトの村の北側には、少し狭い平野があり、その北側には西へと広がる大きな森が広がっていた。森の少し東よりのところには、皆へと向かう小さな街道が北へ延びている。

昼間なら見通しの良い平野も、夜の闇が全てを飲み込もうとその口を開けているようである。白々と降り注ぐ月明かりだけが、闇の中でそれをかるうじて視界に映し出していた。

村から歩いて四半時ほどの場所、ちょうど平野から北へ延びる街道に入る場所に、横一列に並ぶ騎兵の姿があった。

帝国の軍勢であった。村の城壁からでは夜の闇も手伝って、正確な数は判らない。すでに半時ほど、帝国兵はその場でこちらの様子を窺っていた。

村の広場に焚かれていたかがりび篝火はすでに消され、辺りを静寂

が包んでいる。どうやら、村の明かりが消えたのを警戒して帝国兵は立ち止まったらしい。

夜の静けさの中、遠くから馬の嘶きが聞こえてきていた。耳を済ませれば、村人達の緊張した息遣いも微かに聞こえてくる。

ごくっ・・・

緊張の為か、誰かが生唾を飲み込む音が聞こえて来た。

帝国兵に聞こえる筈は無いのだが、その音を合図にした様に、前方に見える騎兵の一団が動き始めた。馬の蹄の音がだんだんと近づいて来る。

「来るぞっ！」

誰かが、声を挙げて注意を促した。

「弓を構えー」

ジュランの声だ。ジュランは頭上に剣を振りかざすとそこで止めた。馬に乗った影の軍団が、雄叫びを上げながら近づいて来る。

蹄の音と馬の鳴き声、そして帝国兵の上げる雄叫びが徐々に大きくなっていく。

近づくに連れて、帝国兵の数がそれ程多くない事が判かった。まだ後ろに隠れているのかもしれないが。

「ひるむな！ 敵の数は少ないぞっ！」

だんだんと近づいて来る敵兵の姿を見て、恐れを抱いて身を引こうとする村人達の姿にジュランが叫んだ。

「狙いよーういっ」

帝国兵は小さな平原の中央まで迫ってきていた。もう少しで弓の届く距離に近づこうとしている。

ヒュッ

しかし、ジュランの合図を待たずに誰かが矢を放った。その音を合図に、他の村人も一斉に矢を放っていた。

「まだ早いっ」

エイグは思わずそう叫んだ。

放物線を描きながら放たれた矢は帝国兵達には届かず、地面に次々

と突き刺さっていった。

「次の矢構えっ」

ジュランは、慌てて次の矢をつがえさせると、再び剣を振り上げてその時を待った。兵国兵は徐々にその距離を縮めている。

「十分ひきつけるのだっ」

今度はそう付け加えると、狙いを定めていく村人達を大声で鼓舞してから帝国兵に眼を向けた。

「放てーっ！」

帝国兵が石壁から僅か百歩ほどのところまで来ると、ジュランはそう言い放って剣を振り下ろした。と、同時に石壁から一斉に矢が放たれる。放物線を描く矢は、吸い込まれるように帝国兵の頭上に降り注いだ。

だが、ほとんどの矢が硬い甲冑や楯に阻まれてしまい、数人の帝国兵が落馬していくのが見えただけであった。

「放てーっ！」

次の矢をつがえた村人達は、ジュランの号令に従って次々と矢を放っていく。

今度の矢は先ほどよりも正確に帝国兵を捕らえていた。また何人かの帝国兵が落馬していく。

四度目、五度目と矢が放たれ、その度に何人かの帝国兵が倒れていた。中には矢が馬に当たり、馬ごと崩れていく者もいる。少しずつではあるが、確実に敵を減らしていた。

しかし、帝国兵は石壁の目の前まで来ると、突然、進路を西へととり、上体をこちら側に向けて、左手に構えた楯に身を隠した。

「やったぞー」

村人たちから歓声が沸いた。帝国兵を追い払ったと思ったのだ。否。

エイグはその時、帝国兵達の構える楯の上にあるそれを見逃さなかった。

「伏せろー！」

そう叫びながら、エイグは隣にいたアルスを抱きかかえるように城壁の床に倒れた。事態を把握できないアルスは、戸惑ったままエイグに身を任せた。ジユランの「身を隠せ」と言う叫びが、悲鳴のよう聞こえた。

ヒュツ・・ヒュヒュヒュツ

矢が飛ぶ風切り音が聞こえた。

一瞬の間を空けて、城壁には大量の矢が次々と浴びせられた。瞬間、何が起こったのかわからずに、何人かの村人達が倒れていった。断末魔の悲鳴が聞こえて来る。

倒れたエイグの視界でも、何人かの村人が胸や首に矢を受けて倒れていく姿が見えた。

帝国兵達は馬の進路を変えて、移動しながら矢を放ってきたのである。矢の風切り音や降り注ぐ矢の数から、連射可能な石弓だろうと思われた。

しばらく経ち、矢が飛んで来ないのを確かめると、エイグはアルスから身体を離して、屈んだままの上体で城壁の向こうを覗き込んだ。すでに石壁の前には帝国兵達の姿は無かった。西へ抜けた後、もう一度進路を変え、北の小さな街道の方へ動いて行く黒い塊が見えただけであった。

東の山々の頂が少しずつ白み始め、月は徐々にその輝きを失っていた。

ここは大陸の西にある王国の、北の山間にある小さな村ティルト。

普段は畑を見回る者や狩をする者の姿があり、小さいながらも活気のある生活が営まれている。

だが、今は陰気な空気が流れ、悲嘆さを漂わせる村人達の顔には疲労と絶望の表情が浮かんでいた。数人の騎士達を石壁と見張り台の上に残し、村の広場には生き残った者が集まっていた。嗚咽が聞かれ、騎士も村人も皆、うなだれていた。

昨晚の帝国兵との一戦により、十人ほどの村人が命を落としていた。

遺体は十分な葬儀もできずに、墓地へ埋葬されていた。

帝国兵達の数は思ったより少なく、村人達と同じ程度だと思われた。さすがに完全武装の騎兵でも、小さな村に似つかわしくない城壁の為に、一気に攻め落とすには無理があると考えたのだろう。

帝国兵達は、相変わらず北の街道の辺りに陣取り、動く気配を見せないでいる。

本隊の到着を待っているのだろう。

それがジユランの見解であった。

確かにそう思えた。いたずらに兵力を消耗する愚は犯さないだろう。例えどんな理由であれ、今はそれが唯一の救いであった。砦から火の手が上がってすでに十一日目。順調な行程であれば王都を出発した騎士団は、すでにシユプールを経由してこちらへ向かっていると思われたからだ。

ジユランは、集まっている村人達に「もう少しの辛抱だ」と伝え「

騎士団が到着すれば助かる」と、説いていた。

アスターやジェイズの、村人を勇気付けている姿も見える。

しばらくの後、村人達は解散して力無くそれぞれの家に戻った。

エイグは、アルスが恐怖や不安に負けないか心配であった。だから、悲惨な村人達の姿をあまり見せないようにと考え、カインと三人で石壁の一角にいた。

そんなエイグの気持ちを探してか、アルスは弱音を吐く事も無く、石壁の上でカインから剣の手解きを受けていた。

騎士の息子として、幼い頃から剣術を教え込まれていたが、アルスは基本中の基本しか知らず、実戦ではまだ力不足だった。少しでも生き延びられるようにとの考えからである。

槍の扱いには慣れたエイグも、剣の扱いはそれ程でもなかった為、カインに剣を教えるように頼んだのだった。カインが引き受けてくれるかどうか不安であったのだが、カインは二つ返事で承諾し、暇さえあれば剣の基本をアルスに教えていた。

まだ秋も始まったばかりであったが、山の夜は平地より気温が下が

る。エイグは、羊の毛を編んで作った毛布で身体を包んで寒さを凌ぎながら、帝国兵の動向を警戒していた。

吐く息にも少し、白いものが混じっている。陽が昇れば気温は上がってくるだろう。白みを増す東の空のように、希望が現実のものになる事を願うばかりであった。

村は相変わらず重々しい空気に包まれていた。

普段なら気持ちの良い小鳥の囀りも、今はどこか不気味な感じさえ与えている。

山々から、時折吹き降ろす北風に身を縮ませながら、見張りについている数人の人影は、北の小さな街道の入り口に陣を張る帝国兵達に眼を向けていた。

帝国兵の張る天幕も、風になびいてバタバタと波を打っているのがわかるが、音まではさすがに聞こえてこない。

最初の襲撃から、すでに三日が経っていた。その間、帝国兵は何度か矢の届くギリギリのところまで進んでは引き返し、村へ圧力をかけてくる。その度に村人達の疲れは蓄積していった。

村人から、何とか西の街道からタンカスの街へ逃げられないかとの提案も出たが、馬の足に徒歩で敵う訳も無く、結局立てこもって騎士団の到着を待つ事になっていた。

それに気付いたのは、見張り台の上にいた若い村人であった。

エイグはちょうど、夕食にと配られた硬い干し肉に噛り付いているところだった。隣にはアルスとカインも剣の練習の手を休め、少し早めの夕食を味わっている姿があった。

その若い村人の緊迫した声に、三人は石壁の外へ眼を向けた。

北の街道の入り口に陣取る帝国兵の向こう側、街道が緩い曲線を描いて右手に見える崖の影に消える部分に黒い塊が見える。

「あれは・・・」

エイグは呟いていた。

見張りの声に、石壁の上へ様子を見に来た村人や騎士達も、それを見つけると悲鳴にも似た声をあげている。

その黒い塊は、見る間に崖から長く伸びながら帝国兵の陣へと伸びてきていた。

帝国兵の本隊である事は明白だった。黒い塊の中に、一際大きな建物のような物もこちらへ向かって動いてくるのが見える。

投石機！

エイグは、見覚えのあるそれが砦を襲った投石機であることに気付くと、無意識に身体を震わせていた。

隣で、アルスが生唾を飲み込むのが聞こえる。アルスにも解つたのだろう、少年は口を半ば開けたままの状態で青褪めた表情を浮かべ、肩を震わせていた。

「全員、石壁の上へー！」

騎士達に混じって、アスターが叫んでいる。

村人と騎士達は手に弓を持って石壁へ上ると、重々しい表情のまま位置についていく。

帝国兵の陣では、人が黒蟻の様に慌しく動いている様子が窺える。

どうやら合流したようであった。

それからふたとき二刻程の後、帝国兵はゆっくりと矢の届くギリギリの距離まで進んできた。だが、今度は今までの牽制とは違い、そこへ大部隊を配置している。その後ろには、大きな攻城用の投石機が不気味に姿を晒していた。

突撃の合図が下れば、例え堅牢であつても守る者の数の少ない石壁など、一瞬にして突破されてしまうだろう。村人も騎士達も、皆、黙ったままその光景を見つめていた。

まるで蛇に睨まれた蛙の様に、エイグも息を呑んで見守っている。村人達も逃げ出したい衝動すら忘れて、目の前の圧倒的な雰囲気飲み込まれていた。

どれほどの時が経っただろうか。太陽が西の山々の陰に、その姿を

ほとんど隠して空を赤々と燃やしている。

もうすぐ夜の闇が訪れて、辺りはまた月明かりに照らされた世界へと変わっていくだろう。

緊張感の高まる中、異変は起こった。

村の門の外側、ちょうど門の高さの二倍程の空中に、人影が姿を現したのだ。

空中に現れたのは、一目で魔術師とわかる人物であった。

薄黄緑色の外套を肩から無造作に掛け、正面の隙間からは青一色のローブが覗いている。その隙間の左側から、杖の柄だろう物が見える。整った顔には薄笑いを浮かべ、どこか冷酷さを感じさせる茶色の眼が、こちらを見下ろしていた。

石壁の上は騒然となり、驚きや不安といった声があがる。

当然であった。魔術師は宮廷や、遙か東の魔法王国ザーナでしかほとんど見る事の無い者達であった。

稀に遺跡探索の旅をしている魔術師を、街中で見かけるくらいだ。村人達はおそらく、一度も見た事が無いのであろう。戦中だというのに呆然と口を開けて、その魔術師の浮かぶ姿に眼を奪われていた。騎士達も畏怖と怖れの眼を向けている。通常の武器では戦うのさえ難しい事を知っていた。この人数では、近づく前に倒されてしまうだろう。

だが、一人だけ違った表情をしてその魔術師を見上げる者がいる事に、誰もまだ気付いてはいなかった。

「ふふ・・・」

ベイグナルは不適に笑うと、下から自分を見上げている村人達に視線を落としていた。

驚いている村人の姿に混じって、村の守備隊だろう王国の騎士が何人かいるのが見える。

「少々驚かせてしまいましたね」

無邪気な少年が悪戯をする時の様な表情をしながら、その魔術師は

呟いた。

「こんにちは、みなさん」

魔術師は戦の最中とは思えない、ゆったりとした口調で、しかし村人達全員に届く声で話し始めた。

「つまらない抵抗をして、命を粗末にするのは愚か者のする事です、武器を捨てて投降すれば、命は助けてあげましょう」

ゆっくりと、理解できるように間を空けながら、ベイグナルは静かに言った。

石壁の上の村人達からは、明らかな動揺が伝わってくる。どうやら自分の言葉の意味が伝わったようだ。

村人達の中にいる騎士達のうち、肩に緑色の布をつけている男が「だまされてはならない」と、必死に村人を落ち着かせようとしている。その男の後ろの方では、「投降しても命の保障などあるものかと若い兵士風の男が声をあげている。」

ベイグナルは「さて、どうしたものでしょうね」と呟きつつ、村人達の様子を楽しみながら次の言葉を投げかけようとした。

と、その時であった。自分目掛けて一本の矢が飛んできたのだ。矢は魔術師の目前まで来ると、不意に勢いを失ってそのまま落下していった。

見ると、その兵士風の男の後ろに立っている騎士が矢を放ったらしく、弓を構えたままの状態で、憎々しい表情でこちらを睨みつけていた。

上空に現れた魔術師は、どうやら降伏を勧めに来たらしかった。

魔術師の言葉を聞いた村人達には動揺が走り、それをジュランが抑えようとしている。

「そうだつ！ 帝国兵に投降しても、命の保障など無いっ！」エイグも槍を構えながらそう叫んだ。

その時だった。自分の頭の上を飛び越えるように、一本の矢が魔術師に向かって飛んでいった。だが、矢は魔術師の身体に触れる事の

無いまま、地面に落ちていった。

矢除けの魔法が掛かっているのであろう。魔術師一人で来るのだ。そのくらいの用意は当然と思われた。

「騙されてはならない」「弓を放った男はそう叫ぶと続けて言った。」「その魔術師は、十四年前にグレデイスを襲った野党の一味の者だつ、投降したところで命の保障など無い、貴様がなぜ、帝国兵に加担するっ」最後の言葉は魔術師に向けられたものであった。

エイグは突然の成り行きと、その言葉の意味に驚きながら、後ろを振り返っていた。

憎々しげな言葉を発したのはカインであった。アルスも驚いた様子でカインを見ている。

カインはそう言い放つと、憎しみの燃える眼で魔術師を睨みつけていた。怒りで体が小刻みに震えているのがわかる。

グレデイスの野党襲撃事件。

それは王国の者なら誰でも知っている事件であった。

今から十数年前。王国の南西、王都から北西のシユプールへ向かう街道のはずれにある小さな街、グレデイスで起こった野党の襲撃事件であった。

当時、王国の南西一帯の街や村を襲う大規模な盗賊団があった。それまでも小規模な野党の出没はあったものの、限られた地域で起こっていた小規模なものであった。

しかし、その盗賊団は違った。噂では周辺の野党を従えて、数百人もの大きな集団で街や村を襲い、略奪の限りを尽くしていた。刃向かう者は、女子供であろうと一切容赦せずに虐殺していたという。その事件とカインとの間に、一体どんな関係があるのかは解らなかつたが、ただ、その野党の中に魔術師がいたという話は聞いた事が無かった。

村人達も事件の話を知っていたらしく、カインの言葉を聞いて、さらに動揺と怯えが広がっていた。

騎士達は呆気にとられていたが、徐々にカインの言葉を理解すると、次々と怒りの眼を魔術師に向けた。

それもそのはずだった。野党の襲撃で、街に詰めていた兵達も大勢が命を落としていた。その盗賊団討伐のために、命を落とした者もいたのだ。その中には友人もいただろう。肉親を失った者もいたはずである。

アルスも当然、その話は父や母に聞かされて知っていた。自分がまだ、生まれる前に起こった事件である、

当時、別の問題で王国は混乱していた。その時、まだ騎士団の一部隊長であった父、カルマは盗賊団討伐の任に抜擢され、派遣されたのだった。満足な兵力も無いままの出陣であった。しかし、カルマはグレデイス近郊に赴いて見事、盗賊団を討伐したのだった。その時の功績が認められ、後にカルマは騎士団長となった。

アルスは自慢の父の活躍を思い出し、体が熱くなるのを感じた。

「騙されるものかつ」

村人達は口々に叫びだすと、弓を構えて矢を放った。次々と放たれる矢は当たるはずも無く、むなしく魔術師の前で進路を変えて地面へ落ちていった。

アルスも父の敵だった男だと知ると、敵意の眼を向けて剣を構えた。空中に浮かぶ魔術師に剣が届くはずも無かったが、今の少年にはそれが精一杯の態度だった。

「ん・・・」

どこか見覚えのある様な顔であった。ベイグナルは、遠い昔の記憶にその男の顔を重ねていく。

「おやおや、あの時の・・・」

ベイグナルはそう言いながら、十余年前を思い出して「確かにあの時の男だ」とクスクスと笑った。

見覚えのある茶色い眼は、あの時と同じ激しい感情を剥き出しにして自分を睨んでいる。

村人達は十余年前の盗賊団の事件を思い出して、険しい表情を浮かべ始めている。それは次第に広がって、罵倒し始める者があらわれた。中には弓を構え、矢を放ってくる者もでてきた。

「やれやれ・・・どうにもなりませんね」魔術師はおどけた様に肩を竦めながら呟くと、次の瞬間、決して帝国兵の前では見せない、冷酷な表情を浮かべて言い放った。

「そんなに死にたいのなら、望みどおりにして差し上げますよ。愚かな愚民風情が、私に刃を向けた事をあの世で後悔するが言いつ」そう言葉を発した魔術師を見て、城壁の上は凍りついていた。先ほどまでの、どこか楽しんでいる雰囲気は消え去っていた。そこには、空間を切り裂いて生まれた、異界に通じる穴のように不気味な恐ろしさを感じさせる二つの眼が、自分達を見下ろしていたからだ。次の瞬間、ベイグナルは左手に持った杖を小さく振るうと、現れた時と同じように消えてしまった。

城壁の上では、青褪めた村人と騎士達が弓を構えて、目の前に広がる小さな平原を埋め尽くすほどの大群に、ただ畏怖していた。

魔術師が門の上から消えて、まだそれほど時は経っていなかった。だが、すでに帝国兵が慌しく動いているのが見える。遠くから小さく掛け声が聞こえてくる。帝国兵の後ろにあつた投石機が、少しずつこちらへ移動しているのがわかる。

ごくっ

誰かが生唾を飲み込んだ。

城壁の上では、誰一人声を出す者のいないまま、帝国兵の動きに視線を向けていた。

いかに頑丈な城壁や門でも、投石機で攻撃されたらひとたまりも無いだろう。エイグはその事を一番良く解っていた。帝国兵がまず、投石機で城壁や門を壊し、次いで兵士を送り込むつもりである事は容易に想像できた。

他の騎士達もそれは解つたのだらう。すでに逃げ腰になっていた。

と、その時だった。突然、雷に似た音と共に、にびいる鈍色の閃光が辺りを照らし出した。すでに、その赤みを薄れさせていた夕暮れの空に閃光が重なった。一瞬、神秘的な光景を映すと光は消えた。それと同時に、西側の城壁に近い空間が割れた。そこには今まで誰も見た事のない、醜い姿をした奇怪な生き物がうごめ蠢いている。一瞬の間を空けて、その割れ目から醜い生き物は溢れ出てきた。帝国兵も何度見ても見慣れないその光景に、思わずたじろいでいる。

「わぁー」

「ひいー」

村人達は、投石機がだんだんとこちらに近づいてくるのを認めると、我先にと弓を放り出して、逃げ出し始めた。むしろ、ここまで恐怖に耐えてきたのが不思議なくらいだった。

「留まれっ！ 留まるのだっ！」

ジュランが青褪めた顔をしながら、慌ててそう叫んでいる。

エイグやアルスには、見覚えのある姿だった。砦を襲った帝国兵に混じっていた妖魔の姿であった。

エイグもそれを見ると、戦うのはもう無理だと悟り、アルスを逃がす事を最優先にしようと考えた。

アルスはさすがに逃げ出す事はしなかったが、砦での投石の凄まじさを知っているからか、身体をガタガタと震わせて、泣き出しそうな表情で剣を握り締めていた。

カインは悔しそうな表情で帝国兵へ向けていた顔をエイグに向けると、意図が判ったのかコクツと頷いた。そして、恐怖で凍りついているアルスを肩に背負って、南西の森を目指して走り出した。

バシュツ・・・ドドーンッ

それは耳を劈く大きな音を立てて、村の東側にある民家を押しつぶした。ちょうどアルスが寝泊りしていた家だ。

投石された巨大な石は、そのまま勢いを緩めずに押し潰した民家から転げ出ると、その隣の民家を巻き込みながら数軒をまとめて押し

潰してようやく止まった。石壁の外では帝国兵の喊声が拳がついている。

もはや、たった数十人でどうにかなる相手ではなかった。いや、初めからそうだったと言っべきか。頼みの騎士団も、いまだに到着する気配を見せず、村の石壁を乗り越えて帝国兵が雪崩れ込んで来るのは時間の問題だと思われた。

ドドドーンッ・ズンッ

今度は見張り台を掠めて、石壁に近い広場の中央に巨大な石が落ちた。破壊する物の無い広場の土はめくれ捲れ上がり、巨大な石が包み込まれるように地面にめり込む。

辺りには見張り台だった物が、その原形を留めずに散乱している。見張り台は衝撃で屋根が吹き飛び、半分から上が折れて後ろに落ちていた。

エイグ達三人は、他の村人や騎士達と一緒に南西側の森の中へ避難していた。

森の前に置かれていた、切り出した木材が、巨大な石が地面へ叩きつけられる度に飛び跳ねる。

次の投石で城壁や門が壊されれば、帝国兵や醜い妖魔は大挙して雪崩れ込んでくるだろう。

村人達は口々に悲鳴を上げながら、南西の森の奥へ逃げ込んでいった。ジランや他の騎士達も「退けー」と声を掛けながら、森の中に逃げ込んでいくのが見える。

エイグ達は、森に入ったすぐのところ、しばらくその光景に眼を奪われていたが、すぐに村人達の後を追いかけた。

だが、その切迫した空気の中、ある異変に気付く者は、まだいなかった。

ズーン・ドドドッ・ガラガラ・

三度目の投石が、門の脇に炸裂した。

投げ込まれた巨大な石は、門の左側の石壁を崩し、衝撃で門も粉々

に吹き飛ばしながら、広場の北の外れまで来て止まった。

森の中にまで、石壁の崩れる音が聞こえてきた。

その音は、村人達の心を打ち砕くには十分な音だっただろう。何人もの村人達が後ろを振り返って、恐怖に引きつった顔を村へ向けると、また走り出した。中には、その場へ力無く座り込んでしまう者もいた。

「来るぞっ」

誰かがそう叫んだ。泣き声や悲鳴も聞こえる。

南西の森は、何百年も前から村人達の生活に密接に関わって来た。

今、その森の中を村人や騎士達は、西へ一斉に逃げていた。その向こうには、高くそびえる山々が木の陰から、やってきた月の光の中で黒く巨大な影となってチラチラと見える。

後ろから帝国兵達の声が、一つの大きな唸り声のように聞こえてくる。

だが、その唸り声に重なるように、突然それは聞こえてきたのだった。

帝国兵と魔物達は、崩れた石壁と門のところから一斉に村へ雪崩れ込んでいた。

近くにあった民家からは、次々と火の手が上がる。醜い妖魔どもは先陣を切って村の広場を横切ろうとした。後ろには、出遅れた妖魔と帝国兵が次々と石壁を乗り越えてくる。

だが、突如それは起こった。

広場の中央、投石の衝撃で土にめり込んでいた巨大な石が、地面に吸い込まれるように姿を消したのだった。それはまるで夢の中での出来事のように、ゆっくりとした速さであった。

続いて、巨大な石のあった場所を中心に、ガラガラと何かが崩れる音を響かせながら、脇にあった民家を数軒巻き込んで地面が崩れていった。

もうもうと立ち込める砂煙に視界を奪われ、帝国兵や妖魔達は何が

起こったのかわからず、一瞬足を止めた後、広場から八方へ逃げ出していた。だが、人の足では敵わない速度で崩れていく地面に、吸い込まれるように落ちていく。

ほとんどの帝国兵と魔物達は、村へ侵入した事を後悔する事になった。悲鳴を上げることしかできずに、広がっていく穴に落ちていった。

帝国兵や妖魔の悲鳴は、森の中まで聞こえていた。

??

その悲鳴が、先ほどまでの勝ち誇った帝国兵のそれではなく、悲痛に満ちている事にエイグは気がついた。

騎士団が来てくれたのかっ

エイグはそう思って足を止めた。

隣には、何事かと足を止めて自分を見ているアルスと、同じく異変に気が付いたのだろう、足を止めて村の方に眼を向けるカインの姿もあった。

だが、騎士団が来たにしては、剣の打ち合わされる音などは聞こえてこない。

近くには、異変に気付いたのか、エイグ達の様子に気付いたのか、アスターやジェイズ、それにアルスを守るように命じられている二人の騎士が、不安そうな表情のまま近づいて来ていた。

「よしっ、様子を見に行こう」

エイグはそう言うのと、ここに残るようにアルスに伝え、二人の騎士に護衛を任せてカインと共に村の方へ引き返していった。

アスターとジェイズも、どうしたものかと顔を見合わせていたが、意を決したようにエイグとカインの後を追った。

「こ、これは・・・」

エイグ達四人は、息を飲んで目の前の光景を見守っていた。

誰の口からとも無く、驚愕の言葉が漏れる。

それは信じられない光景だった。

つい、先ほどまで村の中央にあった広場は跡形も無く、広場の近くにあった何軒かの家々も、その基礎を少し残して消えて無くなっていた。

二投目に飛んできた巨大な石も、消えて無くなっている。

それは穴だった。

淡い月の光に照らされて、穴と呼ぶにはとても大き過ぎるそれは、広場全体とその周辺部をすっぽりと覆う大きな口を開けていた。その巨大な穴は、上にあった物を全て飲み込んでしまったのだ。

「なんてこったあ・・・」

ジェイズは薄茶色の眼を、その巨漢に似合わない、動揺した様子で丸くさせながら呟いた。

エイグも、騎士団の到着かと思った自分の予想が間違いだった事を知ると、突然に開いた穴を呆然と見ていた。

帝国兵と妖魔達は、石壁の上や壊れた門のところに集まって、突然起きた出来事に警戒しているようであった。

しばし呆然となって、四人はその光景を見ていたが、何やら城壁の上へ逃げていた帝国兵が穴の中を指差して、何か叫んでいるのが見える。

「なんだ・・・あれは・・・？」

カインが呟いた。

エイグも穴へ眼を向けた。アスターとジェイズも、まだ何かあるのかと言いた気にそちらを見る。

そこには淡い紫色をした光が、穴の中から徐々に湧き上がってくるのが見えた。

それは伝説や昔話の中の、鎌首を持ち上げて哀れな犠牲者を一飲みにしてしまう竜の頭のように、溢れ出てきていた。

エイグは奇妙な感覚にとらわれていた。夢の中でまどろむような、とても暖かい、まるで母の腕の中に抱かれているような、そんな感覚であった。

向こうから、幼い頃に遊んだ近所の子供達が、自分の名前を呼びな

がら走ってくる。

「遊ぼうよ」

その子供達は目の前まで来ると、エイグの腕を掴んで引っ張った。
「・・・ああ、一緒に遊ぼう」エイグはそう言って、一緒に行こうとした。

ん？

エイグは、自分の腕を掴んでいる子供の手に見覚えがあった。遠い昔に見た事のある懐かしい手だった。右手の親指の付け根にある、
、ほくろ、親の手伝いで赤切れた指。確か、十歳の夏に川遊びをしていておぼれた友達・・・。

「あつ！」

エイグは声を挙げた。それは、もう二度と会う事のできない友達の手であつた。

エイグの眼に焦点が戻ってくる。

「魔法つ！」

ハツとなって辺りを見渡そうとしたが、急に後ろに引っ張られてエイグは仰向けに転んでしまった。他の三人も自分の周りで転んでいる。何が起こったのか理解できずに、エイグは起き上がるうとして背筋に寒気が走るのを感じた。

淡い紫色の光が溢れ出る不気味な穴が、自分を飲み込もうと目の前で口を開けて待ち構えていたのだ。

後一步、足を運んでいたら間違いなく穴の中へ落ちていただろう。

エイグは正気を取り戻した事を告げると、急いで仲間と共に森へ引き返した。

どうやらあの薄紫色の光には、見る者を誘惑して惹き付けようとする魔力があるようだった。しかし、エイグ以外の三人にはそんな症状は無く、なぜエイグだけが魔力に捉われたのかは解らずに四人は首をかしげた。

「おい、あれを見ろっ」

アスターが城壁の方を指差して言った

そこでは、エイグのそんな疑問を忘れさせてしまふ出来事が起こっていた。

城壁の周りでは、先ほどまで味方だった者達に襲い掛かる妖魔達と突然向けられた凶刃に慌てふためきながら応戦している帝国兵達の姿があった。戸惑いや断末魔の声、金属の打ち合わされるような鈍い音が聞こえてくる。

「どうなってるんだ？」

ジェイズがボサボサの赤い髪の毛を、さらにボサボサに掻き耷りながら、不思議そうに身を乗り出して見ていた。カインは「様子を見に来る」と言い残し、身を隠しながら巨大な穴を迂回して石壁へ近づいていった。

すでに帝国兵達は、村人達を追撃するどころではなくなっていた。突然襲い掛かってきた妖魔達と刃を交えながら、村の外へ後退させられていく。

三人はただ、その光景を不思議そうに眺めていた。

村の中央で大きな音がした。

二投目の投石が着弾したのだ。村から上がる砂埃が、先ほどより石壁に近い場所だと判り、ミーゼは邪魔になら無い様に後ろで束ねた髪を左手で弄りながら、いよいよだなと思って先頭の一団の中にいるコウパに眼をやった。

「突入よーういつ」

コウパは、馬に跨って声を張り上げると、スラリ、と剣を抜いて振り上げる。

石壁の前には、ベイグナルの召還した不気味な妖魔どもがうごめ蠢いている。砦を攻めた時より数は少ないようであった。

投石機の後ろでは、ベイグナルが何やら奇妙な言葉を唱えている。次の瞬間、巨大な石が突然現れて、投石機の、さじの上へ重い音を立てながら乗った。普通なら、次の石を投げるのにしばらく時間がかかるものだが、この魔術師は巨大な石を何処から召還して、

時間を短縮させていた。

こんな事もできるのだな、と改めて魔法に畏怖を覚えながら、ミーゼは魅力的に括れた腰に手を当てて部下に辺りを警戒している様に伝えると、自分は魔術師の近くまで足を運んだ。

すでに結果は見えている。村の中には少数の守備隊と村人しかいない事は魔術師から聞いて知っていた。

ズーン・ドドドツ・ガラガラ・

三度目の投石。今度は村の門とその脇の石壁を破壊した事を、振り返ったミーゼは確認してから魔術師の方を向き直り、歩いていった。「突撃――」

後ろから、コウパの張り上げる声が聞こえる。次いで、帝国兵の駆る馬の足音と喊声が聞こえてきた。

「終わったな」

ミーゼはそう呟いていた。

ミーゼの眼には、杖を振り上げて何やらブツブツと言っている魔術師の姿が映っていた。

と、その時、突然村から何か大きな物が崩れるような音がして、帝国兵の喊声が悲鳴に変わるのが聞こえる。

何事かとミーゼは振り返った。束ねた赤髪がミーゼの動作にあわせて宙を舞う。

だが、ここからでは良く判らない。ただ、村の中から必死に逃げ出してくる兵士や妖魔達が見えるだけだった。

伏兵か？

石壁の手前では、突入しようとしていたコウパらしき人影が驚いた馬から落ちるのが見えた。

後ろに待機していた兵達も、何事かと、一様に当惑の表情を浮かべて見守っている。

しかし、どうやら伏兵ではなかったらしい。

金属の打ち合わされる音や断末魔の悲鳴などは聞こえて来なかった。村へ侵入した帝国兵は、落ち着きを取り戻すと崩れた石壁の周りに

固まって、村の方を見ているようであった。

「あわわわわっ」

そこへ、戸惑った魔術師の声が聞こえて来た。慌てた様子で、左手に持った杖を見ている魔術師がいた。ミーゼはベイグナルの声に振り返ると、違和感を覚えて魔術師の元へ走り出した。

ミーゼが近くによると、どうして良いのか判らずに呆然と魔術師の慌てる姿を見ていた部下達が、困惑した表情を向けてきた。

魔術師は、なおも慌てた様子で杖に描かれている奇妙な文字を見ていた。

「ミーゼ、まずい・・・」

ミーゼが近寄ってくるのを知ると、魔術師は少し苦しそうにそう言った。

「こ、このままでは・・・妖魔達が・・・」

だが、ベイグナルの言葉が終わる前に、魔術師の手に使っていた杖が砕け散った。

破片が力無く、地面に落ちていく。

「ミーゼ、兵士達を下がらせろっ、妖魔達が襲ってくるぞっ」

魔術師は、しばし呆けた様に自分の手の中にあつた物を見ていたが、我に返るとミーゼにそう叫んだ。

「えっ？」

ミーゼは、何が起こったのかわからずにそう聞き返した。

「妖魔を支配していた魔力が消えたんだっ、もう敵も見方も無い、こちらも襲われる・・・」

言い終わるか終わらないか、村の方から驚きと畏怖の入り混じった声が聞こえてきた。

ミーゼは振り返ると、そこに繰り広げられる凄惨な光景を目の当たりにして言葉を失った。

いつの間にか、石壁より少し高いくらいまでの所に、村の中から薄紫色の光が溢れ出てきていた。

その幻想的な光に照らされて、つい先ほどまで自分達と共に戦って

いた妖魔達が、帝国兵を襲っていたのだ。

突然の事に驚いた帝国兵は、驚き、混乱していた。満足に戦うこともできないまま、陣形は崩れていった。

「投石機を中心に陣を敷け！妖魔の数は少ない。一気に殲滅するのだっ！」

ミーゼは事態を悟り、そう叫ぶと静かに腰に吊るしていた二本のロング・ソードを引き抜いた。

逃げ腰だった帝国兵はミーゼの言葉に気付くと、訓練された兵の習慣とでも言おうか、次々と陣形を整えて武器を構えた。

「コウパ様、討死」

その騎士はコウパの側近の男だった。妖魔にやられたのか、左腕にひどい怪我を負っていた。涙目になりながらミーゼにそう伝えると、剣を構えて後ろを振り返った。

コウパは落馬して、しばらく意識を失っていた。気付いた時にはすでに妖魔に囲まれていたという。周りにいた兵達はなんとか助けようとしたのだが、妖魔の鋭い鉤爪を受けて倒れたのが見えたこと事であった。

前の方ではまだ、妖魔が奇怪な声を挙げて飛び跳ねているのが見える。味方なら良いが、敵に回すと厄介だなと思いながらミーゼは戦況を確認する。

村を簡単に陥とせると思っていた魔術師が妖魔達の数を少なめに召還していた為、すぐに鎮圧できそうであった。

ドドドッ

その時であった。

月の光の下、西の方から黒い塊のように見える物が姿を現した。

「あれは・・・」

ミーゼは、馬に跨って平原をこちらに向けて駆け寄せてくる、その甲冑に見覚えがあった。

「シエルバ王国リエの騎士団！」

もうここまで来たのか、と思いながらミーゼは愕然としてそう叫ぶと、急いで皆まで退却するように指示を出した。

決して戦えない訳ではなかったが、突然の妖魔の反抗で混乱しているのだ。しかも、皆を攻めた時の半分の兵しか連れて来ていなかった為、王国の軍勢を相手に戦うのは分が悪いと思われた。

さらにコウパが討死している。指揮官のいなくなった兵ほど脆いものは無かった。ここは一度引き返し、態勢を立て直してから迎え撃った方が得策だと判断した。

すでにシエルバ王国リエの騎士団の姿を見つけていたのだろう、帝国兵達は浮き足立っていた。

「ベイグナルっ」

ミーゼは馬の頭を皆に向けるとそう叫び、後ろで呆然としていた魔術師に手を差し出して後ろに乗せると、退却を叫びながら一気に駆け出した。後ろにはミーゼ配下の者達が馬にムチを入れながらついてくる。

すでに帝国兵達は総崩れとなり、我先にと逃げ出していた。

シエルバ王国リエの騎士団は目前にまで迫っていた。月の光の中、

帝国兵を追い払う姿は伝説の中で語られる英雄達のような。

帝国軍は惨敗だった。

六、語られた真実

六、語られた真実

村の表では、歓声を上げて到着した騎士団を村人達が迎えている。手を取り合い、無事に生き残れた事を喜び合う声が聞こえてくる。そこには涙声も混じっていた。

不思議な光が現れ、妖魔が帝国兵を襲い始めた後、ようやく到着した王国の騎士団は残っていた帝国兵と妖魔を撃退した。総崩れとなった帝国兵は北の街道を進んで皆へ逃げた様であったが、残った妖魔達は北の森の中へ消えて行ったのだった。

「そうか、ご苦労だったな」

カルマは、アルスから受け取った書簡を脇の机に置きながら、一通りの説明を聞くとエイグに軽く礼を言った。

カルマはアルスの父であり、騎士団長でもあった。短く切られた髪は白髪に変わり、この男の齢を物語っている。飾り気の無い騎士の鎧を着てはいるが、右胸に浮き彫りにされた紋章は金箔が貼られていて、左肩には渋い銀色に染められた布が巻かれている。

王家の者にしか使う事の許されない金の色が紋章に使われているのは、この男と王家との間に血縁関係がある事を意味していた。

ゆらゆらと揺れるろうそくの炎が腰に吊るしてある、柄に騎士団の紋章の入ったブロード・ソードを妖しく照らしている。

天幕の中には、カルマとエイグの他にアルスやカイン、ジュラン、アスター達もいた。

カルマの隣には、魔術師と思しき灰色のローブを着た若い女と、右肩に紫色の布を付けた騎士が三人立っていた。

女魔術師はフェイラという。近年、王国に召抱えられた。まだ若い魔術師の評判は、ザーナ魔法王国から遠く離れた王国にも伝わるほ

どだ。あまり表情を表に出さない、細く整った顔立ちからは聡明さが窺える。ゆつたりとしたローブに隠れたその身体が華奢なのは、ローブ越しからでも窺えた。その体付きには良く見られる小ぶりの胸が、ろうそくの炎で小さな影を作っている。他の騎士はカルマの副官達だった。

天幕は、村の石壁の外に張られていた。

石壁の中の方が陣を張るのには良かったのだが、村の広場に開いた穴が広がらないとも限らないからだった。もつとも、千人近い規模の大部隊だった。元から全てが村の中へ入れるはずが無かったのだが。

そこで、騎士団は帝国兵を追い払った後、石壁の北側に仮の陣地を築いていた。

近くの木々に繋がれた馬達が、長旅から解放されて、嬉しそうに休んでいる姿がある。

カルマはアルスに向き直って「良く生き残った」と、そつと呟くように言いながら優しい茶色い眼を向けた。それは騎士団長ではなく、父親が愛しい我が子に向けるそれであった。

だが、すぐに険しい表情に戻り、アルスとエイグにゆっくり休むように言っと、外で見張りをしていた若い騎士を呼び、別の天幕に案内するように言った。

若い騎士は一礼をして、アルスとエイグを先導して歩いていった。どうやら会議を始めらしい。

十余年前のグレイスの事件に関わっていたという魔術師の話を聞きたいらしく、カインは残るように言われていた。

ジュランやアスターも天幕の中に残った。

外に出ると、いたるところに天幕が張られている。何も知らない小鳥の囀りが、森の中から遠く聞こえてくる。

兵は皆、馬に乗って来ていた。王国の南に広がる大草原には、野生の馬が豊富にいた。馬は他の国にも輸出され、古くから王国の南では馬を飼育して生活していた。

騎士団も、若いうちに捕まえた馬を調育して軍馬として使っていた。だから馬の数は大陸の他の国よりたくさんいる。

騎士達は村に入れない為、平原の南側半分を埋め尽くしていた。長旅で疲れた騎士達が、つかの間の休息をとる姿や、見張りについている者の姿が見える。

いつ敵の襲撃があるかわからなかったが、先程追いつたばかりですぐに攻めて来るとは思えなかった。

アルスとエイグは、石壁の西側にある小さな天幕に案内された。若い騎士は「お休みください」と一言言くと、入り口の外に立って見張りについたらしかった。

「ゆっくり休めるね」アルスは言った。父親が騎士団を率いて来てくれた事が嬉しいのだろう。無邪気そうに笑いながら寝床を作っているエイグを手伝った。

エイグは笑いながら頷くと、脇に置いてある、折り置まれた木を地面に敷いた。その上に、羊の毛皮を何枚か敷いてから毛布を乗せた。「さて、疲れているでしょうから、今日はもう寝ましょう」

「うん」エイグの言葉にアルスは素直に従い、毛布に包まった。エイグも隣で毛布に包まる。

なんで自分だけ、あの薄紫色の光に惑わされたのだろう・・・。

エイグは気になっていた事を考え始めた。だが、魔法に詳しく無い自分が、いくら考えても答えなど出るわけも無かった。

明日、機会があればフェア殿に聞いてみよう。

エイグはそう思うと眠る事にした。隣では、すでにアルスが穏やかな寝息を立てていた。

天幕の中では軍議が開かれていた。

ジュランは、王都からの伝書鳩がタンカスへ着き、急いでテイルトまで来た事から今日までの経緯を話した。カルマや他の騎士達は黙って聞いている。

アスターも、それに次いで村での事を話したが、ジュランがほとん

ど話していたので早く終わった。

「そうか」カルマはアスターに労いの言葉をかけると、村人達を安心させてくれと言って退席させた。

「して、グレデイスの一件でいた盗賊の一味がいたというのは本当か？」

カルマは、ジュランの後ろにいる壮年の騎士に問いかけた。盗賊といるところでカルマの声に怒りが籠る。

カインは一連の成り行きを、ジュランの後ろで見守っていた。

カルマの眼には、なぜか遠い昔を懐かしむ様な雰囲気がある事に、ジュランは驚いていた。

「お久しぶりでございます・・・」そう言って、カインは一呼吸置く」と話し始めた。ジュランが驚いた表情をしているのがわかる。

「そうであったか・・・」

カルマはカインの話しを聞き終わると、カインを労い、今日はもう休むように言くと、二人を退席させた。後はカルマとその側近達で話し合うのだろう。

ジュランは驚いていた。

それは、カインの口から聞かされた事実が十余年前のグレデイス事件の、一般には知られていない内容であったからだ。

それによると、十余年前に盗賊討伐の任が下り、王都を出陣したカルマの軍に、まだ騎士になって間もないカインも部下として同行していたというのである。

そして、詳しくは話されなかったが、カインの親しい友人と妹に何か悲劇があつたらしい。その悲劇に盗賊の一味の、あの魔術師が関与していた事が話の内容から読み取れた。

魔術師はほとんどが、遙か当方のザーナ魔法王国で学んだ者達だった。それが盗賊の中にいるなどと騒ぎが広まれば、ザーナ魔法王国との外交問題にも発展しかねない微妙な事であった。その為、魔術師の存在は公にはされなかったのだ。しかも、公には盗賊団の全てを討ち取った事になっていたが、盗賊団の幹部達は数名が逃亡して

いたというのである。

その逃亡した盗賊達の一人が、石壁の上で見たあの魔術師だというのだ。

通常であれば、搜索隊を編成して盗賊の残党狩りをするのだが、王国には当時、別の問題が持ち上がっていた。盗賊討伐を果たした騎士団は、すぐに王都へ引き返さなければならなかった。その為、逃亡した盗賊達を追いかけるだけの余裕は無かったのだ。

その時、カインは逃亡した盗賊達を追いかけるために騎士団を離れたのだという。

驚くという方が無理な話だった。ジュランは天幕を出ると、同じく天幕から出て、一人歩いていくカインの背中をまじまじと見つめていた。

気がつくと、すでに月は西の空に沈み始めていた。代わって東の空がわずかに白み始めている。ジュランは自分も疲れている事に気が付き、眠ろうとその場を後にした。

翌日の夕方。

アルスとエイグ、それにアスターとジェイズとカインは旅立っていた。

シユプール西の港町にいるはずのティルトの長老ミゼムに会うためだった。

女魔術師フェイラは、夜が明けると村の広場に空いた大穴を調査した。

薄紫色の光はすでに収まり、その残光が穴の奥深くで、淡いきらきらとした輝きを放っていた。穴の外へ溢れ出た光りは、すでに太陽の光りの中へ消えていた。

調査団を編成して送り込む案も出されたが、エイグの体験や、中から強い魔力を感じるとのフェイラの報告を受けて断念した。

エイグの体験は、どうやら彼の体質にあるようであった。ごく稀に、魔法に対して抵抗力の全く無い人がいるというのだ。特定の魔法に

抵抗力の無い者や、全ての魔法に抵抗力の無い者もいるらしい。それとは逆に、通常より抵抗力の高い人間もいるとの事であった。中には魔法への耐性を生まれながらに持ち、魔法の効かない者もいるという。

フエイラによると、どうやら《封印戦争》以前の古代の遺跡が中にあるようなのだが、あの薄紫色の光が邪魔しているらしく、女魔術師の魔法でもそれ以上は知る事ができなかった。

ただ、五十歳ほどの一人の村人が、地下に埋もれた街の古い言い伝えがある事を思い出したのだ。アスターやジェイズのように若い村人は全く知らない言い伝えであった。

しかし、その言い伝えを知る者は他にいなかった。その村人も幼い頃の記憶である為、あまり覚えていないという。ただ一人、村の最年長の長老であるミゼムなら知っているかもしれないとの事だった。その為、ミゼムに会って話を聞きだす必要があった。

穴を埋め立てて城壁や門を作り直す案や、西にある街タンカスまで退いて陣を張る案も出されたのだが、遺跡には古代の技術や魔法の道具などが保管されている事が多いのだ。まだ手付かずの古代の遺跡と判って、みすみす帝国に奪われるわけにはいかなかった。

そこで、村の北に広がる平原にある砦への街道の入り口に見張り台を作り、村人達の作った馬除けの策を置いて、陣地を作る事になった。帝国兵の置いていった投石機は解体されて資材として使われている。もちろん、北の森を抜けて襲ってくる可能性もあるため、周囲への警戒も怠ってはいない。

それに、逃げた妖魔達を警戒する事も忘れていなかった。調査が終わるまでは村の中では陣を張れない。戦が長引くのであれば、この平原そのものを要塞化する必要があるだろうとの事だった。

「まさか旅に出る事になるとはな」

ジェイズは、自分の育った村を名残惜しそうに振り返ると呟いた。アスターも村の方を振り返ると、無言で頷いた。

「村の地下に遺跡があるなんてなあ」

アスターは独り言のように言っと、また前を見て歩き出した。

「おい、置いてくぞー」

しばらくして、まだ村の方を見ている巨漢の男に、アスターは手を振って言った。ジェイズは振り向くと、今行くと叫んで走り出した。すでにアルス達三人は、アスターよりかなり前方を歩いている。

秋の夕暮れが赤く五人を照らし、長い影を伸ばしていた。

暗闇の中にはただ一つ、明かりを放つろうそくが立っていた。その炎はゆらゆらと揺らめき、部屋を薄暗く照らしている。

ここは北の岬。シエルバリエ森林と草原の王国とガルバス帝国礎の国の間にあるアルモス山脈の中ほどより、少し東にある陸路の上に築かれた砦である。

山脈を大きく東へ迂回すれば両国を行き来できるが、それには山脈の東にある“百の谷”や“死の砂漠”を越えなくてはならない。

“百の谷”には、人間ではない亜人族や《封印戦争》の時の産物だと言われている奇怪な生き物達が住み着いている。めったに人間に危害を加える事の無い亜人族も、大規模な軍隊の通過を黙って見てはいないだろう。

“死の砂漠”は文字通り、入る者を死に至らしめる砂漠だ。巨大な芋虫や蟻地獄などの生き物が生息している。迂闊に足を踏み入れれば、餌になるだけだろう。砂漠を東から西へ、唯一伸びる一本の道なき道だけが、砂漠の案内人達によって開拓された陸路であった。

“百の谷”と“死の砂漠”をさらに東へ迂回するとジルメキア神聖王国があるが、軍勢を引き連れて通ろうとすれば、大きな問題になっってしまう。最悪の場合は戦争だ。しかも、問題なく通れたとしても何ヶ月もかかるみちのり道程である。

その為、両国の間にある唯一の陸路が、この北の砦を通る小さな街道であった。

その砦の中の一室に、男はいた。

石畳の床に座った、深くローブを被っている男は、焦燥しきった顔で何かを呟いている。冷たい床に座って、ひんやりとした空気に頬を撫でられても、男の額からは大量の汗が滴っていた。

「はい・・・」

男は両手を蓮の花のように目の前に掲げて、そこに乗る水晶でできた玉に向かって呟いた。顔の半分くらいの大きさだ。

その水晶の玉からは禍々しさを感ぜさせる赤い筋状の光りが、時折放たれて男の顔を照らしていた。

「申し訳、ありません・・・突然現れた強大な魔力により、召還が壊されてしまいました・・・」

男はベイグナルだった。水晶の向こう側へ向かって言葉を投げかけている姿は、別の人が見れば狂気に取り付かれた者のそれに見えただろう。

ベイグナルは、数日前の小さな村での一戦の事を報告しているようであった。

「まあよい・・・」

水晶の向こうから、しわがれた鋭い声が返ってきた。

その声に、ベイグナルは抱いている怖れを隠せずに、ガタガタと震えている。

窓一つ無い部屋の扉は硬く閉められ、音は外には漏れないはずなのだが、魔術師の体の震える音は外まで漏れていそうなほどであった。それは、ミーゼや他の帝国兵の前では決して見せない姿であった。

「グレディスか・・・懐かしいな・・・だが、たとえ感付かれたとして、彼奴らになにができる・・・放っておけばいい」

水晶の声はそう言つと、ベイグナルの恐怖に引きつる表情を楽しんでいるかの様にしばらく間を置いた。

「王国の兵がすぐ近くまで来ているのだな・・・」水晶の声は自問す

るように呟くと、続けて「それでは、次を実行するのだ。混乱をもたらし、王国の騎士達を、恐怖で震え上がらせるがいい」

しわがれた声は静かな口調で、しかし殺気を感じさせながらそれだけ言うつと、魔術師の返事も待たずに消えてしまった。

「ふぁ、はぁっ・・・」

水晶の光が消えると緊張の糸が切れ、魔術師は溜め込んでいた物を一気に吐き出すように荒い呼吸を始めた。

荒い息を整えるように、その場にしばらくしゃがみ込んでいた魔術師は、不意に妖しい笑みを浮かべながら、高らかに笑い出した。

「ふふぁーははっはっ」

しかし、笑っている表情とは逆に、眼は冷酷な、見る者を凍りつかせる邪気を宿らせていた。

「王国の騎士達よ、恐怖と混乱の中で、絶望の辛苦を味わうがいい」

・
ー

魔術師はひとしきり笑うつと、残酷な表情を浮かべてそう呟いた。

ミーゼは皆の広間の窓に腰掛けて、窓の外の景色に眼を向けていた。初秋の様相も、山々は紅葉が始まって本格的な秋に変わろうとしている。日を追うごとに冷たくなる風が、ミーゼの長い髪と戯れていた。顔にかかる髪を面倒くさそうに払いのける仕草は、女騎士の華奢な体の魅力と一緒に魅惑的な雰囲気を作り出していた。

「ふん・・・」

ミーゼが鼻を鳴らしたのは、数日前の負け戦を思い出しての事ではなかった。

それは、ミーゼが与えられた任務である、魔術師の護衛という任務が気に入らないのだった。

自分は皇帝陛下の近衛隊の騎士だ。なぜ魔術師を護衛せねばならぬのだ。ミーゼは考えていた。

確かにミーゼは、剣の腕においては帝国屈指の使い手だろう。毎年開かれる御前試合でも常に上位に顔を出す。

だからといって・

やはり気に入らないなと思い、自分に任務を与えた宰相アモスの顔を思い出してムツとした。細い切れ長の眼がさらに薄くなり、整った顔には眉間にしわがよる。だが、そのふくれた顔もミーゼの魅力を損なう事はできずにいた。

ミーゼは、これ以上考えていても不機嫌さがどうなる物でもないと考えて、ここ数日間の事に考えを向けた。

数日前の負け戦の後、急いで砦まで退却をしたのだが、王国の騎士団は追いかけてこなかった。道中、一緒に馬に乗っていたベイグナルが、ガタガタと震えながら身体を密着させて抱きつき、自分の胸のあたりに手を回していた事を思い出して、少し赤い顔になる。

嫌な事を思い出したと、慌てて考えを別に巡らせる。

ミーゼとベイグナル、それにミーゼ配下の数十名の騎士達は、二日程で砦に着いたが、徒歩の兵達は、その後二日間をかけて続々と砦へ帰還していった。

コウパは討ち死にしていたので、必然的に参謀であるベイグナルに指揮権が移っていたのだが、魔術師は砦に着くと、慌てた様子で砦の奥にある窓の無い一室に閉じこもってしまった。

それから二日間、魔術師は中から出て来ようとはしない。

仕方が無いので、その部屋の前に護衛を二人つけてミーゼが陣頭指揮を執り、砦の南側の警備を強化して王国兵に備えていた。それと同時に、帝都へ伝書鳩を飛ばしてコウパ討ち死にの知らせを届け、指示を仰ぐ事にした。

あれから二日、まだ帝都からの連絡は無い。

ミーゼはとりあえず休める者は休むようにし、南側の城壁を崩れた塔の瓦礫を運ばせて強化するように指示を出していた。

作業は着々と進み、簡単だが街道と砦を仕切る壁ができていた。

ミーゼはそれに視線を落とすと、攻められたらひとたまりも無いなど、と人事のように思いながら、ぼうつとした視線をその瓦礫でできた粗末な壁に沿わせていく。

ん？

瓦礫でできた壁の、門のところに見慣れた青いローブを被った人影を見つけて、ミーゼは不思議に思った。

確か、奥の部屋に籠っているはずだが・・。

「ミーゼ様、ベイグナル殿が部屋から出て、一人で南の街道を歩いてきましたっ」

と、そこへ魔術師の部屋の前に立っているはずの護衛が走りながら叫んできた。

「なにっ」

ミーゼは振り返る途中で理解して、皆の南門に眼を向ける。

確かに、そこに歩いていくのは見慣れた魔術師であった。陽気な雰囲気、まるで散歩でもしているかのような軽い足取りなのがわかる。

「こんな時にっ」

ミーゼは叫ぶと、魔術師の後を追いかけようと走り出した。

「おいっ、お前達は他の者も何人か連れて後から来るのだっ」と、

魔術師の異変を知らせに来た兵に、走りながら声をかけた。

「・・は、はい」

兵士は、ミーゼの走る姿に見とれていたようだった。一瞬間を空けてそう返事をする、走り抜けていく後ろ姿に一礼をして、別方向へ走り出した。

ミーゼの走る姿もまた魅力的だった。ほとんど男しくない中で身体を大きく動かしながら走るのだ。華奢な身体が跳ぶ度にゆれる胸や、鎧の腰当てから覗く小さくて形の良い尻に視線を奪われない男はいない。

狭い通路にいた兵士達は慌てて身をかわしてミーゼに道を譲るが、視線はミーゼの身体に注がれているのがわかる。

だが、ミーゼは意にも介さない様子で走っていった。もう何年も軍の中に身をおいていたのだ。男達のそういった視線には慣れていた。

砦の南の入り口から外へ出ると、魔術師は門の向こう側で歩いているのが小さく見える。その歩みは遅く、辺りを観察でもしながら歩いている様子であった。

門のところには、困惑して魔術師の姿を見守る見張りの姿が見える。ミーゼはかまわずにベイグナルの後を追いかけた。

「はあ・・・はあ・・・」

ゆっくりと歩いていた魔術師によりやく追いつくと、ミーゼは息を切らしながら言った。

「どこに、いくん、だ？危ない、だろう、王国兵が、来ているかも知れないんだ」

最後の方は、苦いながらも途切れることなく言うと、ミーゼは息を整えるために深呼吸をしながら、歩いて魔術師のもとへ向かった。走って火照った身体が汗をかき、やけに鎧の下に綿入れに引付く露出している肌が淡い桃色になっていた。

「おお、ミーゼ」

ミーゼが追いかけてきた事など知らなかった様子で、ベイグナルは振り返ると悪びれた様子もなく、右手を上げて陽気そうに笑って見せた。

ミーゼが追いつくのを待つて、魔術師はまた歩き出した。

「どこへ行くんだ、砦へ戻るぞ」

並んで歩きながら、ミーゼが口を開いた。乱れた呼吸は、すでにほぼ整えられていた。護衛をしている自分に一言も無く、勝手に砦を離れた魔術師に対しての怒りが籠っていた。

まだ火照った身体は、薄い桃色を見せながらベイグナルの視界に入っているはずだが、魔術師はミーゼの身体に興味など示さずに答えた。

「これからちよつとした策を仕掛けに行くところです」

そう言つて、魔術師は先日まで持っていた杖と同じ物を二つ、ミーゼの顔の前に出して見せた。

それは、妖魔召還の魔力の封じ込めてある杖だという。砦を攻める

前に道中で聞いたが、ミーゼには良くわからなかった。魔法など、専門で学んだ者でなければ、お伽話の世界の話なのだ。だが、その杖は先日之物とは違っていた。刻まれている奇妙な文字は白ではなく、薄い黄色と黄緑色をしていた。

別に杖があるとは聞いていなかったミーゼは、ちょっと驚いたが、すぐにあの妖魔の反抗を思い出して、大丈夫かといった表情で魔術師を見た。

「大丈夫ですよ。この杖は壊れたりしていませんからね」

ミーゼの不安を見透かした様に魔術師はクスクス笑いながら言った。

魔術師は杖を構えると、何やら奇妙な言葉でブツブツと何かを唱え始めた。

後ろでは、ベイグナルの魔法を邪魔し無い様に、遠巻きにミーゼとその部下たち十人ほどが見守っている。

あれからしばらくして、ミーゼの部下が追いついてきた。全員馬に乗って追いかけてきたのだろう。それほど時間はかかっていなかった。

部下達は二人の無事を確認すると、安堵のため息をついて辺りを警戒していた。

「戻りましょう」との言葉に、魔術師が何かするそうだと答え、黙って後についてくるようにミーゼは命じた。

部下達はよく気が利き、ミーゼの愛馬も連れてきていたが、そのまま部下に手綱を持たせ、自分は魔術師に並んでここまで歩いてきたのだった。

突然、白く輝く一本の線が前方の小高い丘の脇に現れると、徐々にそれは左右に開いていった。

何度か見た事のある空間の割れ目だと気付くのに、たいして時間はいかなかった。部下達も気付いた様子で、先日の妖魔が襲ってきた時の事を思い出して不安そうな様子を見せていた。

そこへ、砦を攻めた時と同じ妖魔が姿を現した。何十、何百という

妖魔はその割れ目から、湧き出る泉の水の如く溢れ出てきた。手には粗末な槍や剣を持って、身体には鎧と言いがたい、鎖と皮や金属の板で出来たものを着ている。いや、かけていると言った方が正しいか。

魔術師が召還したのはオークの兵だった。醜い顔や垂れ下がった耳が豚に良く似ている。口から上へ突き出している二本の牙も見える。ミーゼも妖魔が襲ってくるのではないかと不安になり、無意識に腰の剣に手をかけた。

「ふふ、大丈夫ですよ、この杖は壊れていないといったでしょう」
魔術師はオークの群れを召還し終わると、ミーゼとその部下達の警戒した様子を見て、またクスクスと笑いながら言った。

確かに魔術師の言うとおり、オーク達は隊列と呼ぶにはあまりにもバラバラな並び方をしながら、血気だつてはいるものの、襲つてきそうな雰囲気は無かった。

ミーゼは、ベイグナルの言葉に一応の納得をしながら、腰の剣にかけた手を離して魔術師の動向を見守った。部下達も、ミーゼと魔術師のやり取りを聞いて安堵した様子であったが、相変わらず剣に手をかけて警戒していた。

「さて、次を召還しますよー」

まるで緊張感の無い声でそう言うと、ベイグナルはもう一本の薄い黄色の文字の書かれた杖に持ち替えて、また何やら呪文を唱えはじめた。

今度は先ほどと違い、長い時間をかけていた。魔術師の汗が頬を伝って流れていくのが、横顔を見ていたミーゼにはわかった。部下達も不安そうに魔術師を見つめている。

「くはあー」

ベイグナルは、額に流れている汗を振り飛ばしながら叫んでいた。すると今度は、先ほどの割れ目とは小高い丘を挟んで反対側に割れ目ができ、別の妖魔どもが姿を現した。

「ガァー」

恐ろしい、地鳴りの様な叫び声をあげながら、それは何十と割れ目から姿を現す。

ミーゼ達は、その叫びに背筋の凍る思いをしていた。もしあの時、村で自分達に襲い掛かってきた妖魔がこの醜い化け物であったなら、被害はさらに出ていただろう。それは伝説や昔話に出てくるオーガの姿であった。

オーガ達はオークと違って得物は持つておらず、鎧らしき物も身につけてはいなかった。腰にぼろ布をつけているだけの格好であった。だが、その太い木の幹の様な腕から放たれる一撃が、煉瓦の壁や金属の鎧を粉碎するほど強力なのは、幼い頃に読んで聞かされて知っている。

《封印戦争》で姿を消したとはいえ、今でもその恐ろしさは伝わっている。何より恐ろしいのは、オーガどもが人間を餌として、生きたまま食らう事だった。

部下達も、オーガだと気付いたのだろう。震えながら魔術師とオーガを見ているのがわかる。

「はあはあ・・・これで準備は整いました」

荒い息をしながら嬉しそうに言くと、ミーゼ達などまるで目に入っていないかのように冷酷な目をしながらクスクスと笑った。

横顔を見ていたミーゼだけには、その冷酷な笑みが見えた。こんな顔もするのだな、と自分でも驚くほど冷静にいられたのは、オーガやオークに対する恐怖や警戒心があったからだだろうか。

「それでは、引き上げるとしましょうか」

魔術師は、妖魔達に向けて何か奇妙な声を挙げるとミーゼ達へ振り返り、そう言った。

振り返ったベイグナルの顔からは冷酷な表情はすでに消え、普段の陽気な表情を浮かべている。

魔術師の後ろでは、妖魔達が奇怪な雄叫びを上げながら小高い丘に登っていくが見える。

「ミーゼ、また後ろに乗せてください」

ベイグナルは笑いかけながら、妖魔達と自分を交互に見ていたミーゼに言う、「もう胸なんて触りませんから」と続けた。

それを聞き、ミーゼは顔が赤らむのがわかった。部下達の前で言わなくても、と思っても遅かった。部下達の視線が自分とベイグナルを交互に見ているのが背中に伝わってくる。明らかな嫌悪を魔術師に向ける者もいるようだった。

自慢するわけではないが、部下達の中には自分に好意を持っている者もいた。

普段は意にも介さないミーゼだったが、あまりにも緊張した後の突然の言葉に、赤面するのを隠せなかったのだ。

それからしばらく、砦を指してミーゼ達は馬を走らせていた。ベイグナルは部下の後ろに乗せられている。

あの後すぐに、ミーゼは赤面した顔を押し殺すと、何事も無かったかのように部下に魔術師を任せて、自分は愛馬に跨ると砦を指した。

列の最後尾を走るミーゼは、ふと馬を止めて後ろを振り返った。見ると、妖魔達の群れはその最後尾が小高い丘の向こうへ消えるところであった。

ミーゼは小高い丘の向こうに、これから王国の騎士達に降りかかる悲惨な運命を想像して身震いすると、また砦へ向けて馬を走らせて行った。

ベイグナルは部下の後ろに乗せられても何も言わなかったが、その馬を駆る兵士は不快な表情を押し殺したような顔をして魔術師を乗せると、小さく笑っていた。

砦への道中、悪路を振り落とすほどの速度で走る馬の背から、魔術師の悲鳴が秋の空に響き渡っていた。

遙か遠く、西に見える山々はその頂を真つ白にしている。馬を走らせても、なかなか近くに感じる事はできなかった。

アルス達がティルトを旅立ってから、すでに五日ほど経っていた。途中、タンカスを通り、そこで馬を借りての旅だった。

ティルトにいる騎士団には、自分達の乗ってきた馬以外の余分な馬はいなかったのだ。元々ただの農村であるティルトに馬などいるはずも無かった。馬が特産の王国には珍しく、農耕馬もない。

そこでタンカスで馬を借り、シュプールへ向かっていた。

アスターとジェイズは馬に乗るのは初めての体験で、恐る恐る乗っていた。

訓練された馬であつた為、慣れないながらも手綱の持ち方や止め方、走らせ方を教えてもらい、なんとかついて来ていた。

アルスとエイグ、それにカインは馬に乗れたが、アルスはまだ経験が浅く、エイグは心配そうに横を離れずに馬を操っている。

タンカスの街には周辺から集まった避難民達が、まだ少なからず残っていたのだが、その中にティルトの村人たちを発見する事はできなかった。

ティルトの村人達が村を避難して、もうすぐ二十日が経とうとしている。徒歩でならもう十日もかからずにシュプールに着くと思われる。た。

タンカスを発ってから、アスターはそれほど日もかからずに上達していた。しかしジェイズは、その巨漢の為か、あまり乗馬は上達していなかった。

その為、五人は馬を使っているにしては遅い歩みであつた。だから気付けたのだと思う。

馬の足ならシュプールまで、後二日ほどのところに小さな集落があった。

その集落の脇、街道から見ると集落の端の家に隠れるようにそれは見えた。

あれは・・・？

アスターはそれに見覚えがあった。幼馴染の家の脇に、いつもめられていた荷車だ。

「おい、ちよつと待ってくれ」

アスターは、少し先で馬を止めてジェイズと自分を待っている三人に向かつて叫んだ。

「すまんすまん、馬が言う事を聞いてくれなくてな・・・」

ジェイズは少し遅れてアスターのところまで来ると、すまなそうにアスターにを上目遣いに見ながら赤い髪をかきむしった。

「おい、あれを見てみる」

アスターは、そんなジェイズの言葉を無視してそう言った

ジェイズも、アスターの言葉に何か緊迫したものを感じて指差す方を見た。

「ん・・・あれは・・・」

確かにそこには、ジェイズも見覚えのある荷車が置いてあった。ジェイズも、アスターの緊迫した雰囲気によやく納得して「なんでこんなところに・・・」と続けた。

「わからないね・・・」アスターはそう言うと言馬から降りて手綱を引きながら、ゆつくりと集落の方に向かった。

「どうしたんだ？」

そこへ、異変に気付いたアルス達がやって来て聞いた。アスターに続いて集落へ行こうとしていたジェイズは、よろけながら馬を降りると「ミゼム老の家の荷車がこんなところにあるんだ」と答えて、手綱を引きながらアスターの後を追った。

アルス達も、その答えを奇妙に感じながら、馬から降りてアスター達の後を追った。

それもそのはずである。順調な行程であれば、もっとシユプールの近くまで足を進めているはずだったからだ。なのに、なぜこんなところ荷車が置いてあるのか不思議に思ったのだ。

何か起こったのだろうか。不安が頭をよぎる。

アスターは荷車の前に立ってそれを見ていた。

それは紛れも無くミゼムの家の物であった。幼い頃にセリルと遊んでいてつけた傷跡もある。

「間違いないな」

ジェイズも、アスターの隣で荷車を見ると一目で判ったようだ。アルス達も、その後ろから事態を見守っている。

「もし、おたくらはどなたかな？」

不意に後ろからかけられた声に、五人は一瞬びくつとして振り返った。

そこには、鍬を担いだ老人が立っていた。農作業を終えてきたのだろうが、服の裾や手には泥が付いている。

見ず知らずの者がいれば警戒するものなのだが、カインの鎧が騎士の物だと知っている様であった。チラチラとカインを横目に見てはいるものの、警戒はそれ程していない様子だ。騒ぎを聞きつけて、人が何人が集まってくる。

「あ、あの・・・」

アスターは戸惑いながら話し始めた。テイルトを旅だった長老達の事や、長老を追ってきた事を。もちろん帝国兵の事などや、なぜ追いかけてきたのかなどの詳細は語らなかったが。

アスターの話を聞くと、納得したように頷いて老人は話し始めた。その老人の話だと、荷車の持ち主は若い娘と年老いた老人だった。そして、今は自分の家にいる事、荷車は世話になる代わりにもらった物だとの事であった。

「まあ立ち話もなんじゃわい、これから飯の支度をするので、お前さんらも食っていかれたらええ」

人の良さそうな老人は、そう言って手招きした。

「もつとも、たいしたものはだせんがな」

老人はクツクツと笑うと、アルス達を家へ招いた。

アルス達はどうした物かと思ったが、ミゼムとセリルがいるというので言葉に甘える事にし、老人の家へ向かった。

中には薄汚れた服に身を包んでいる若い娘と、粗末な毛布をかけられて寝ている老人の姿があった。

「セリルっ」

アスターは叫んだ。

年の頃はアルスと同じくらいだろうか。長旅で疲れた様子が窺える。髪の毛は少し乱れていたが、首の後ろで束ねられている。華奢な体付きだが、服の上からでも判る程度に胸の膨らみがあるのがわかる。整った細い顔立ちに残された幼さの為か、少し丸みを感じるが表情は硬く、黒い瞳には悲しみの光りが浮かんでいた。

「アスター兄さんっ」

セリルと呼ばれた少女は家の中に入ってきた見覚えのある顔を見て、驚いて声をあげると、突然立ち上がって泣きながらアスターのもとへ駆け寄って抱きついた。

今まで耐えていた涙が、親しい者の顔を見て溢れ出たのだろう。アスターは「もう大丈夫だから」と言いながら、セリルを支えていた。

しばらくして落ち着いたセリルから事情を聞く事ができた。

つい三日ほど前に、この集落を通りかかった時の事。

急にミゼムの体調が急変し、熱を出して寝込んでしまった。ミゼムは、とても旅を続けられる状態ではなくなっていた。

そこで、この集落で事情を説明したのだという。その時、この老人が寝泊りできる場所として、自分の家を貸したのだ。荷車はその時に、セリルが礼として老人にやったのだという。

「わしはいらんと言うたのじゃがな」そう言つて老人は、ばつの悪そうな顔をしながら作ったお粥をすすっていた。

他の村人達もミゼムが良くなるまで残ると言い出したのだが、そんなに何人も寝泊りできる場所は無く、仕方なくミゼムとセリルを置いてシュプールへ向かったそうだ。

ミゼムは、相変わらず熱を出して眠っていた。時折聞こえる苦しそ

うな声を、セリルもまた苦しそうな顔をして聞いている。

セリルは淵がボロボロになっている粗末な桶に、井戸の水を汲んできて看病していた。ミゼムの額に、絞った冷たい布を置いて汗を拭き取ってやっていた。

たった一人、誰も知らない場所で病気の祖父を看病していたのだ。

アルスはなんとなく自分と似ているなと思ってセリルに優しい目を向けていた。

それでも今日は、大分熱も下がって先ほどまでは起きていたらしい。五人は狭い家の中で、お粥だけの簡単な食事をすませ、一通り話をした後に老人に礼を言くと、アスターを残して外で待つ事にした。すでにお昼も過ぎ、午後の暖かな日差しが大地を包んでいる。

遅れて家から出てきた老人は、アルス達に頭を下げると、また鋤を担いで歩いていった。

ミゼムは熱を出して寝ていて、とても話ができる状況ではなかった。アルス達は木陰で少し休もうと、近くにあった何本かの木の下に腰を下ろしていた。

農作業に出ている人達の、鋤を振るう音が聞こえてくる。遠くには、北の山脈の上を翔ける鳥達の群れが見える。

戦争など、とても起きているとは思えない穏やかな景色だ。

夢の中の出来事で、起きたらいつもの日常が待っていれば良いのに。アルスはそんな事をぼつと考えながら、ついついまどろんでしまっていた。

エイグは隣でフェイラに借りてきた書物を読んでいる。ジェイズは、カインから馬の乗り方について聞いているようだった。

どれくらい経っただろうか。

アスターの叫ぶ声が聞こえる。アルスは慌てて起き上がると、他の三人も一緒に老人の家へ向かった。

家の中では、苦しそうなミゼムが横になっていた。その傍らにセリルとアスターが座って、老人の顔を心配そうな表情で覗き込んでい

た。

「ああ・・・」

ミゼムは苦しそうな表情で薄目を開けてアルス達を見た。

「蒼い目・・・の王・・・」

ミゼムは夢でも見ているのだろうか、アルスの目を見るとそう呟いた。

え？

何の事なのか判らずにアルスは戸惑うが、ミゼムが熱に浮かされて出た言葉だと勝手に解釈して落ち着いた。

アルスとエイグは、セリルとアスターの老人を挟んで向かいに座ると、二人も心配そうにミゼムの顔を覗き込んだ。

戸口で、カインとジェイズも心配そうな表情をして見守っている。

「少年よ、あなたは・・・？」

老人はアルスを見つめながら聞いてきた。

「この方は現騎士団長カルマ・デ・アイオス様のご子息のアルス様です」

アルスが質問の意味が解らずに戸惑っていると、横からエイグが言った。

「おお・・・」老人はエイグに眼を向ける事無く、ため息にも似た声をあげると、しばらく少年の顔を見ていたが、視線を宙に移した。

「わしはもう駄目じやろう・・・」

ミゼムは、苦痛に震える声でゆっくりと呟いた。セリルが「そんな事無い」と泣きながら否定している。

ミゼムは力の無い、それでも精一杯だろう力でセリルの頭を撫でた。ミゼムはセリルを落ち着かせるように、小さく笑うと「わしに聞きたい事とは何じゃ」とアルスに向き直って声をかけた。

「はい、ティルトの村の広場に空いた穴の事をお聞きしたいのです
が」

すでに命が尽きようとしている老人の、あまりにも穏やかな表情にアルスが戸惑っていると、エイグが代わりにそう切り出した。

老人にはその言葉が聞こえなかったのか、しばらく黙ってアルスの藍色の目を見つめていた。

ミゼムが黙っているの、聞こえなかったのだろうかと思い、エイグがもう一度口を開こうとしたその時、老人は顔を宙に向けると眼を閉じて語り始めた。

伝説となった遙か昔

今は海の底に沈む北の大地

ある王国で

一つの扉が開かれた

そして、異界の者達は

この地に溢れ出た。

禍々しき異形の者達は

その強大な力で

この地に住まう人間を

滅せんとした

祖先達は力を合わせ戦った

だが、力及ばず

熱き血は大地に流れ

悲しき涙が頬を伝った

祖先達は待った

やがて現れる救い人を

遙か西方の大地に追いやられ

苦しい時代を乗り越えながら

そして時は来た

我らの祖先は諦めず

流した血を武器に
流した涙を勇氣に
異形の者達と戦った

紅き乙女レシユフォンは
その身を古竜に捧げ
蒼き王レシユフォルは
その命をもって
異形の者達を封印した

それは、とても静かな口調だった。詩の一節を朗読するように、老人はゆっくりと語った。

老人の語ったそれは、幼い頃から聞かされている、大陸の者なら誰でも知っている伝承であつた。数百年前にあつた《封印戦争》の時の事を伝えた一節だ。

しかし最後の一節だけが、アルス達が聞いたものとは違っていた。紅き乙女や蒼き王などの名前は一切出てこなかったのだ。

アルス達が聞かされたのは、人間達が力を合わせて妖魔達を封印し、各地に王国を作つて幸せに暮らしたと結ばれている。それはどうやら、ジェイズやアスターも同じようであつた。驚いた表情を浮かべてミゼムを見つめている。

「あの村はな・・その昔、西に追いやられた最後の人間の国があつた場所じゃ」老人はそう言つと、驚いているアルス達にゆっくりと話し始めた。

ミゼムの話ではこうだった。

かつて、人間達は豊かに暮らしていた。争いもなく、穏やかな営みが紡がれていた。その頃、北の大地にあつた王国の魔術師達がとても古い遺跡を見つけた。そして魔術師達は、遺跡の発掘と調査を進めたのだという。そして幾重にも、嚴重

に封印の施してあった一つの扉を発見した。

魔術師達は、その扉が危険な物だと知っていた。それはこの世界とは異なる、異界に通じる扉だった。

しかし、己の力を過信した魔術師達は自分達の魔力で、その異界の住人達を使役しようとしたのだ。そのまま十分豊かなこの世界で、人間達は更なる豊かさを求め、その扉を開けてしまった。

世界を破滅させてしまうほどの邪悪が存在するとも知らずに。

研究は成果を挙げ、扉から出る妖魔達を次々と支配していった。

だが、その扉の奥で静かにこちらの世界を見つめる者がいた。異界の王、妖魔達の本当の主人であった。魔術師達がそれに気付いた時は遅かった。

妖魔の王は愚かな人間の、その脆弱な魔力を己の強大な魔力で打ち消してしまった。人間達の支配から解放された妖魔達は次々と人間達を襲い始めていた。

魔術師達は必死に抵抗を続け、その扉を再び封印しようとした。しかし、すでに遅く、それまで見た事の無い何十、何百という妖魔達が扉から溢れ出てきたのだという。その時の激しい魔力で大陸の北にあった大地は吹き飛び、海の底に沈んだのだ。

人間達は力を合わせて戦ったが、妖魔達の力は強大で、次々と敗れていった。

そして人間達は豊かだった大地を追われ、辺境の大地であった今のティルト辺りまで逃れたのだという。

それから人間達は、妖魔から隠れ住むようになったのだ。どれほどの時をそこですごしたのかは判らない。

ある予言を信じて、そして再び、もとの豊かな大地に還れる事を願って。

そして現れたのが双子の兄弟、紅き乙女と蒼き王だという。二人がどこで育ち、どういった人であったのかは伝えられていない。

紅き乙女はその肉体を捨て、遥かな神々の時代に存在したという古竜を呼び出した。その竜から妖魔達を再び封印する術を受け取った

のが蒼き王だという。

そして、再び始まった妖魔との戦いは熾烈を極め、大勢の命が失われた。古竜もその力を持って妖魔の王と戦った。後に言う《封印戦争》である。

そして、その戦いで封印の術を用いた蒼き王は、その命と引き換えに妖魔を封印したという。

妖魔達を封印したのは今のガルバス帝国のどこかだが、後の世の人が己の欲望の為に再び封印を解いてしまわないように、正確な場所には伝わっていなかった。妖魔達がガルバスの地に封印された為、その封印の上に興った国として礎の国とも呼ばれている。

蒼き王の子孫達は、ティルトの南の山脈を越えた場所に一つの王国を興した。それが今のシエルバリエだという。

妖魔から隠れ住んでいた頃のティルトとその周辺は、今のように森と平野のある地形ではなく、険しい山々の中に幾つもの窪んだ盆地や谷のある地形だったという。

呼び出した古竜が山々を崩し、そこに人の住める平らな地形を作ったのだ。そして自らは、紅き乙女の魂と共に地下に埋もれた人の街で眠りについた。

そして、その紅き乙女と古竜が眠っている地の上に興ったのがティルトだというのだ。

ティルトには紅き乙女の子孫達が住んでいたという。そして代々、この伝承を絶える事無く伝えてきた。その子孫こそがミゼムでありセリルであるというのだった。

セリルは、初めて聞かされるその話を驚いた表情で聞いていた。

ティルトとは古代語で“安らかな眠り”という意味らしい。自分達を救った紅き乙女と古竜の眠る地に、我々の祖先が付けた名前だ。とミゼムは静かに語った。

アルス達は老人の話を、ただ黙って聞いていた。今ではあまり伝わっていない《封印戦争》の細かなところまで、この辺境の村の長老に伝承として伝わっていた事も驚きだった。

ミゼムはそこまで話すと、苦しそうに咳きをした。セリルが心配そうに背中をさすっている。

ミゼムは呼吸を落ち着かせると、セリルに礼を言いながら続けた。「すでに封印の術は、シエルバリエ王国の王家にも伝わってはいないだろう、だが、異界の住人が現れ、その穴がまた開いたとしたなら、赤き乙女と共に眠る古竜に問えば、何か解るかもしれん」

苦しそうに老人はそこまで言うと、左手を胸の上へ乗せて眼を閉じた。

一見、眠っているような表情には、眉間にしわが刻まれて痛みに耐えているのが解る。

「すまんが、セリルと二人で話したい事がある」しばらく経って、老人はそういうとアルス達に外へ出てくれるように促した。

五人はミゼムの容態が心配だったのだが、その言葉に従って外へ出ると木陰に腰をおろし、家の様子を黙って見守っていた。

皆、聞いた事の無かった歴史の真相を聞いて、一様に呆然となっていた。

翌日、悲しみの中に六人はいた。

ミゼムは、セリルに何事か話をした後に、静かに息を引き取ったのだった。

セリルは泣き腫らした眼で、墓の前でアスターに寄りかかるようにしていた。他の四人も、かける言葉が見つからずに黙ったままだった。

葬儀というにはあまりにも粗末な形ばかりのものを済ませてから、

六人は悲しみのうちにテイルトへの帰路についた。

ミゼムと孫娘の間で何が話されたのかは想像もできなかったが、セリルの横顔を見るアルスの眼には、どこか強い意志を秘めているように見えた。

二日後。

六人はタンカスの街に着いていた。ティルトまでは馬でなら後丸一日もあれば着くだろう。

道中、あまり睡眠もとらずに急いだ為に、アスターとセリルの乗る馬が動けなくなってしまうたのだ。幸いにもタンカスの街の前であったので旅にはそれ程支障は無かったのだが。

その為、一度街によって休んでから出発する事にした。

相変わらず慣れない馬に、悪戦苦闘していたジェイズは歓声を上げて喜んでいた。

タンカスは、山脈が南へ少し張り出している格好の場所にある小さな街だ。

ティルトとシュプールの、ちょうど中間より少し東に位置するこの町には、硝子の鉾山がある。そこで採れた硝子を溶かして固めた物を加工し、硝子細工を作って生計を立てている。行商人の他には、ティルトや北の帝国へ向かう旅人が通るくらいだろう。

小さな街だがきちんとした城壁もあり、王都から派遣された領主の住む館や、守備隊が詰めている大きな建物などがある。有事の際はこれらを囲むように掘られている深い空掘りに、街の西を山脈から流れている川から引かれた水が入られる。

アルス達の顔を知っている門番がいたので、わざわざ通行証を見せる事も無く街の中へ入る事ができた。

街に入ると、特産の硝子細工や食べ物売っている商店が軒を連ねている。だが、普段なら大勢の人の行きかうその道も、人の数はまばらで商店も半分ほどが閉まっていた。

戦の影響であった。

いかにティルトより帝国から離れているとはいえ、北の砦を抜ければタンカスまですぐなのだ。無理も無かった。

アルス達は門を抜けると、その足で領主の館を訪ねた。帰還した事と馬の礼を伝え、翌日の早朝には町を発つ旨と、自分達の泊まる宿を伝えると館を後にした。

タンカスの領主は中年の、でっぷりとした身体の男だった。アルス

達の到着の知らせを聞くと、快く迎え入れてくれた。

領主は妻と二人の娘と館で暮らしていたが、今は領主と騎士団の主だった者が寝泊りしている。妻と娘の三人は、僅かな供を連れて王都へ避難していた。

騎士団がテイルトに向かう際に、軍の半分を後方の守りとしてタンカスに残したのは知っていた。だが数が多すぎる為に、守備隊の宿舎に入りきらずにいた。入りきらない半分以上の者達は、街の西側で天幕を張って寝泊りしていた。

アルス達は町の南西にある、商店街から少し奥に入ったところにある宿に泊まることにした。

セリルはまだ、ミゼムの事を引きずっている様子だったが、あまり人前では表に出さないようにしていた。

幼い頃に両親を無くし、祖父の手で育てられてきた。その、たった一人の肉親であった祖父が亡くなったのだ。悲しむなという方が無理な話であった。

セリルを気遣い、できるだけ明るく接していたが、そんな皆の気持ちを解っているらしく、無理に明るく振舞っているのが解った。

タンカスまでの道中で少し休憩をとった時の事、皆が寝静まった後に一人、少し離れた場所へ行って泣いていたのをアルスは知っていた。

年頃の娘らしく、自分の部屋が決まると旅での汚れを落とすために、湯浴みをしに行ったようだ。

アルスはセリルの事が心配だったが、さすがに風呂へは行けないと、自分は旅装束を脱ぎ捨てて、五人部屋の隅にあるベッドに横になって身体を休めた。

他の四人もそれぞれ身体を休めている。

夕食にはまだ時間があつたので、それまでには自分も湯浴みをしようと思いつながら、疲れが溜まっていたのだろう。アルスは寝てしまった。

宿屋の一階は、食堂を兼ねた酒場になっていた。自分達以外には、行商人らしき二人の男が声を潜めて何やら話をしているだけだ。

アルスはエイグに起こされて、まだ眠そうな目をこすりながら、食堂の一角にある椅子に座っていた。すでにアスターやジェイズ、カインの姿もあつたがセリルの姿は無かつた。

食欲が無く、一人部屋でゆっくりしているそうだ。

五人はあまり会話も無く、黙々と食事をとっていた。

大好きなエール酒だったが、ジェイズやアスターは、さすがに遠慮して一杯だけで終わらせていた。

エイグやカインはさすがに酒は飲まずに、山の中で採れる黄緑色の果物を搾った物を頼んでいた。それは少し酸味があり、食欲増進と健康に良いと言われている。山の中ならどこにでもあるそれは、古くから庶民にも親しまれている飲み物だった。アルスも飲み慣れたそれを注文すると、起きたばかりで渴いている喉に流し込んだ。

食事が終わると、五人は湯浴みをして部屋でゆっくりとして過ごしていた。

アルスは食べ終わると、カウンターで簡単な食べ物をもらってセリルの部屋へ向かった。

コンコン

「セリル、いるかい？」

アルスは、セリルの部屋の前まで来るとそつと扉を叩いて呼びかけた。

「・・・ええ・・・いるわ」

しばらくして、消えてしまいそうな細い声が部屋の中から返ってきた。

声は少し怯えたような感じを受ける。アルスと出会ってまだ四日しか経っていない。警戒しない方がおかしいだろう。

部屋の奥から足音が近づいて来る。戸口まで来ると、セリルは「どうかしたの？」と扉を開けないで聞いてきた。

「いや、その・・・」アルスはちよつと戸惑いながらも続けた。

「何て言って良いか解らないけど、そんなに食べずにいたら身体に悪いと思って」と言って、簡単な食べ物を作ってもらったので持つて来た事を伝えた。

セリルはミゼムが死んでから、ほとんど満足な食事も摂っていないかった。唯一の肉親が死んでしまったのだ。あまり表に出さないが、悲しみは相当なものだろう。アルスも、自分を逃がしてくれた叔父さんを想うと眼が熱くなるのが解る。

「・・・ありがとう」

そう小さく声が聞こえた。

アルスはここに置いておくね、と言って扉の前に食べ物を置こうと、かがもうとした。その時、ガチャリと音がして扉が開いた。

「あつ」セリルの驚いた声があがる。

「大丈夫だよ」アルスは開いた扉の角に頭をぶつけそうになって、よろけながらセリルに言った。

セリルの眼は赤くなり、眼の辺りが少し腫れていた。また泣いていたのだろう。それで扉を開けなくなかったのかもしれない。

アルスはちよつと気まずくなって、セリルに食べ物を渡すと「お休み」と言ってその場を離れた。

「ありがとう・・・」そう言うセリルの小さな言葉が背中から聞こえてきた。

外はすでに暗くなり、辺りを街とは思えないほどの静寂が包んでいる。

普段なら、仕事帰りの男達や泊まった旅人達の騒ぎ声が、酒場を兼ねた一階の食堂から聞こえてくるのだろう。今は戦争のために閑散としている。

アルスは食堂に行くと、慣れないエール酒を一杯頼んだ。秋になり、だんだんと寝苦しくなっている夜も、今夜は眠れそうに無かった。

七、穴の中へ

七、穴の中へ

それは突然、襲ってきた。

月の明かりを遮る夜の森の闇に紛れて、北から皆へと続く街道から、奇怪な大声を上げて聞く者に恐怖を与えながら襲ってきた。

騎士団は最初、虚を突かれたものの態勢を立て直して妖魔の大群と戦っていた。

明るいう月明かりが辺りを照らしていた事と、常に臨戦態勢でいたのが功を奏したようだった。

だが、数はこちらの方が多かったのだが、今までに見た事も無い妖魔の姿に浮き足立っていた。

カルマとフェイラは異変に気付くと、すぐに態勢を整えて反撃に出た。騎士団にとって、カルマの声は何よりの勇気を与えていた。

「怯むなっ、奇怪な化け物と言っても所詮、命あるものだっ、剣を振るえっ、喉元に叩き込むのだっ」カルマは檄を飛ばしながら戦況を見極めた。

離れたところで、妖魔の一撃を受けて首から血飛沫を上げながら倒れていく騎士が見える。その向こうでは、雄叫びを上げて妖魔に跳びかかる騎士達の姿もあった。

「まずいな・・・」

カルマはそう呟いた。

見ると、北の街道に抜ける場所では、見張り台が倒されていた。その周りでは何人かの騎士達が、馬除けの柵を背に豚に似た妖魔と戦っていた。どうやら苦戦しているようであった。

森から来た妖魔の一団は、人間の二倍ほどの巨体だった。腕を振り回して騒音の様な声をあげながら、街道の入り口とこちら側の間に入り、こちらを攻め立てている。

北の街道の手前は完全に孤立していた。

もし、後ろに帝国兵が身を隠していれば、簡単に突破されてしまうだろう。

「右翼は北へ、中央と左翼は東へ攻めよっ」そう指示を出すと、傍らにいた副官に、一隊を率いて急いで西側を回って背後を突くように命じた。

間に合えば被害も少なくて済むと考えられた。

「カルマ様、私も行つてきます」

フェイラはそういうと、その副官について西側に向かった。カルマはそれに手を上げて答えると、戦況を見つつ、さらに檄を飛ばしていく。

しばらくすると、西側から妖魔達に向けて巨大な炎の玉が飛んできた。

それは地鳴りのような音を轟かせながら、大きな妖魔達のちょうど真ん中へ着弾し、爆発して辺りを巻き込んだ。何匹かの妖魔が倒れていくのが見える。

フェイラの魔法だった。まだ若い魔術師は、その容姿からは想像もできないほどの魔力を持っているようだ。こちら側から魔法を使うと味方まで巻き込んでしまうと考えて、後ろへ回り込んだ一隊に行したのだろう。

“火球の魔法”だと思ったのだが、大きさが、話しに聞くよりもさらに大きかった。

夜の風にのって、肉の焦げる嫌な臭いが漂ってくる。

妖魔達は、その魔法に一瞬怯んだものの、すぐに勢いを戻してまた攻め立ててくる。

するとそこへ、二発目の炎の玉が飛んできてくる。今度は妖魔達の背後から飛んでくると、先ほどより右で爆発が起きる。

また何匹かの妖魔が倒れていくのが見えた。

「なかなかやるな」そう呟くと、カルマは続けて「魔術師殿の魔法で倒せて我らの剣が効かぬはずは無いっ、力の限り押し返すのだっ」

と櫓を飛ばす。

それに答えるように、騎士達からは力強い声が帰ってくる。

続けて三度目の爆発が、東側の妖魔の一団で起こった。

今度は先ほどの物より小さい、幾つもの火の玉が炸裂していた。豚に似た妖魔達はそれで十分だった様だ。奇怪な悲鳴を上げながら、何匹もの妖魔が炎に吞まれて倒れていく。

カルマは魔法の威力を目の当たりにして、敵に回したくは無いなと心から思っていた。

気が付くと、フェイラのいる一隊が背後から攻めかかっていた。その一団の剣が赤く、炎に包まれているのが解る。フェイラが“炎刃付与”の魔法をかけたのだらう。妖魔達はだんだんと数を減らして小さく囲まれるようになってきている。

騎士達も、精一杯戦っていた。被害も出ていたが、次々と妖魔を討ち取っていく。

ついに妖魔の一団は、攻めるのを諦めて森へ逃げ込んでいった。

「深追いはするな、森へ入れば分が悪い」カルマはそう叫ぶと、月明かりを遮って、そこだけ黒く塗り潰したような森の闇を睨みつけた。

「オークとオーガが・・・」

それは先ほど騎士団を襲撃してきた妖魔達の名前であった。それは、カルマも幼い頃から聞かされて育ったので知っていたが、実際に眼にするのは始めてであった。

異界の尖兵として、その先陣を駆ったオークと、人間を喰らったという怪力を持つ巨大なオーガであった。

カルマは目の前にいる女魔術師からの報告を受けて、妖魔達が遙かな昔に封印されたはずのものと解ると、少し横を向いて天幕の一角を凝視した。それはカルマが考え事をする時の癖である事をフェイラは解っていた。

「ご心配なさいますな、妖魔の王がいなければそれほどの脅威では

ありません」

フェイラはろうそくの炎に照らされて、ところどころ影を作るカルマの顔に不安な表情を見たのだろう。見透かしたようにそう言った。フェイラの話では《封印戦争》以前の魔術師の作った妖魔を操る“魔道具”で使役しているのだろうとの事であった。

妖魔の王が封印を解かれていたとしたら、あんなに数が少ないはずはないだろうと付け加える。

だが、魔道具があるという事は、いくらでも異界から妖魔達を呼べるという事ではないのか、という問いにフェイラは落ち着いた静かな口調で説明を続けた。

「確かに呼べるでしょう・・・」

その言葉にカルマの傍らに控える数人の騎士達が不安そうな声を挙げる。カルマはそれを手で制して、フェイラの言葉の続きを待った。

「ですが、魔道具といえども完全ではないはずです」

フェイラは一呼吸置くと続けた。

それによると、魔道具は確かに便利な物であるが、使ったびに使用者の精神を著しく消耗させる。つまり魔法を使っているのと同じなのである。ただ一点、違うのは、使い方が解れば魔術師でなくても扱えるという事だけだった。

魔術師は自己の魔力を、自然界に存在する魔力と掛け合わせて、様々な効果を具現化する。魔道具は、魔力を持たない者の為に作られた、いわばそれ自体が魔力そのものである。だから魔力を持たない者でも扱い方さえわかれば封じられている魔力を使う事ができるのだという。

そして、あれだけの妖魔を召還する為には、魔術師並みの鍛えられた精神力が必要という事であった。

敵の中に多くの魔術師がいるとは思えない。加えて、ザーナで学んだ正規の魔術師が侵略に加担するはずが無かった。

「たしかにそうだな」

眼を閉じてフェイラの言葉を聞いていたカルマは、説明が終わると

眼を開いてそう呟き、納得したように頷きながら休んでくれと言って、フェイラを退席させた。

魔法を使うと、精神を激しく消耗するらしい。フェイラに余力があるのは見て解ったが、十分な休息をとって次に備えてもらう事が良いと判断した。

「警備を嚴重にせよ、休憩する者にも武具は離すなど伝えよ」

フェイラが一礼をして、天幕から出て行くと傍らに控える騎士達に、カルマはそう言った。怪我をした者はすぐにタンカスへ移動させるように付け加えると、いくつか別の事を命じて解散を告げた。

ミーゼは砦の二階にある部屋の窓に腰を折って、腕を窓辺に掛けて身体を預けていた。

鎧は着たままだが、隙間から形の良い尻がつんと上を見上げるように覗いている。窓の反対にある扉が開いていたら、扉の前に立っている護衛は役目を忘れて見入っていただろう。

前方に見える王国の領土は何事も無い様に秋の佇まいを見せていた。砦からは山や木しか見えないが、その向こうで妖魔達が暴れている事は知っている。

ベイグナルが、あれから連日のように南へ少し行ったところで妖魔を召還して帰って来るのだ。

その魔術師は、先ほど四度目の召還を終えて帰って来ていた。今は砦にある、自分にあてられた部屋で眠っているはずだ。最初に妖魔を放ってからすでに四日目の昼であった。

砦には、帝都へ送られた伝書鳩の返事が帰って来ていた。コウパの代わりに、一人の将軍が向かっているそうだ。

帝国の騎士団の団長は、別の大部隊を率いて東の隣国を平定しに遠征している。

ミーゼはこの侵略戦争にはあまり良い気はしていなかった。

ただの近衛隊の騎士である自分が、皇帝や宰相に意見できる立場に無いことくらい解っていたが、それでも不満はあった。自分だけではない。ほとんどの文官や武官達が反対していたのだが、幼い皇帝を丸め込んだ宰相アモスが強引に遠征を決めたのだ。

それまで、それなりに友好な関係にあった隣国に、刃を向ける理由がミーゼには全く解らなかった。

「ミーゼ様、ファルモス様ご到着です」

不意に扉が叩かれ、部下の声が聞こえた。

「もう到着したのか・・・」

ミーゼは一瞬びくつとなったが、自分が物思いに耽っていた事に気付いて、慌てて扉に向き直りながら、「すぐに行く」と返事をしてから扉に向かった。振り返り様に長い赤髪が宙を舞う。

王国の軍勢がいつ攻めて来ても良いように、ミーゼは武具を常に身につけていた。もっとも、妖魔に襲われてこちらを攻めるどころでは無い様に思われたが。

砦の広間に行くと壮年の、黒い甲冑を身につけた男がいた。コウパと同じ、指揮官に与えられる白い石が柄に付いた剣を腰に吊るして、赤い外套を肩からかけていた。

部下を何人が引き連れて、窓の外に広がる王国の領土を見ながらなにやら話している。

近づく気付いたらしく、こちらに身体を向けてミーゼを待っていた。

その顔は不健康そうな色白で、ミーゼを見つめる細い眼はどこか冷たさを感じる。帝都から新たに派遣された指揮官、ファルモスであった。

ミーゼは近くまで行くと、方膝について挨拶をしてから、砦の現在の様子とこれまでの経緯を話した。

「そうか、それで魔術師殿は眠っておいでなのだな」

丁寧な言葉だが、何の感情も籠っていないように聞こえる声だった。明日にはここを発つて王国へ進撃する旨を伝えたと用意しておく様に付け加えた。

ミーゼは少し驚いて顔を上げるが、すでに話は終わったといわんばかりに窓の外へ視線を向けて、ファルモスは部下達と話を始めていた。

ミーゼが驚くのも無理は無かった。南にはベイグナルの放った妖魔達が無数にいるのだ。いくら魔術師の支配下にあるとはいえ、先日村での一件の事もある。

幸いにも魔術師は、村一つに加減して召還していた。だから襲われても被害はそれほど大きく無かったものの、今は加減など加えずに召還している。

だが、口まで出かかった言葉を飲み込み、一礼するとミーゼはそこを後にした。

目の前にいる男を良く知っているミーゼは、何を言ってもファルモスが聞き入れないだろう事を解っていた。

反対する大勢の文官、武官達の中でただ一人、アモスに賛同して隣国平定を主張したのだ。ファルモスがアモスに忠誠を誓っている事は宮廷では有名な話だった。ミーゼはその時の事を、皇帝の傍で護衛をしながら見て知っていた。

ミーゼはそれを思い出して眉をひそめながら、妖魔を支配している魔術師の魔力が先日のように消えない事を願っていた。

遠くから、どたどたと慌しい音が聞こえてくる。

アルスは昨日の夜に飲んだ、慣れないエール酒で痛む頭を右手で押さえながら上体を起こした。

窓の外はまだ暗く、寝付いてからあまり時間が経っていないように

思える。

アスターとジェイズも、何かと起き上がってランプに明かりを灯し、様子を伺っているようだった。気付くと、エイグとカインがベッドにいない事が解る。

バタンツ

少し荒く扉が開くと、そこに険しい表情のエイグが立っていた。

「みなさん、急いでください、すぐに出発しますよ」それだけ言うと、エイグはそのまま歩いて行ってしまった。

ジェイズはまだ眠たそうにあくび欠伸をしていたが、エイグの言葉を聞き、帝国兵が攻めて来たのかと言いながら真剣な表情で支度を始める。

アスターとアルスも、事態が飲み込めずにいたがとりあえず支度に取り掛かった。窓の外から戦の喧騒や、緊迫した空気は伝わってこない。どうやら、帝国兵がここまで来たわけではなかったらしい。旅支度を終わらせ外に出ると、すでにカインとセリルが馬の隣で待っていた。

その向こうで数人の騎士がエイグと立ち話をしている。

「それでは出発しましょう」

エイグは宿から出てきたアルス達を見るとそう言って、騎士に何か言々と馬に跨った。

「どうしたんだ、こんな朝早くに」

馬に跨ったアスターが、セリルの手を引っ張って後ろに乗せながら疑問を投げかけた。

「道中で説明します、早くテイルトへ向かいますよ」

エイグは、そう返して馬を走らせた。カインとアスターとアルスもそれに続く。

「お、おい、まってくれよお」

ジェイズはようやく馬に跨ると、情けない声で叫びながら後を追った。

夜の街道は、月の明かりに照らされていた。遠くに見える森は、逃げ込んだ闇が自分達の領域を必死に守っているかのように、暗く不気味に見える。

街道を東へ向かう五つの影は、その主の必死な表情までは真似ていなかった。

エイグの話では、テイルトに駐留している騎士団へ妖魔の一団が襲ってきたらしい。それも一度ではなく、数度続いているらしいのだ。幸いにも騎士団は、それら幾度かの妖魔の襲撃を全て退けたらしいのだが、戦い慣れない妖魔相手に被害が大きいらしい。襲ってきたのは妖魔達だけで帝国兵達の姿は無かったという。

夜遅くに、タンカスの領主へ宛てた伝書鳩がそれを知らせてくれたのだ。

そこには傷病兵を送った事と、妖魔達がタンカスまで侵攻する可能性がある事、それから街の守りを固めるようにとのカルマからの指示があった。

領主は急いで、テイルトへ向かう予定のアルス達にそれを伝えたのだった。

妖魔達が群れを成してテイルトを襲っていると聞いた五人は、険しい表情をしていた。ただ一人、セシルだけはまだ見た事の無い妖魔達の話を聞き、震えながらアスターの服をしっかりと掴んでいた。しかし、その震える身体とは裏腹に、少女の眼にはどこか悲しげな決意が現れている事に、まだ誰も気付いてはいなかった。

テイルトに駐留している騎士団は、すでに疲れ果てていた。

連日のように妖魔が襲って来ては、森の中へ姿を消していく。その繰り返しだった。襲ってくる妖魔は、相変わらずオークとオーガであり、数も毎回同じ程度であった。

次第に戦い慣れはしたが、一向に衰える事の無い妖魔達の力と数に、騎士団は少しずつ数を減らして疲れが蓄積していた。

妖魔達を退けるのに効果的であった魔法も、使い手であるフェイラ

がついに精神の限界に達して倒れると、騎士団の動揺は深刻であった。

それでも騎士団が耐えていたのは、カルマが健在であったからだ。騎士団はすでにその数を八割ほどに減らしていた。それでもまだ七百名ほどの数を保っていた。

カルマは、副官達とともに飛び回って指示を与えていた。連日の戦にもかかわらず、北の森から少しはなれた場所には粗末な柵が設けられている。その後ろには、簡単な溝が掘られ、敵の侵入を拒んでいた。

北の街道の入り口には、馬除けの柵の他に右手にある湖から水を引いて、掘りを作ったのである。見張り台は妖魔に倒された経験から、少し東側に作られていた。

天幕も、可能な限り村に近い場所や村の中に作られ、村の東側の家々も穴から放れているものを使っていた。

最初の妖魔の襲撃では混戦になってしまっただけだったが、これで狭いながらも平原の北側に空間を作り、弓での攻撃を可能にしていた。

「フェイラ殿、ご気分はどうかな」

カルマは女魔術師を見舞いに来ていた。

普通なら、女性の寝室にむやみに入るものではないのが、いつ妖魔達が襲ってくるとも解らないので、カルマは戸口で入って良いか訊ねてから入ったのだ。

魔術師は場合があるので、ローブを着たままの姿で寝ていたようだ。傍らにはすぐに使えるように魔法の杖が立てかけてある。

「ええ、もう大丈夫です」

上体を起こそうとしたフェイラを、手で制しながら「そのままいい」とカルマは気遣いを見せた。

「何かありましたか」

フェイラは、カルマの気遣いにありがたく甘えようと、身体を寝かせながらカルマに聞いた。

「次の襲撃が何時来るかも解らないのでな」

カルマは、フェイラが戦えるのかどうか自分の目で見に来たのだった。

「もう大丈夫です、妖魔達が来れば私も戦います」

フェイラは聡明な光りの宿る眼を、カルマに向けながら静かにそう言った

「そうか、起こしてすまなかったな」フェイラの言葉に満足そうに頷いたカルマは、それまではゆっくり休んでいてくれと続けると天幕を出て行った。

天幕を出ると、眼に飛び込んで来る南の山々はすでに紅葉が進んで鮮やかな色彩を見せていた。

戦の事など忘れさせてしまうような景色に、カルマは少し足をとめた。

フェイラの天幕は、村の石壁から入ってすぐのところにあつた。隣に並ぶように、少し大きめなカルマの天幕が張つてある。石壁の上には見張りについている騎士達が数人、北を窺っている。

カルマは傍らに控えていた副官に、部隊長達を集めるように言う自分の天幕へ向かった。

天幕に戻ると、カルマは椅子に腰掛けてゆつくりと、息を吐きながら眼を閉じていた。

ドーン・・・ドーン・・・

と、そこに突然見張り台から銅鑼の音が聞こえた。

音が二つ、西からかつ

敵の襲撃があると、音の数で向かってくる方角が解るようになっていた。音が一つなら北、二つなら西だ。三つならそれ以外からという意味だ。妖魔達は今まで北からしか襲つては来なかったが、今回は西から来たということになる。

ドーン・・・

「ん？」

最初の二つを聞き、急いで天幕を出ようとした時だった。もう一つ

音が鳴った。しばらく間があって鳴ったという事は、どうやら帝国兵ではないらしいとカルマは思った。

天幕を出ると、抜き身の剣を持ったまま、構えを解いた騎士達が城壁の上で騒いでいた。鐘の音で敵ではない事を知った騎士達が、興味深げに向こうを見ている。

「カルマ様っ！」

城壁の向こうから馬に乗った一人の騎士が姿を現した、カルマの姿を見ると近づいてきて言った。

「アルス様達が戻られました」

騎士団が陣を構えるティルトの北の小さな平原に、アルス達は到着した。

敵襲を知らせる銅鑼の音が二つ、続けて一つ聞こえてくる。

アルス達は最初、戦闘の真っ只中に到着してしまったのかと思ったが、それが自分達を見つけて鳴らされたものだと思えると、安堵しながら平原を村に向かって馬を進めていた。

辺りを警戒していたらしい騎士達が、アルス達の姿を見て一様に安堵の表情を浮かべながら挨拶をしてきた。

敵襲だと思ったのか、中には抜き身の剣を持ったままの騎士もいたが、アルスの視線を感じて慌てて鞘に収めていた。

巡回していた騎士の一人が馬を反転させると、村の城壁の方へ向かって駆けて行った。きっとカルマに知らせに行っただろう。

アルス達は馬を歩かせて村の方へ向かった。

しばらくすると、馬に乗ったカルマとその副官達が駆けつけて来た。

カルマに先導されるような形で、石壁の中に張られた大きな天幕の中にアルス達はいた。

カルマは正面に腰を下ろして、こちらに眼を向けている。傍らには顔色が少し青い女魔術師のフェイラが、同じく椅子に腰掛けている。魔法によって激しく精神を消耗させた後に見られる、魔術師独特の

顔色なのだがアルスは知らなかった。具合が悪いのかな、位にしか思っていなかった。

カルマを挟んでフェイラの反対には、数人の騎士達が立っていた。皆、右肩に紫色の布を巻いている。

「ずいぶんと早かったな」そういつてからカルマは労いの言葉をかけると、広場に開いた穴について何か解ったのかと、聞いてきた。

「はい、ミゼム殿にお会いして聞いてまいりました」

アルスは自分の後ろにいるセリルから悲しげな空気を感じ取ったが、どうする事もできない自分にもどかしさを感じながらそう答えた。父と子ではあるが、今は騎士団の軍議用の天幕の中で報告をしている最中なのである。本当は人目を気にしないで父と話がしたかった。セリルを元氣付けてもやりたかったのだ。だが、それが無理なのは良く解っているつもりだった。

それからミゼムから聞いた話を、ミゼムから聞いたとおりに話し始めた。所々、エイグが注釈をはさむ。

「それはなんとも・信じられんな・」

カルマは、アルスの話が終わるまで黙って聞いていたが、ミゼムから聞いたという話を聞き終わると、そつと呟いた。傍らにいる騎士達が話の途中で驚きの声をあげるのを、カルマはそれを手で制して話の先を促した。確かに無理の無い話なのだ。アルス達も最初に聞いたときは驚きを隠せなかった。

「ですが、それが真実です」

そう言ったのは、アルスでもなければセリルでも無かった。フェイラであった。

「それはどうということだ？」

さすがにフェイラの言葉に驚いて、カルマは困惑顔を女魔術師に向けた。

フェイラの蒼白な顔にも驚きが浮かんでいるのが解る。だが、フェイラは聡明な顔をカルマへ向けると話し始めた。

フェイラの話では、ミゼムから聞いた話と同じものがザーナ魔法王

国の魔術師学院にも伝わっているという。ただ一点違うのは、ティルトが古竜と赤き乙女の眠る地の上に興された村である事は、伝わっていないかった事だった。

「同じ話がザーナにも伝わっているのだな・・・」

カルマはそう言つと、信じないわけにはいかないといった顔でセリルを見つめた。年の頃はアルスと同じ、まだ少女の面影の抜けきらないこの娘がミゼムの孫娘であり、紅き乙女の子孫だという。

セリルは黙つて方膝をついて前を見ていたのだが、自分が紅き乙女の子孫だと紹介された後から向けられる騎士達の好奇の目に、緊張の為か俯いてしまつていた。

カルマはそんな少女に優しい眼を向けながら、話の内容を整理していた。

「つまり穴の中で今も尚、眠り続けている古竜と紅き乙女に協力を頼み、暗中襲来する妖魔どもを、もう一度封印する術を教えてもらえば良い、という事だな」

カルマはしばらく考えてから少し苦しそうにそう言った。

カルマが苦しそうな声で言ったのには訳があった。

もし、伝承のとおりに妖魔達を封印できるのだとしても、それには蒼き王と同じように自らの命を差し出さなければならぬかもしれないのだ。それはアルス達もずっと心に引っかかっていた事であった。

騎士達やフェイラにも解つたのか、みな黙り込み、重苦しい雰囲気の流れていた。

「あ、あの・・・私に行かせてください」

重苦しい沈黙を破るように、控えめな声がした。

その場にいた全員の視線が声の方へ集まる

セリルだった。

セリルは、皆の視線が自分に集まっているのを意識してか、顔を少し赤くしながらも、緊張した声でもう一度言った。

「私を穴の中へ、行かせてください」

今度の声は、もつとはつきりと聞き取れる、何か決意に満ちた声であつた。少女は相変わらず顔を赤くしながらも、真っ直ぐにカルマの眼を見つめていた。

「・・・いいだろう」

しばらく間があつて、カルマは静かに口を開いた。

カルマは、少女の目に宿る何かを感じていた。戦いの事など何も解らない少女が、最前線のこの地まで来て、どんな危険のあるか解らない遺跡の中へ行かせてくれと言っているのだ。それがどれほど危険な事なのか解らない年頃でもあるまい。

それを承知で行かせてくれというのだ。カルマはそう思つて少女の頼みを聞き入れた。

古代の遺跡には、魔術で作られた魔物や数々の罠などがある。それらの話は一般にも広く知られている話だ。遺跡探索へ行つた者達の哀れな末路など、子供達を震え上がらせるには十分な話だつた。

子供を心配する親達が、戒める為に良く話したりもする。アルスも幼い頃に母親から良く聞かされたものだ。

「ただし、アルス達五人にも同行してもらふ」カルマは優しい眼を厳しいものに変えると、有無を言わさぬ口調でアルスに眼を向けて言つた。

「はい」

戸惑つた表情を浮かべていたアルスは、それが少女を守りなさいと言われているような気がして答えた。

セリルが赤き乙女の子孫だという事を考えても、セリルの身に危険が降りかからない保障にはならないのだ。

アルスは、自分がこの少女を守らなければならないという気持ち強く感じながら、決意の眼で父親を見つめ返していた。

ドーン・・・

その時だつた。遠くで銅鑼の音が一つ聞こえてきた。

「来たかつ」

カルマは声をあげると、すぐに用意して穴の中へ向かうように言い、

騎士達を引き連れて天幕を出て行った。

遠くから、帝国兵が現れた事を知らせる声が聞こえて来ている。

「すぐに準備して出発しましょう」

エイグの緊張した声に、六人は頷くと天幕を出てセリルの家へ向かった。ここからだと言壁が邪魔で、その向こうでの戦いの様子は解らなかったが、騎士達のあげる雄叫びや金属の打ち合わされる音などが遠くに聞こえてくる。

アルスはチラツと石壁に眼をやり、父親の無事と騎士達の武運をそっと祈ってから先を行くエイグ達を追った。

カルマと副官達は石壁に上り、北の街道の入り口を見ていた。

太陽の光りが、ちょうど南西から降り注いでいるので妖魔達には逆光だろう。こちらの射掛ける矢が、大量に降り注いでいるのが遠目に見える。

「カルマ様、大変です」

そこへ一人の騎士が馬を走らせて来た。騎士は石壁の上にカルマがいるのがわかったのだらう。石壁の前で馬を止めると、馬を降りるのもどうかしそにカルマに叫んだ。

「何事だっ」

「はい、今回は妖魔達だけではなく、帝国兵の姿も後ろに見えます」カルマの声に、その騎士はそう返してカルマからの指示を待った。

カルマの陰しく歪んだ眉が、さらに陰しくなる。周りからは副官達のどよめきが起こる。

「急ぎ前方を固めよ。妖魔達の侵入を許すなっ」

知らせに来た騎士は、カルマの言葉に「はっ」と返事をすると、馬に跨って平原の北へ馬を走らせて言った。

そう言つてカルマは、北に見える街道の入り口のさらに向こうに眼をやった。

確かに大勢の人影らしきものが、街道へ入って少し行った先の小高くなつた場所に陣取っているのが見える。

カルマはそれを憎々しげな眼で見ながら、周りにいる副官達に守りを固めるように次々と指示を出していく。カルマの指示を受けた騎士達は一礼をすると、それぞれの持ち場へ向かって行った。

「カルマ様」

一通り指示を出し終えて帝国兵らしき塊に眼をやると、後ろから声がかかった。

「私にお任せください」

フェイラはそう続けると、カルマの返事も待たずに何やら唱え始めた。

見ると、左腕にはいつもとは違った短いワンド魔術棒が握られている。そのワンド魔術棒は赤い宝石が先端部分に埋め込まれており、フェイラの詠唱が進むに連れて赤い輝きを放ち始めていた。

「はぁーっ」

フェイラは呪文が完成すると、街道の向こうへワンド魔術棒を振りかざした。

すると辺りは一瞬、陽の光が遮られたように暗くなると、すぐに元に戻ってしまった。

カルマは何が起こったのか解らずにフェイラの顔を見る。

「幻覚を作りました」

何事も無かったような顔をしながら、フェイラはそう言った。知性を感じる眼が、北の街道からカルマへ向けられる。

フェイラの話によると、帝国兵側から見ると、街道の入り口に何人かの巨人が出現したように見えるそうだ。そして、こちらが妖魔と戦っている様子は見えなくなっているらしい。

ワンド魔術棒の赤い光りは少し弱くなっていたが、相変わらず光りを放っていた。

「これで時間が稼げます、帝国兵は警戒してすぐには襲ってこないでしょう」

フェイラはそう言って、解除の鍵となる言葉が発せられるか、ワンド魔術棒が健在である限り幻影はその場に留まり続けますと続けた。

「そうか」カルマは女魔術師の説明を聞くと、一言礼を言ってから前方の戦況を見つめた。

どうやら、騎士達は妖魔を押し返しているようだ。すぐ後ろに帝国兵がいるが、妖魔の数はいつもと変わらなかった。種類も相変わらずオークとオーガであるらしかった。聞き覚えのある奇怪な叫び声が石壁までかすかに聞こえてくる。

弓で戦っていた者達も、剣を手に戦いに加わっているようであった。ついに妖魔達が崩れ始めたようだった。

しばらくすると、一際大きな喊声が聞こえてきた。妖魔達の姿が四散しながら森へ逃げ込んでいくのが遠目に解る。

石壁の上でも、それが解ったのだらう騎士達が喊声を上げ始めた。

「油断するなっ、帝国兵はまだ後ろに控えておるぞっ」

カルマも一瞬ほっとした表情を作ったが、すぐに険しい表情をしながらそう叫んだ。周りの騎士達もその言葉に落ち着きを取り戻して、慌てて武器を構えて北の街道の入り口に眼をやっていた。

帝国兵達の陣に動きは無い様に見えたが、ここからでは遠すぎて良く解らない。

フェイラの創り出した幻影で帝国兵達がすぐに襲ってくるとは思えなかったのだが、こちらからは幻影は見えない。

幻影で足止めをしているのを知っているのは、カルマとフェイラの二人と、その二人のやり取りを見ていた護衛についている数人の騎士達だけであった。

アルス達は長い階段を下りていた。

暗くじめじめとした階段は、ところどころ苔が生えていて何度か滑って転んでしまいそうであった。数本の松明の明かりだけが足元を照らす唯一の光源であった。

壁は土が剥き出しになっている。長い年月のうちに崩れたのだらう、ところどころ階段の上に被っていたが、歩けないほど崩れているところは無かった。

そこは村の広場に空いた穴の奥に通じる階段だった。村の東南のはずれにあるセリルの家の裏に、一つの枯れ井戸があった。その少し大きめな井戸の脇にある石を、ジェイズはその怪力で持ち上げたのだ。すると、どういう仕掛けかわからないが、小さな機械仕掛けの音がして枯れ井戸の東側が陥没したのだ。

そこには暗く、その見えない階段が姿を現した。階段は少し下ると踊り場があり、方向を変えて村の広場の方向に下り始めた。

どんな罠が仕掛けられているか解らない。もしかしたら、遺跡を守る為に魔法による永遠の命を与えられたゴーレム人造生命体が、襲ってくるかもしれない。

アルス達は黙ったまま、辺りを警戒しながら階段を下って行った。

途中、ジェイズが足を滑らせて、先頭に行くアスターを巻き込んで数段転げ落ちてしまった。

したた強かに背中を打ちつけたアスターが、ジェイズを睨んでその巨体を呪った。皆で心配して起こしたのだが、深刻な怪我をしているわけでも無く、また罠の動くような音も聞こえなかった。一行は安堵のため息を漏らしながら、階段をまた下りていった。

ジェイズが、すまなそうにアスターを見る顔がおかしかったらしく、セリルがちよつと笑っていたのをアルスは見ていた。

自分を見ているのを感じたのか、セリルはアルスの眼を見ると、少し赤い顔をして、ばつが悪そうに俯いてしまった。

アルスは、セリルに笑顔が戻ったのを良い事だと思いながら、また前を向いて歩き出した。だからアルスは、自分の背中を見ている少女の悲しそうな視線に気付く事も無かった。

八、帝国の総攻撃！

八、帝国の総攻撃！

辺りは、夜の闇が陽の光に変わって舞い降りて来るように、徐々に薄暗くなっている。

ミーゼは、物資を運ぶ際に使う荷馬車を改良して作らせた寝台に眼をやりながら、考えていた。

帝国兵達が陣を張る小高い丘の前方には、先ほどベイグナルが大量に召還した妖魔達が前方の平原に顔を向けて、突撃の合図を今か、今かと待っている。

魔術師は、いつもより大量の妖魔達を召還したらしく、召還が終わると崩れるようにその場に倒れ、気絶してしまっていた。

魔術師の説明によると、魔法で召還した場合は術者が気絶したら支配が解けてしまうらしいのだが、妖魔支配の魔力のある“魔道具”により召還している為、自分が気を失っても支配が解ける事は無いそうだ。そしてそれは兵達全てに知らせてある。

だが、明らかに帝国兵は不安を抱いている。妖魔達の姿に怖れを抱き、動揺を隠しきれないのが緊張した空気から伝わってくる。皆を攻めた時も魔術師は気絶していたが、あの時と状況が違った。そんな説明だけでは、頭は解ついても心が恐怖や不安を感じるのを避ける事ができるはずが無かった。

数日前にこの場所で妖魔支配の魔力は消されて、妖魔達が自分達を襲って来たのだ。

いくら大丈夫だとは言っても、支配している本人が気絶しているのだから、不安や恐怖を感じるなという方が無理な話だ。加えて平原の入り口には、王国の魔術師が召還したと見られる巨人達が、先ほど姿を現してこちらを窺っている。

巨人族は、遙か昔に海を隔てた別の大陸に移り住んだと伝えられて

いるが、ベイグナルが妖魔を召還するように、王国の魔術師も巨人を召還できる”魔道具“を持っているらしかった。

兵達は、小さな山ほどもある巨人達の姿に完全に浮き足立っていた。ミーゼはその巨人達を見ながら、あんな物に襲われたら戦うどころか一瞬にして押し潰されてしまうと、眉を歪めてベイグナルの眼が覚めるのを待つしかない自分に、ちよつとした怒りを覚えていた。平原の入り口に陣取る巨人達は、全部で三体いた。オーガの身長は三倍はあろうかという巨体である。それが、巨大な棒切れを持ってこちらを見ているのだ。

「魔術師殿はいかがされているのかな？」

と、そこへ聞きたくない冷たい声が後ろからかけられた。総大将ファルモスの声だった。

ミーゼは押し殺していた恐怖が、その声で一気に吹き出てくるような気分になり、背筋が寒くなるのを感じた。

「ベイグナル殿は、大量の妖魔を召還して気絶し、今は寝台で寝ています」

ミーゼは不快な思いをしながらもそれを隠して振り返ると、方膝について答えた。俯くその顔には、整った眉が嫌悪で歪んでいる。

顔を上げると見たくも無い、不健康そうな顔がある事は解っていたので、ミーゼはそのままじっとしていた。

ファルモス以外にも、何人かの側近の者達が同行しているようだ。足が何本か見えた。

「そうか、では起きたら知らせてくれ」

ミーゼの言葉に、ファルモスはそう答えると、ミーゼの返事も待たずに踵を返して歩いて行ってしまった。

ミーゼは立ち上がったで一礼しながら返事をした。ファルモス達が行ってしまうと、その歩き方と言葉に、今までに無い感情があることに気が付いて、一人クスクスと笑っていた。

あの冷酷そうなファルモスも、明らかに恐怖を感じているようだったからだ。

しばらく経つと、ベイグナルが寝台から顔を覗かせて起きた事をミーゼに伝えてきた。

すっかり夜になり、辺りは暗くなっていたが、その日は雲があり、時折月の光が遮られていた。

ミーゼはすぐにファルモスへ知らせをやると、ベイグナルに巨人の事を話した。

「ん・・」

ベイグナルは、巨人をしばらく見つめると何やら短く呪文を唱え、もう一度巨人を見て大声を上げて笑い出した。

「なっ・・何がおかしいのだっ」

ミーゼは自分が笑われたのかと戸惑いながら、魔術師のいる寝台に一步詰め寄ると言った。

「悪い、悪い」

そう言いながら魔術師は理由を説明した。

「だって、あれはただの、幻だよ」

まだ笑いが収まらないらしく、ベイグナルは少し涙目になりながら、大きな声でそう言った。

「それは本当か？」

そこへ、ベイグナルが起きたと知らせを受けたファルモスが、慌てた様子で駆け寄ってくる。

どうやら、ベイグナルの声が聞こえていたらしい。周りの兵達も一様に安堵しているのをミーゼは感じていた。

「きっと王国の連中は、恐れをなして幻影を作ったのさ、あんな物で足止めできると思ってもらったら、僕がいる意味が無いよ」

そう言いながら、魔術師は意味ありげに笑って見せた。

その魔術師様は今まで寝ていたんだろうがと、ミーゼは言ってやりたい気持ちをファルモスの手前、抑えて方膝についてファルモスに頭を下げる。

「では、あの巨人どもは、戦いはしないのだな？」

ファルモスも安堵した様子で、ベイグナルに念を押すように、もう一度聞き返した。

「はい、そうですね、あの幻影は無視して攻めても良いと思います」
ベイグナルは笑うのを止めて、涙を拭きながらそう言った。

「そうか、それでは総攻撃に移るとしようか、全ての兵に告げよ」
魔術師の言葉に、ファルモスは自信満面の顔で声高にそう叫ぶと、「合図をしたらいいよだ」と言いながら、側近達を引き連れて去っていった。

普段は冷静で、あんなに取っ付き難くて冷たいのに、こういう時だけは自信に満ちるのだなど、ミーゼは不快さをさらに強く感じながらファルモスに返事を返した。

ファルモスが去ってから、顔を上げたミーゼは部下達に侵攻の準備をするように命じた。

ベイグナルは、よたよたとした足取りで寝台から降りると、欠伸をしながらミーゼの傍へ来て向こうに見える妖魔達と幻術で現れた巨人見ていた。

ガンガンガンッ

しばらく経つと、侵攻開始を知らせる合図が鳴り響いた。

それを合図に、ベイグナルは妖魔達へ何か奇怪な言葉で叫んだ。ベイグナルの言葉が伝わったのだろう、妖魔達は一斉に恐ろしい声を張り上げながら、ゆっくり進み始めた。

ドーン・ドーン・

平原の方から、敵の銅鑼の音が聞こえてくる。王国兵達も、こちらの動き出した様子が見えたのだろう。

帝国兵達も声を張り上げながら、妖魔達と少し距離を置いて進み始める。ミーゼやベイグナル、それにミーゼ配下の部下達も一緒に進み始めた。

ドーン・ドーン・

銅鑼の鳴る音が聞こえてきた。

今まで動かずにいた帝国兵が、いよいよ侵攻を開始したのだ。

すでに暗くなり、雲の出ている空からは大地を照らす月の明かりが、時折差し込むだけであった。

パチパチと小さな音を上げて、幾つもの篝火が燃えている。

「いよいよ来たな・・・」

カルマは誰に言うとも無く呟くと、傍らの魔術師を見た。すでにフェイラの顔には生気が戻り、歳相応の張りのある肌が篝火の炎に照らされて、白い色を赤く染めている。

「どうやら幻影は見破られたようですね・・・」

フェイラは涼しい顔を前方に向けながらカルマに答えた。

カルマはそれを聞くと、一呼吸置いてから叫んだ。

「前列の隊は武器を構えよつ、後ろの物は弓を引けつ、妖魔どもと結託した連中など恐れるに足らんつ勇気を示すのだつ」

カルマは、少しずつ前に出ながら叫び続けて、味方の兵を鼓舞していく。

それを聞き、周りの兵達から喊声上がる。

カルマは叫びながら満足そうに頷くと、平原の中央まで進んだ。険しい表情を浮かべながら騎上で陣形見たカルマは、傍らに控える副官達に次々と指示を出していく。

「来たぞー」

その声と、ほぼ同時に両軍の先陣がぶつかった。相手は妖魔を楯に進み、後ろから矢を放ってくる。こちらも負けじと矢を射返していく。何体もの妖魔と味方の騎士達が倒れていく様子が、雲の合間から差す月明かりに照らされてうつすらと見えてくる。

武器が打ち合わされる音や断末魔の悲鳴、人と妖魔の上げる叫びの混じった声が聞こえてくる。

カルマは時折、叫びながらその光景に眼を向けていた。

フェイラも少し青褪めた様子で戦闘を見ている。

先頭で戦っている騎士達は、今までとは違って数の多い妖魔と、飛んでくる矢に苦戦を強いられているようであった。

まずいな・・

それはカルマの率直な感想であった。

敵は妖魔に当たるのも構わずに矢を放ってくるが、こちらは矢が味方の兵に当たらない様に射掛けているので分が悪かった。

「お待ちください」

前に進もうとしたカルマを制してフェイラが声をかけた。

カルマは前線に近い場所まで行き、態勢を立て直そうとしていたのだ。

その声にカルマは馬をとめて、フェイラを見た。

フェイラは、すでに杖を構えて何やら呪文を唱え始めていた。少し時間がかかるようだ。女魔術師の額に浮かんだ汗が、篝火に照らされて赤く輝いている。

フェイラはしばらくすると、両手をあげて雲の出ている大空を見上げた。そして右手を顔の前へ持つて来ると、細かく動かしながら印を結ぶ。眉間にしわがより、形良く整えられた眉が少し歪んでいるのが解る。

「はあーっ」

少し甲高いフェイラの声が聞こえた。

それと同時に杖を持った左手を、帝国兵の陣の方へ陣振り下ろす。すると、辺りに轟音が轟き始めた。何事かと兵達が動揺し始める。それと同時にフェイラの身体が、前のめりに力なく倒れた。

「落ちて着けっ、フェイラ殿の魔法だっ、害は無い、攻め立てよっ」
カルマは、轟音に負けないように声を張り上げて叫びながら、フェイラの身体を両手で受け止めると抱きかかえる様にして支えた。

その時だった。

北に広がる森の上空の雲が赤くなり、次の瞬間、雲が割れて赤い塊が落ちて来たのだ。

サモンズ・メテオ隕石召還！

カルマはそれを見て戦慄した。周りの兵達からもどよめきが起こる。皆、戦など忘れてしまったかのように空を見上げていた。

カルマも聞いた事しかない魔法を目の前にして、魔術師の力を改めて見直すと同時に、隕石の向かう先にいる帝国兵の無残な末路を想像した。

ドドドドドドドドドドンッ

物凄い巨大な音を轟かせて、隕石は局地的な地震を発生させながら帝国兵の陣の左側へ落ちた。その衝撃と爆風が、まるで波のように、少し間を空けてこちらまで押し寄せてきた。

周りでは兵達が悲鳴を上げながら身を縮めている。だが、遠かった為に篝火が倒れたくらいで被害はほとんど無いようであった。

見ると、帝国兵の陣は左側から炎に包まれて、その炎の明かりに照らし出された人影が右往左往するのが見える。

先陣で戦っていた味方の兵士も、地震が収まると勢いを取り戻して攻め立て始めた。

カルマはふと、強大な魔法の為に疲労しているフェイラに眼をやる。女魔術師は生気の抜けた青白い顔をして、眠っている様に眼を閉じていた。顔には汗が浮かび、体中の力が抜けてぐったりとしている。小さな胸が苦しうに上下しているのを見ると、どうやら気を失っているだけらしい。

フェイラは渾身の魔力でこの大魔法を完成させたようだった。

“サモンズ・メテオ隕石召還”の魔法は話には聞いた事があるが、ザーナ魔法王国で学んだ正規の魔術師でも、使える者はあまりいない。それどころか、大陸中でこの魔法を使える魔術師が、数えるくらいしか存在しない事をカルマは知っていた。

そんな大魔法を、まだ二十歳を少し越えたくらいの年頃の娘が行使してしまうのだ。つくづく、フェイラが味方で良かったと感じるカルマであった。

カルマは周りにいる騎士に女魔術師の身体を預けて、後ろで寝かせて置くように言うと同様に眼を向けた。

どうやら、敵から放たれていた矢は、すでにやんでいるらしかった。帝国兵の陣も大分混乱しているらしく、まだ右往左往している様子

が魔法の残り火に照らされて窺える。

「敵は総崩れだ、一気に攻め立てよう」

カルマは傍らに控える伝令に、部隊長達への支持を伝えた。それを聞き、伝令が一礼してその場から馬を走らせていく。

だが、そこへ突如、敵の伏兵と思われる一団が、北の森の中から柵と堀を西へ迂回してこちらの陣の左手を急襲した。

「なにっ」

もう一押しで終わると思っていたカルマは、思わぬ伏兵に虚を突かれた格好となった味方が、陣形を崩していくのを目の当たりにした。「これより本隊は左手に現れた敵の一団を叩く、本陣守備隊は残れ、突撃っ」

カルマは、動揺する兵に向かって力の限り叫ぶと、自ら先陣を切つて馬を走らせた。後ろから大勢の騎士達が喊声を上げながらついて来る。

カルマは腰から、代々家に伝わる愛用の剣をスラリと引き抜くと、それを振り翳しながら憎々しげに帝国兵を睨みつけて馬を走らせた。「怯むなっ、勇気を示せっ、王国に攻め込んだ愚かな者どもに、恐怖と後悔を与えてやるのだっ」

カルマの叫びに呼応するように、周りの騎士達から一斉に喊声がある。

敵の一隊は、こちらの陣の左側を突いて攻撃を仕掛けてきていたが、カルマ達が近づくの気付いた者達がこちらへ向かってきた。

カルマは敵の一隊に突っ込むと、数人の帝国兵を斬り倒した。周りでも帝国兵を斬り捨てた味方が、辺りを警戒しながらカルマを中心に陣形を組んで戦っていた。

左翼の一隊も、態勢を立て直して本隊と一緒になって帝国兵達を追いつめていた。

一度は崩れかけた陣形も、なんとか持ち堪えた様だ。森から来た敵の一隊はもはや全滅しかけていた。

最後に生き残った敵がカルマを見つけて斬りかかって来た。渾身の

力で右から袈裟斬りに踏み込んできたその刃を、カルマは素早い身のこなしで少し屈みながら左に跳んで避けると、そのままの体勢で前に跳んで、相手の鎧の隙間を横に斬った。

「がふっ」

敵兵は真つ赤な鮮血を跳び散らせながら倒れていった。

カルマは倒れた敵に一瞥をくれると、剣に付いた血を、剣を一振りして振り払ってから街道の方へ眼を向けた。

妖魔達は、その数を大分減してはいたのだが、思った以上に数が多かったらしい。まだ、ある程度まとまって戦っている。

だが、それもすでに味方に囲まれて、いくつかの点のようになって抵抗していた。妖魔達のあげる断末魔の悲鳴や、味方の兵のあげる雄叫びが聞こえてくる。

カルマはゆつくりと、元の位置へ本隊を移動しながら、そのさらに向こうへ眼をやった。

帝国兵の本陣は依然、そのままの場所で静かに戦場を見下ろしているようであった。すでに魔法によって辺りの木々に引火した炎は消されている。何事も無かったかのように、雲の間から差し込む月の光りがちょうど帝国兵の陣に降り注いでいる。

なぜ攻めてこない？

帝国兵の陣地から不穏な空気を読み取ったカルマは不思議に思った。カルマはまだ、知らなかった。

砦の最後の生き残りを、カルマの弟、ガイスを一瞬にして葬った・・ものが姿を現そうとしていることに。

九、蒼い目の少年と古竜

九、蒼い目の少年と古竜

アルス達は、ようやく階段を下りきった所で一息ついていた。

本当はそんな暇も無いのだが、一息つかざるをえないほど、階段が長かった為だ。

「そろそろ行こう、地上が気になる、早く済ませて戻らないと」

アルスは、そう言うと言き出した。他の五人も頷くと、アルスの後を追ってゆつくりと進んでいく。

そこは幻想的な空間であった。

穴が開いた時に見た薄紫色の光と同じ色の、幾つもの光りの玉が、まるで真つ暗な川辺に現れた大量の蛍のように宙を待っていたのだ。それだけではない。その空間の中には、巨大な街が広がっていた。

その街の遙か上の方に、村の広場に開いた穴と思われる、ぼんやりとした穴が見える。その穴の様子から、地上はすでに夜だという事が解った。

ただ、その穴はアルス達が降りてきた階段の、埋もれた街の中心を挟んで反対側の上空に開いていて、かなり小さく見えた。

最初に見た時は、全員で息を呑んでその場に立ち尽くしてしまった。その昔《封印戦争》の時に、地下に埋もれた街だった。

町全体が空間の中にあるわけではないようで、端の方には剥き出しの土壁に半分埋もれた家なども見える。崩れてしまった物から、まだ人の住めるもの、小ささまざまな石で作られた家々がそこにはあった。

積もった埃は街が地下に埋もれてからの歳月を物語るように、一歩足を踏み出すごとに宙に舞い上がる。

まるで精霊の国にでも来たような錯覚を覚える光景が広がっていた。アルス達はセリルに教えられて、街の中心にある、一際大きな建物

に向かっていた。

するとその時だった。

突然、宙を舞っていた幾つもの薄紫色の光りが、アルス達の周りに集まってきた。行く手を阻むかのように、前に立ちはだかる。

「おいおいおいおい、やばく無いのかっ？」ジェイズが、大きな身体に似合わない声を最後尾からかけてくる。

「しっ」アスターが、それに振り返って人差し指を口の前に立てながら、ジェイズを睨む。余計な声をあげて光りを刺激するのは良くないと思ったのだろう。

「わ、悪かったよ」体に似合わず小心者のジェイズが、小さな声で言いながら両手をあげて解ったと合図をしている。

「アルス様、止まって下さい」先頭に行くアルスに、エイグが声をかける。

それでアルスも気付いたのだが、集まってきた光は、幾つかの塊になって人の形をしたものに姿を変えつつあった。

アルスは、それを見て身構えた。

エイグもまた、魔力に囚われまいかと警戒していたが、どうやら以前のような不思議な感覚は襲って来ないようだ。

「何だろう・・・」

どうやら、襲って来る気配が無いと知ると、少年は警戒していた緊張を解しながら辺りの様子を窺った。

しばらく経つと、人の形に姿を変えた光り達はアルス達の上空を旋回し始めた。

あなた達は何者かしら？

不意に頭の中に響くように、声が聞こえてきた。
「ひいっ」

ジェイズは、それを幽霊のように思ったらしく、ガタガタ震えながら頭を押さえて身を屈めた。カインが光り達を睨みながら、剣の柄に手をかけて身構えている。それをエイグが手で制していた。

他の三人も何なのか解らずに、辺りを不思議そうに窺っている。ど

うやら人型をした光り達が話しかけて来たらしい。

「私は赤き乙女レシュフオンの子孫、セリル・エルメドと言います、赤き乙女様にお会いしたく、ここへ来ました」

不思議な声に答える様に、セリルは一步前に出て言った。その言葉には不安と、何か決意の様なものが感じられた。五人はそのやり取りを、息を潜めて見守った。

セリルの言葉に、光り達はしばらく黙ったままであったが、何やら相談しているような雰囲気を感じられた。

確かにあなたはレシュフオンの血を引いているようね

また不思議な声が、頭の中に直接響いてきた。ジェイズは、大丈夫そうだと思っただけ、今度は声をあげなかった。それでも少し震えながら光り達を見上げている。

さあ、こつちへいらつしやい

もう一度、不思議な声が響いてくると、光達は六人を先導するように中央の大きな建物の方へ向かい始めた。

どうやらセリルのお蔭で会わせてもらえる様だ。アルス達は安堵しながらも、周囲の警戒を怠らないように慎重に光り達の後を追いかけた。

おや、蒼き王の血を引く者もいるのね・・・クスクス・・・

しばらく行くと、光り達の一つがアルスに近いところで飛び始める。その声に他の光り達も集まってくる。

「え？」

アルスは何のことかわからずに、ふと、小さな集落での老人の言葉を思い出していた。

そういえばミゼムさんも似た様な事を・・・

「余計な事は良いの、あなた達はしっかり案内してっ」

アルスの考えを遮るように、突然のセリルの大きな声が響いた。アルス達はびっくりしていた。今まで控えめで、とても内気な少女らしからぬ声であったからだ。

光り達は、少女の言葉に素直に従って先導するようにまた前を飛ん

でいった。

アルスに投げかけられたのだろう、光り達の言葉の意味は、目的の者達に会う事で何なのかが解った。

しばらく進むと、大きな建物に着いた。

そこは昔の礼拝堂らしかったが、あまりにも大きい。シエルバリ王都のパレス宮殿がすっぽり入ってしまっほどの大きさだった。

案内されるままに向かって行った先には、目的の人物達がいた。

それは小山のように大きく、小さく折り畳まれた翼を広げると建物の端から端まで届きそうであつた。その身体は青白く、うっすらと輝いていた

「古竜・・・」

皆のあげる感嘆のため息と一緒に、誰かの呟きが聞こえてくる。それはもしかしたら、アルス自身だったのかも知れなかった。

その古竜は、しかし、近くによってみて気付いたのだが、身体は透けて半透明であつた。後ろの石壁がそのまま透けて見えている。

六人は驚きを隠せなかった。太古の竜はすでに体が朽ち果てていたのだ。

「なんてこつた」

アスターが呟いた。それは他の五人も同じらしく、落胆を隠し切れずにいた。

そんなアルス達を構わずに、薄紫色の人影達は古竜とアルス達の間の上空を飛び回っている。薄紫色の光りが照らす古竜の身体は淵が淡く、かすかな紫色に輝いて見えた。

古竜は眠りに就いたままの姿で朽ち果てたのだろうか。不思議な光景であつた。

ん？

不意に、アルスは視線を感じて眼を向けた。

そこには、古竜の背中から自分の眼を真っ直ぐに見つめる、一人の女性の姿があつた。

その女性の身体は、古竜と同じように青白く光っていた。向こうの

石壁が透けて見えている。

それで古竜の、体の一部のように見えていて気付かなかったのだ。その女性は一糸纏わぬ姿でいるようだった。年の頃は二十歳前後だろうか、透けているので判断が難しかった。上体だけを起こして下半身は古竜の翼に隠れるように座っている。

「あ、赤き乙女・・・？」

アルスは自分の眼を真っ直ぐに見つめる女性を見て、直感的にそう思った。

他の五人も、古竜を見ていた眼をアルスの視線の先へ向ける。

お待ちしていましたよ、我が子孫と我が兄の子孫達、あなた達が来るのを

静かな、しかし、凜とした女性の声が頭の中に直接、流れ込むように響いてきた。

アルス達は驚愕と落胆に暮れていた。

身体の透けた女性は、自分が紅き乙女だと名乗った。アルス達がなぜここへ来たのかを知っている様子だった。

上の開いた穴から妖魔達を感じます、また暴れているのですね・・・

そう言つて、紅き乙女は話し始めた。

紅き乙女の話によると、古竜の力を貸して貰うためには、代償が必要であるとの事であった。

そして古竜と話す事ができるのは、紅き乙女が蒼き王の血を引く者にしかできない。なぜなら、紅き乙女と蒼き王こそが、神代の昔に竜の一族と共に暮らしていた一族の末裔だからだという。

アルスはそれを聞き、身体が震えるのを感じていた。それはセリルも同じようだったが、アルスほどは動揺せずに紅き乙女の話に耳を傾けていた。ミゼムに聞いて知っていたのだろう。

古竜は、数百年前の《封印戦争》以前から、すでに魂だけの存在となっていたという。気の遠くなるような遙か昔、神代の時代にあっ

た神々の戦いの中で、すでに古竜はその肉体を失っていたのだ。

古竜に肉体を与えて妖魔達と戦わせる為には、誰かがその肉体を捧げねばならなかったのだ。そして、その役目を自ら名乗り出たのがレシュフォン、つまり紅き乙女だったというのである。

紅き乙女の捧げた肉体と自らの強力な魔法により、一時的に肉体を具現化させた古竜は人間達の望み通りに妖魔達と戦った。

紅き乙女の兄、蒼き王レシュフォルはその命と引き換えに、望む物全てを封印する強力な魔法を与えられたのだという。

再び現れた妖魔達を封印する為には、誰かが犠牲にならなければ駄目なのよ・・

そう呟いた紅き乙女は、悲しそうな顔で遠い眼をした。

「それでも、私達は地上で戦っている者達を救いたいです」

アルスは、他に方法が無いのかを聞いているのだ。

残念ながら・・

紅き乙女は悲しそうに首を振るだけだった。

アルスは紅き乙女の言葉に、予想していた答えを聞くと、古竜を見つめた。そして、徐々に心の中に湧き上がるものの感情をしつかりと感じていた。

紅き乙女の話によると、アルスにはその昔、妖魔達を封印した蒼き王の血が流れているとの事であった。ミゼムや薄紫色の光り達が言っていた事が、ようやく理解できた。

蒼き王の子孫達は、テイルトの南に王国を作ったという。その王国がシエルバリエの事ならば、たしかに自分にもその血が流れている事をアルスは知っていた。アルスの曾祖母も祖母も、王家に名を連ねる名家から嫁いで来たのだ。それはよく、幼い頃から聞かされていた。

「良いかアルス、王家の血を、例え僅かでも引いているのだその事を忘れるな」

父はそう言って自分を叱ったものだ。

「じゃあ・・」

「私が、捧げます」

凜とした声が響いた。

アルスの言葉を遮って、はっきりとしたセリルの言葉が聞こえてきた。

その場にいた全員が、驚きを隠せずにセリルに顔を向ける。まだ幼さの残る顔には、はっきりとした決意が浮かんでいた。

セリルが何か思いつめた表情をしたり、ここへ行きたいとカルマに言った理由がこれだったのかと、アルスは感じていた。

「いや、僕が肉体をささげます」

少女の身体の震えに気付いたアルスは、慌てて気を取り直して、少女を庇うように前に立つと紅き乙女へ向かってそう言った。

「で、でも・・・」

残念だけど・・・あなたには無理だわ

まだ何か言いたそうにするセリルを説得しようと振り返ろうとした時だった。

後ろから、紅き乙女の言葉が投げかけられた。

セリルはその言葉に驚いて、紅き乙女を見上げていた。アルスも振り返り、言葉の意味を知ろうとする。

あなたには、確かに私の血が通っている・・・

話し始めた紅き乙女は、セリルに悲しげな眼を向けながら、古竜の力を引き出す為のもう一つの条件を話し始めた。

それはなぜ、レシユフォンが紅き乙女と呼ばれているかという事に関係があった。紅き乙女と蒼き王は双子の兄弟だった。それも竜と供に暮らした一族の神官の生まれだという。

その家は代々、祭事を執り行う家系であった。そして生まれる子供は必ず双子であり、紅と蒼の目を持つ兄妹であったという。

つまり、その一族の者であれば古竜と話すことはできる。ただ、力を借りる為には、セリルには受け継がれるべき紅い眼の色が無かったのである。セリルのそれは黒い色をしていた。

アルスはこの場にいる者の中に、その資格のある者が自分しかないな

い事を聞かされたのだ。

「僕が、竜の力を借ります・・・」

紅き乙女の言葉と父親の言葉を思い出しながら、アルスは慎重に答えた。その蒼い色をした眼には力強い決意の光りが宿っていた。

そう・・・その覚悟があるのね・・・

紅き乙女は黙ってアルスの蒼い目を見ていたが、その眼に強い決意を見て、そっと哀しげに呟いた。

セリルは両手を胸の前で組んで、祈るような視線でアルスを見つめていた。

アルスは呼びかけていた。

眼の前に眠る半透明の巨大な竜に眼を閉じて、その名前を呼び続けた。

紅き乙女と五人の人影が、アルスを心配そうな表情で静かに見守っている。

エイグはアルスが生贄になるのを反対したのだが、アルスは自分しかないのだと、その反対を押し切っていた。

エイグもそれは解っていたのだが、砦から逃げ延びた村で横になっている少年の寝顔を思い出して、言わずにはいられなかったのだ。

アルスはそんなエイグに「大丈夫」と一言呟いて、それから古竜に向き直って呼びかけを始めていた。

しばらく経つと、古竜が小さく動いたのが解った。翼を少しずつ動かしながら、身体の向きを変えていく。それはまるで、朝起きた時に見せる、伸びの样にも見えた。

《我に語りかける者はお前か・・・》

古竜はゆっくりと眼を開き、首をこちらに向けながら静かに太い声で、直接頭の中へ話しかけてきた。

「私は蒼き王の子孫、アルス・デ・アイオス、竜よ、あなたの力をお貸してください」

アルスは額にかいた汗もそのまま、竜に向かってそう言った。

《我が力を貸せと?》

静かに、しかし先ほどより不機嫌そうな声が言った。

《なぜ、我が力を求める?》

竜は数百年の眠りから覚めた巨体を解すように、その短くて太い足で立つと翼を広げて大きく・・伸びをした。背にいた紅き乙女も一緒に上がっていく。その眼は悲しみのままアルスを見つめていた。いつの間にか、薄紫色の光り達は姿を消している。

半透明のその身体は、建物に収まらない部分が石壁を貫いて外へ飛び出していった。実体が無いのですり抜けた格好になっている。建物が揺れる事も無かった。

その姿は伝説に語られる巨大な竜その物であった。もし実体があれば、その・・伸びと同時に放たれた咆哮で死んでいただろう。

その姿に、ジェイズが泣きそうな顔をして震えている。他の四人も一様に息を呑んで見守っていた。

「妖魔どもがまた、我らを脅かしています、再び封印する為に、力を貸して頂きたいのです」

アルスの言葉に、古竜は小さく顔を震わせて言った。

《愚かな人間どもめ、また懲りずに異界の住人を呼び出したのか》

古竜が笑っているように見えたのだが、その言葉には明らかな侮蔑と怒りが含まれていた。

《まあ良いだろう、仮初めでも姿をもらえるのなら、また妖魔の王を叩き伏せてやろう》

古竜は、遠い昔の妖魔の王との戦いを思い出しているようだ。短い間でも実体を手に入れられる事を喜んでいるようであった。

《で、おぬしがその肉体を我に捧げるといつのか?》

古竜は嬉しそうな声で言った。どうやら妖魔の王と戦えるのが楽しみらしい。

「はい、私の肉体を捧げます・・ですが、妖魔の王はおそらく封印されたままだと思います」

アルスは古竜の言葉にそう答えた。

《なにつ、妖魔の王もおらんに我が力を求めるのか?》

古竜はアルスの言葉に、信じられないといった様子でそう言う、眼を向けてきた。

《雑魚どもを相手に、我が力を貸せというのではあるまいな?》

古竜は明らかに不機嫌な声でそういうと、巨大な眼でアルスを睨んだ。

どうやら古竜は、封印が解かれて妖魔の王も復活したと思っていたらしい。

古竜は残念そうに首を振った。また元のように足を折って、身体を落ち着けると首を下ろして翼を畳んでいく。

「しかし、竜よ、我らは困っています、妖魔達を追い払いたいのです」

話を勝手に打ち切り、また眠りにつこうとする古竜に、アルスは必死に言葉を投げかけた。

その言葉に古竜は、もどかしそうに頭だけをアルスに向けた。元は何色か解らない半透明の双眸が静かにアルスを見ている。

《・・・追い払えばよいのだな?》

古竜はアルスの言葉を吟味している様子で、しばらく少年を見つめたあと、そう言葉を返してきた。

《追い払うだけで良いのなら、力を貸してやらぬわけでもない》

駄目かと思い、諦めかけたアルスは古竜の思わぬ答えに希望を見出していた。

「はい、力をお貸しください」

アルスは願いが叶うと思いそう答えた。

それで自らの肉体が消滅しても、後悔はしないと、もう一度心の中で呟く。

《・・・良からう、では代償を捧げてもらおう》

古竜はそう言って再び立ち上がると、大きな口を開いて咆哮した。実体が無い為に音も無い咆哮であったが、見る者を凍りつかせるには十分なそれは、長く尾を引くように感じられた。

そして、しばらくの後、古竜が口を閉ざした時にそれは起こった。アルスの身体が白い光りに包まれていったのだった。

カルマは愕然としていた。

それは突如、姿を現して味方の兵を次々と襲っていた。隣では氣を取り戻したフェイラが、青褪めた表情で震えている。

カルマ達が見つめる先にいたもの、それはドラゴン竜であった。

カルマの本隊は西から来た帝国兵を一掃し、元の位置まで下がっていた。優位に立っている戦況を見ながら、動かずにいる敵の本陣に不審さを感じて、カルマは警戒していたのだ。

その時だった、帝国の陣と平原への入り口の間にはそれは姿を現した。オーガの二倍ほどの大きさで、鮮血の様に鮮やかな鱗に覆われた体軀、耳まで避けた口には鋭い牙が見える、その眼は真つ赤な炎のようになり赤い色をしていて平原の方を見ていた。

次の瞬間、その竜は大きな口を開けると、真つ赤な炎を吐いたのだ。それは放射線状に伸びて、街道の入り口にいた幾人もの王国兵や妖魔達を飲み込み、一瞬にして消し炭へと変えていった。

兵達は、伝説や昔話でしか聞いた事の無い竜を目の当たりにして、恐慌をきたし、我先にと逃げ出していた。

「村まで、石壁の内側まで退けっ」

カルマは慌てる兵達を落ち着かせようとしたのだが、今回ばかりはさすがに無理があった。村まで退く事で態勢を立て直そうと考えてそう叫ぶと、自分も本隊を連れて石壁の内側まで下がった。石壁の上から、先ほど眼を覚ましたばかりのフェイラや副官達と共に、その光景を見つめていたのだ。

平原では、逃げ遅れた兵達が竜の炎や鋭い鉤爪を受けて、何人も絶命していった。「あ、あんなものに焼かれたらひとたまりも無い・・・誰かがそう呟くのが聞こえる。

竜の後ろには、逃げたはずの生き残りの妖魔と帝国兵が、距離を保ちながら村へ向かってきていた。

打開策の思い浮かばないカルマは、隣で青褪めた顔をしている女魔術師を見るが、彼女も首を静かに横に振るだけであった。

さすがに竜など初めて見るのだろう。彼女も聡明な頭を必死に使っている様だが、何も思い浮かぶ様子は無かった。

神代の昔に、神々と同等の力で存在した竜である。身体が小さく、下等種である事が解ったが、人の力でどうにか出来るものではなかった。

「ここに留まれば全滅は免れないでしょう・・・」

女魔術師は、静かに言った。こんな状況でも冷静なフェイラの言葉に、カルマは怒りを覚えたが、それが正しい事はカルマにも解っていた。

「・・・逃げるしかありません」

フェイラは静かにそう言うと、カルマに眼を向けて珍しく残念そうな顔をして見せた。

カルマは平原で暴れている竜を見ながら、その言葉に逡巡を覚えていた。騎士団長として国王から兵を預かる身で、逃げ出す事に抵抗があったのだ。

前方から、兵達の阿鼻叫喚の叫びが聞こえてくる。逃げ遅れた兵達は、それでも戦おうとしている者もいた。だが、渾身の一撃だったのだろう振り下ろした剣は。空しい音を響かせて竜の鱗を滑っていた。傷一つ付かなかつたに違いない。剣を振り下ろした騎士が、竜の振り回した腕に上半身を & a m p ; # 2 5 4 4 5 ; がれて、血飛沫を上げて倒れていく。

石壁の中の兵は、向かってくる竜に身を震わせながら武器を構えて、カルマの指示を待っていた。

と、その時であった。

竜は、その巨大な体躯に似合わない小さな翼を広げて宙へ舞い上がると、そのまま石壁の上を目掛けて飛んで来たのだった。思わぬ成り行きにカルマは、とっさ咄嗟に振り返って女魔術師を抱きかかえる様にして、石畳の上へ転がっていた。

カルマは愕然としていた。先ほどまで自分のいた場所が崩れて、巨大な竜の身体が石壁にめり込むように、その場にあった。周りには側近の者や騎士達の倒れている姿が見える。石壁の周りにいた兵達は、カルマが死んだものと思っただけ、悲鳴を上げながら逃げ出していた。

カルマは、フェイラに乗りかかる様な格好で石畳の上に伏していた。フェイラは背中を打ったらしく、顔を歪めている。

竜は、石壁にめり込んだままこちらを見ると、薄く口を開けながらゆっくりと上を向いた。

「火を吐きます、お逃げくださいっ」

フェイラが切迫した声で叫んだ。

竜がゆっくりとこちらを向きながら口を開き始めた。

間に合わないっ

カルマは自分の身体でフェイラを覆うようにしながら顔を伏せた。

ミーゼは愕然としていた。

先ほど、王国の魔術師が唱えたのだらう魔法が陣地の右手を襲っていた。

“サモンズ・メテオ隕石召還”の魔法であった。それは帝国兵の多くを飲み込んで、甚大な被害が出ていた。

ミーゼは一人の部下に、馬から引きずり下ろされて地面に押し付けられた。その上に部下が自分を庇う様にして身体を乗せてきたのだ。その部下は背中に酷い火傷を負い、絶命していた。乗っていた馬は黒焦げになって倒れている。その傍に、ベイグナルも倒れていた。ベイグナルはとっさ咄嗟に唱えた魔法の障壁によって一命を取り留めていたが、左頬には無残な火傷を負っていた。

辺りは焼け野原であった。空から落ちてきた巨大な石は、まだ赤く熱を持って辺りを焦がしている。

「魔術師殿、無事か？」

ファルモスが数人の部下を連れて、困惑した様子でこちらへ向かっ

てくる。

「お、おのれーっ」

醜い罵声を上げながら、よろよろと立ち上がったベイグナルは、我を忘れた様に憎々しげな眼を平原へ向けると、寝台のあった場所へ行き、何かを探した。

目的の物が見つかり、ミーゼに自分の身体を支えてくれと吐き捨てるように言った。

ミーゼが動くのも待たずに、寝台のあった場所から探し出した一本の短いワンド魔術棒を構えて、ベイグナルは魔法の詠唱を始めた。ファルモスはとりあえず、辺りの火を消して陣形を整えるように命じると、魔術師の行動を近くで見守っている。

ミーゼはそのワンド魔術棒に見覚えがあった。

それは砦に立てこもる最後の敵兵達を、一瞬で葬った魔物呼び出す力のあるワンド魔術棒だった。

だが、先ほど魔術師は大量の妖魔を召還している。今は魔法を使えるだけの精神力は残されていないのではないのか。そんな疑問が頭をよぎった。

しかし、ミーゼはそれ以上考える事ができなくなっていた。ベイグナルの後ろで、彼の身体を支えていた自分の身体から急に力が抜けていくと、ミーゼはそのまま気を失ってベイグナルに寄りかかるように倒れてしまったのだ。その顔は蒼白だった。

ベイグナルは、魔術師が禁忌としている魔法を使ってミーゼの精神力を吸い取っていたのだ。魔術師の顔色は、生気を徐々に取り戻していった。その表情は、冷酷なものになり、眼には邪悪な光りが宿っていた。

「ふははははっ」

急に笑い出しながら、ベイグナルは両手を高々と上げてからワンド魔術棒を振り下ろして平原の方へ向けた。

次の瞬間、平原の入り口の手前に、鮮やかな赤い色をした竜が出現した。

そして、その竜は身体をよじるようなしぐさを見せた後に、少し上を向いてから、平原の方へ口を開きながら顔を向けた。

ぐおおー

竜は炎を吐いたのだった。

平原の入り口で戦っていた妖魔と王国の兵達が飲み込まれて消し炭になっていく。

「あーはっはっはっ、私を怒らせると、どうなるか思い知らせてやるっ」

魔術師は声高に笑いながら吐き捨てるように叫ぶと、竜を前進させていった。

「全軍進撃の合図を出せっ、魔術師殿と同じ距離を保って進むぞっ」
ファルモスがそれを見て指揮を執る。怪我をして動けない者は、陣地に残っているように付け加えている。

王国の兵は悲鳴を上げながら、蜘蛛の子を散らした様に逃げ始めている。

ファルモスは、その光景を楽しそうに見ていた。味方の兵や戻ってきた妖魔達も、雄叫びを上げながら、逃げ遅れた敵兵を血祭りにしていく。

魔術師と同じ距離を保ちながら、敵の残党を始末して平原の中央辺りまで進んでいった。

敵は恐慌をきたしながら、ほとんど逃げ惑うだけであった。何人かの敵が竜に切りかかるが、次々と竜の鋭い鉤爪に鎧ごと身体を引き裂かれていった。敵の本隊は村の中へ逃げ込んだ様だった。

魔術師は薄汚い笑みを浮かべながら、そんな竜を満足そうに見つめていた。

しばらくして竜は、その鋭利な鉤爪を叩きつける相手がいなくなると、小さな翼を広げて舞い上がり石壁の上へ跳んでいった。

竜は、その巨体を石壁の上へ着地させた。その瞬間、古い石壁は竜の体重を支えられずに、ガラガラと音を立てながら外側が崩れていった。竜は、崩れて沈んだ部分に身体をめり込ませる様にしてバラ

ンスをとると、少し上を向いてから顔を左に向けた。
炎を吐こうとしているのが、ファルモスにも解った。

だが、竜が口を開いたその時だった。

突然、村の中から白く眩い光りがあふれ出した。何かガラガラと崩れる音が聞こえてくる。

「なっ、なんだっ？」

慌てた魔術師の声がある。周りにいる兵達も騒ぎ始めている。

次の瞬間、村の中から溢れ出た光りは、その場にいた全ての者の視界を奪うほど強く、神々しい輝きを放つと、次第に収まっていった。

ゴトツ

何かが落ちて転がるような音が聞こえてくる。

ようやく眼が見えるようになったファルモスは、そこに信じられないものを見ていた。

先ほど炎を吐こうとしていた竜が、身体を石壁にめり込ませたままの状態で、首から上が無くなっていたのだ。竜の首は石壁の外側に、無造作に転がっている。

だが、ファルモスが不健康そうな顔をさらに青白くさせている理由は、そんなものではなかった。

城壁の、首の無い竜の向こうに、それは浮かんでいた。

それは、とてつもなく巨大な竜であった。

薄青色の鱗が沈みゆく月の光に晒されて、幻想的な輝きを放っている。人ほどもある大きさの双眸は、眼の前にいる自分達を嘲笑うように見下ろしていた。

バイグナルの召還した竜の数倍はある巨体を、身体には似合わない小さめの翼をゆっくりと動かして、宙に留まっている。

《異界の住人どもを、再び呼び出しているのはお前達か》

その威圧する様な低音の声は、静かにその場にいる者全ての頭の中に直接響いてきた。

と、その時だった。蒼い竜は巨大な顔を上空に向けると、この世の

ものとは思えない凄まじい咆哮を上げた。

蒼い竜のあげた咆哮があまりにも凄まじかった為に、暗い夜の空に浮かんでいた雲が竜の上空から四散していく。現れた月の光りが蒼い竜の巨大な身体に降り注いで、神秘的な姿になっていた。

「ひいー」

ファルモスは、その耳を劈く咆哮を聞いて悲鳴を上げていた。すでに頭は混乱しており、正常な判断を下せる状況に無かった。

そのファルモスの声に、周りにいる兵達も堰を切った様に、一斉に悲鳴を上げながら背を向けて逃げ出し始めた。

「ま、待てー、私を守るのだ、置いていくな、馬鹿者っ」

ファルモスは情けない声を上げながら、村に背を向けて走り出した。「すばらしい・・・」

ベイグナルはそう呟くと、どこか夢を見ている様な表情で、ゆっくりと前に足を進めていく。すでに自らの召還した竜の事など目に入っていない様子だ。

蒼く輝く竜は、その巨体をゆっくりと動かしながら、こちらに迫って来ていた。

ベイグナルは逃げる事も忘れて、徐々に自分の上まで飛んで来る美しい竜を見上げていた。

竜は平原のほぼ中央まで来ると、そこへ着地した。

「！」

ベイグナルが我に返った時はすでに遅かった。逃げようとする間も無く、周りにいた妖魔達と一緒に竜の巨大な足に押し潰されていた。蒼い竜は、自分の潰した憐れな虫けら達の悲鳴など気付かず、そこでもう一度凄まじい咆哮を上げていた。

支配者を亡くして、その支配から解き放たれた妖魔達も、その咆哮に恐慌をきたして北や西の森の中へ蜘蛛の子を散らす様に逃げ込んで行く。

カルマはその光景を、フェイラの上に乗ったままの格好で見っていた。

敵の竜の炎によって焼き殺されようとした、まさにその時、それは現れたのだ。

村の広場に開いた穴の淵が、竜の身体によって広げられて、ガラガラと音を立てて崩れいた。

巨大な竜だった。神代の時代に生きた古竜なのだろう。自分を襲っていた竜など足元にも及ばない存在に思えた。

カルマは気付いてはいなかったが、その蒼い竜は、鋭い鉤爪を一閃させると赤い竜の首を切り落としていた。

王国の兵達も、突然穴の中から飛び出してきた巨大な蒼い竜を見上げて、驚きのあまり立ち止まっていた。

《異界の住人どもを、再び呼び出しているのはお前達か》

突然、頭の中に威圧的な太い声が響いてきた。

その声が、その巨大な竜から発せられたものとすぐに解った。竜は凄まじい咆哮を上げると、北の平原へゆつくりと翼を動かして跳んでいく。

カルマはその様子を、首を動かしながら見ていた。

帝国兵が逃げていくのが解る。蒼い竜は平原の中央辺りに下りるともう一度威嚇するように、一際巨大な咆哮をあげて足元にいた妖魔達も追い払った。

「カルマ様」

フェイラの声がした。カルマは自分がまだ女魔術師の上に乗ったままだと気付くと、慌てて身体を起こして彼女を解放した。

「す、すまぬ。」カルマは照れながら言うと、再び平原に眼を向けた。フェイラも身体を起こして平原へ視線を向けた。

しかし、そこにいたはずの蒼い竜の姿はすでに無く、遙か上空に舞い上がったところであった。

「お、終わったのか？」

カルマは呟いた。

「ええ、そのようですわね・・・」

フェイラが白い肌をほんのり赤く染めながら、そつと答える。

すでに敵の兵や妖魔達の姿は見えず、東の空はうつすらと白み始めて夜の終わりを告げていた。

石壁の周りでは、生き残った騎士達が武器を振りかざしながら歓声を上げていた。

両手をあげながら、竜に手を振って喜ぶ者、涙を流しながら歓声を上げている者もいる。

騎士達は次第に集まり、人だかりを作っていく。その人だかりの中心に、アルス達はいた。

アルスは眼に包帯が巻かれ、それをセリルとエイグが支えて、石壁の方へ向かって歩いていった。

「おお、無事に帰ってきたか」

息子の姿を見つけたカルマは、その眼に巻かれた包帯を心配そうに見たてていたが、それでも父親の表情になって無事を喜んでいった。

カルマは上空で旋回している蒼い竜をもう一度見上げると、一言礼を呟いてから立ち上がった。

騎士達はカルマの姿を見つけると、一際大きな歓声を上げて無事を喜んだ。

蒼い竜は旋回を止めると、もう一度咆哮を上げた。どこか今までと違い、嬉しそうな雰囲気を感じられるそれであった。

そして、数百年ぶりの肉体を楽しむ様にゆっくりと、東の空へ溶ける様に飛んで行った。

蒼い竜の消えた東の空には雲ひとつ無く、長い夜の終わりを告げる様に、白み始めた山々の頂が徐々に明るくなりつつあった。

エピローグ第一章完結

エピローグ第一章完結

アルスは自宅の寝室で寝ていた。

窓の外にある木の枝にとまっているのだろう、小鳥達のさえずりが聞こえてくる。外は晴れて暖かい日差しが入ってきていた。

「アルス、紅茶を煎れたわ」扉を軽く叩く音が聞こえて、人が入ってくるのがわかる。

「ああ、セリル、ありがとう」

アルスは包帯をしたままの眼を扉の方へ向けて小さく言った。

「包帯も替えましょうね」セリルは持ってきた紅茶を、ベッドの脇にある円形の机の上に置くと、新しい包帯を用意してアルスの巻いている包帯を取ろうとした。

「しっ」

アルスがそんなセリルを遮って、指を縦にして口に当てる。

「ほら、聞こえないかい？」

アルスは、何だろうと不思議そうにしているセリルに小さい声で言った。

「眼を閉じてごらん、聞こえるだろう」

セリルも眼を閉じて耳を澄ましてみる。

「窓の外にいる小鳥達が、セリルに挨拶しているよ」少年はクスクス笑いながらセリルの反応を待った。

「ええ、聞こえるわ」セリルは、久しく聞いていなかった故郷の森の音を思い出しながら、そう小さく答えた。そのセリルの表情には、アルスのまだ見ない明るい笑顔が浮かんでいた。

ここはシエルバリエ森林と草原の王国のほぼ中央に位置する王都。その郊外にあるアルスの家の一室に二人はいた。帝国兵の侵攻を退

けて、すでに一月ほど経っていた。

アルスは古竜へ、その力を借りる代償として眼の色を捧げたのだ。当然、伝承の通りに命が失われると思っていた皆は、思わぬ幸運に喜んだ。

古竜の話によると、力を貸すにはそれに伴った代償が必要であるとの事であった。いかに古竜といえども、願いに見合わない代償を得る事はできないのだという。妖魔達を追い払うだけであれば、その昔、竜と供に暮らした一族の神官の血を色濃く残した、アルスの蒼い眼の色だけで十分だと古竜は説明したのだった。

古竜は、蒼い眼の色を捧げられて薄青色の実体を手に入れると、アルスの願いをかなえるために広場に開いた穴から飛び立ったのだ。その背に赤き乙女を乗せたまま。

アルスは視力も失っていた。だが、古竜によれば、しばらく経てば見えるようになるとの事であった。だが、永遠とも思える時間の中を存在してきた古竜の“しばらく”が一体、何時の事かは判らなかったのだが。

その為アルスは、傷病兵達と供に王都へ返された。

エイグも護衛の任務を与えられて、一緒に王都へ帰って来ていた。

今は王宮警備の任を与えられ、兵舎で生活している。

セルルは、アスターの家に厄介になる事になっていた。だが、自分が代償を捧げるはずだった役目を、アルスが替わりにした事へ何か感じている様子で、カルマに頼み込んでアルスの世話をする為に同行して来たのだった。

事情を知るカルマは、それを快く許してくれた。

カインは仇の一人である魔術師の死を確認すると、しばらく騎士団と行動を共にするとの事であった。彼の昔の事は良く判らないが、カルマは事情を知っているようで歓迎していた。

騎士団はティルトの北の小さな平原を要塞化し、北の砦への足掛かりにする事になっていた。

避難していた村の者達も帰ってきた。

北の砦は奪われたままだが、深手を負い、南へ派遣した兵のほとんどを失った帝国は、東の隣国へも遠征している。今や、こちらへ兵を派遣する余裕は無い様に思えた。

アスターやジェイズはティルト復興のために村へ残り、懸命な毎日を送っているようだ。

国王レイリック八世は知らせを受けると、すぐさま近隣諸国と同盟を結ぶ為にその外交手腕を発揮しているようであった。その為、諸国の代表者を集めた会議がザーナ魔法王国で開かれる事が決まり、代理人を派遣していた。

「小鳥の声なんて、久しぶりだわ」

二人の笑い声が聞こえてくる。

「はい、おしまい」セリルはアルスの包帯を新しい物に替え終わると、にこつと笑ってアルスの手に煎れてきた紅茶を持たせる。

「ありがとう」アルスの言葉にセリルは笑って、ちょうど良い冷め具合よと、笑顔で言って部屋を出て行こうとした。

「セリル、いつもありがとう」

アルスの言葉に、微笑を浮かべながらセリルは振り返った。

「気遣ってもらったお礼よ」

セリルはそれだけ言い残し、きょとしたアルスを置いて足早に部屋を出て行った。

窓の外からは、秋の紅葉も落ち着いた木々の枝から、少女の赤くなつた顔を笑う様に、小鳥達のさえずりが静かに聞こえて来ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6077c/>

青い瞳の少年とドレイク

2010年12月13日01時12分発行